

目次 150～170P へ、ふっ。A5 へ 85P か。

出雲の実家にて.....	5
そんな休日もあってよい 一回校正.....	28
先生と教授とぼく.....	43
AIと渡海先生が仲良くなれる可能性 1 回校正済.....	62
仮眠室の炊飯器にまつわるエトセトラ 1 回校正済.....	68
「オペ室の悪魔」復活の儀 校正前.....	77
秘密の教授室 校正前.....	96
メンタル・ブレイキング・レター.....	117

天才外科医の双子な日々	136
生き別れの兄弟のおはなし	164
黄金のニワトリ産卵ショー	165
校正前。そもそも入れるかどうか	165
あとがき	172

出雲の実家にて

第一章「思いがけない来客」

窓の外では、十月の風が病院の銀杏の枝を揺らしていた。黄金色に染まった葉が、時折舞い落ちては中庭の石畳を彩る。出雲の秋は、東京よりも一足早かった。

「渡海先生、次の手術の準備が整いました」

「ああ」

渡海征司郎は、無愛想に返事をしながらカルテに目を通していた。地方都市の市民病院。東城大
学病院から移って半年が経つが、相変わらず彼の周りには緊張感が漂っていた。それは彼の腕を
恐れていることではない。皮肉めいた物言いと、時に容赦のない指摘を繰り返す性格を、誰もが警
戒しているのだ。

ナースステーションでは、三人の看護師が密やかな会話を交わしていた。

「渡海先生って、東城大にいた時は佐伯教授の愛弟子だったって本当？」

「えー、あの不愛想な渡海先生が？」

「でもね、手術の腕は確かなのよ。先週の緊急手術、完璧だったわ」

「ねえねえ、実はもっと深い関係が……」

病院の医局員たちはひそひそ噂する。「やっぱりあの話は本当なんじゃないの」

それは、前に渡海が東城大にいた時の話だった。

渡海はよく、真夜中に仮眠室からこっそり教授室に赴いては、何事もなかったかのように部屋に

戻る姿が当直の医師に目撃されていた。佐伯の方も、カンファレンス終わりにほとんど必ず渡海にちよっかいかけている、と医局員たちのなかでもつばら話題だった。

また、渡海が帝華大へ移って、また東城大に帰ってきたとき、彼の給与を元の倍に昇給させたのは、裏で佐伯が手を回したから、という噂があった。さらには、そもそも田舎の市民病院で働いていた渡海を東城大に引き入れたのは、佐伯である、などという噂まであった。

たしかにオベの腕において、佐伯の次は渡海である。だとしても、上記の事例を踏まえると、あまりに目をかけすぎではないか、と思われる節があるのも事実であった。

佐伯はあの歳で独身、とすればもしかして渡海とは愛人関係にあるのでは……と心無い噂が、当時の看護師や医局員の中で広がっていた。そこには佐伯の寵愛を一身に受ける渡海への嫉妬が背景にあった。

当時、東城大にやってきたばかりの高階はこの噂に大変立腹した。

噂話に花が咲く中、渡海は研修医の報告に目を通していった。

「先生、あの、術前検査の結果なんです……」

「おい、それ逆だぞ。この数値が出てるのに、なんでこんな判断するんだ？ ペースメーカーの適応、もう一度考え直せ」

研修医が差し出した心電図に、渡海は眉をひそめる。若い医師の頬が引きつるのが見えた。

「すみません！」

「まあいい。今からやり直せ。で、次の手術は？」

「はい、二尖弁による重度の大動脈弁狭窄症です。78歳女性、併存疾患として……」

その時、ナースステーションが突然、ざわついた。

「え？佐伯教授？」

「本当？東城大の？」

「あの佐伯清剛先生が？」

「まさか、渡海先生に会いに？」

聞き覚えのある名前に、渡海は思わず顔を上げる。廊下の向こうから、五十がらみの男性が近づいてくるのが見えた。温和な表情の中に秘められた鋭い眼光。グレーのスーツに身を包んだ姿は、いつもと変わらない佐伯清剛そのものだった。

「久しぶりだな、渡海」

佐伯の穏やかな声に、周囲の視線が集まる。東城大学病院の院長が、なぜこんな地方の病院に？しかも、あの渡海先生のところへ？看護師たちの間で、小さな囁きが交わされる。

白衣の裾が風になびく。窓から差し込む午後の陽が、佐伯の姿を淡く照らしていた。

「わざわざ来る必要はなかったろう」

渡海は、聞こえてくる囁きに眉をひそめながら言った。

「外科学会の帰りだね。ちよつと寄り道をさせてもらった」

そう言いながら佐伯は、辺りを見回した。清潔な廊下、整然と並んだカルテ、テキパキと動く医療スタッフ。

「相変わらずだな」

「ただの市民病院ですよ」

二人の会話を、医局員たちがこっそりと聞き耳を立てている。東城大での噂は、ここでも知る人ぞ知る話題だった。佐伯教授と渡海先生は、かつて……。若手看護師の一人が先輩に耳打ちする。

「ねえ、本当なの？あの噂……」

「まあ、でも見てごらんさない。空気が違うでしょう？」

確かに、普段の渡海からは想像もつかない距離感があった。皮肉めいた言葉の裏に、何か深いものが垣間見える。

「先生、次の手術の時間です」

気になる視線を背中に感じ、苛立ちを隠せない渡海だったが、看護師長の声に、渡海は我に返ったように佐伯に背を向けた。

「用があるなら、後にしてくれ」

「ああ、そうだな。何時頃終わる？」

「定時のはずだ」

「では、終わったら連絡をくれないか」

渡海は答えずに手術室へ向かった。その後ろ姿を、佐伯は静かな目で見送った。

＊

「クランプ」

「はい」

手術室では、渡海が予定外の緊急手術に取り組んでいた。若い男性の急性大動脈解離。予定手術を終えた直後に飛び込んできた症例だった。

「出血量は？」

「850cc です」

「もう少しだ。吸引」

無駄のない動きで手術は進む。誰もが緊張感を持って渡海の手元を見つめている。その集中力は、かつて東城大で佐伯から学んだものだった。

「じゃあ、あと縫合はよろしく」

「お疲れ様でした」

手術室を出る時、時計は既に夜の九時を回っていた。渡海は思わずため息をついた。カルテの記入を終えた渡海は、ため息まじりにスマートフォンを取り出す。メールを送ると、すぐに返信が来た。

「玄関で待っている」

「渡海先生」

廊下で夜勤の看護師が声をかけてきた。

「佐伯教授が探しておられましたよ」

「ああ」

そっけなく答えて歩き出す。後ろから聞こえてくる囁き声。

「ほら、言わんこっちゃない」

「佐伯先生、ずっと待っていらしたのよ」

「まるで、恋人同士みたい……」

渡海は眉間にしわを寄せた。根も葉もない噂なら勝手にしろと思う一方で、佐伯の立場を考えると……。東城大の院長という地位にいる人間が、変な噂の的になるのは良くない。

夜の帳が降りた病院の玄関に着くと、佐伯は外のベンチで静かに座っていた。街灯の明かりが、その横顔を優しく照らしている。秋の夜風に吹かれる姿は、どこか寂しげに見えた。

「お待たせしました」

「いや、緊急手術があつたんだろう？大動脈解離と聞いたが」

心配そうに渡海を見る佐伯に、渡海は目を逸らす。相変わらず、病院中に耳があるようだ。

「久しぶりに一杯やらないか？」

「こんな時間です」

「ああ、そうだな。もう居酒屋も……」

佐伯がスマートフォンで近くの店を探し始める。が、案の定、営業している店はほとんどない。田舎町の悲しい現実だ。渡海は少し考えてから、意を決したように言った。

「……うちに来ますか？」

「え？」

「母ちゃんも、佐伯先生にいつもよろしく、よろしくつてうるさいし」
佐伯は少し驚いた表情を見せた後、柔らかな笑みを浮かべる。

「いいのか？」

「今から電話します」

スマートフォンを取り出す渡海。母親との電話越しの会話を聞きながら、佐伯は懐かしい気持ちに包まれていた。かつて渡海の父、一郎が生きていた頃。四人で旅行に行ったこともあった。溪流釣りに興じる一郎と、それを笑顔で見守る春江。そして、まだあどけなさの残る渡海の横顔。あの頃の渡海は、もっと素直に笑っていたような気がする。

夜風が二人の間を吹き抜けていく。銀杏の葉が、月明かりに照らされて舞い落ちる。

「タクシー、呼びましょうか」

渡海の声で我に返る。佐伯は静かに頷いた。夜の街を走るタクシーの中で、二人は黙って車窓の景色を眺めていた。その沈黙は、不思議と心地よかった。

街灯が点々と灯る住宅街を進みながら、渡海は考えていた。この状況が、明日は確実に新しい噂を生むだろう。それでも、今このタクシーの中にいることを後悔してはいなかった。

「すまないな、こんな時間に」

「いいですよ。たまには、こういうのも」

渡海の言葉に、佐伯は微かに目を細める。医局での噂は、明日もきっと新しい展開を迎えることだろう。しかし今は、この静かな時間を大切にしたいかった。タクシーは、出雲の夜の街を、ゆつくりと走っていった。

第二章「母の夕餉」

十月の夜風が、古い日本家屋の軒先を揺らしていた。玄関先の石灯籠に残る雨滴が、街灯に照らされてかすかに光っている。渡海の実家は、新興住宅が立ち並ぶ中で、昭和の趣を静かに湛えていた。

「まあ、佐伯先生！本当に！」

玄関を開けた春江の声には、抑えきれない喜びが滲んでいた。夜遅い突然の来客を詫びる渡海の言葉も耳に入らないほど、春江は目を輝かせている。白髪まじりの髪を整えながら、何度も何度も会釈を繰り返す。その仕草には、昔から変わらない温かさがあった。

「失礼します」

「いいえ、どうぞどうぞ。征司郎ったら、もっと早く連絡してくれば良かったのに」

佐伯が玄関を上がると、懐かしい家の匂いが鼻をくすぐった。畳の香り、古い梁の匂い、そして奥から漂う出汁の香り。廊下には、一郎が生前好んでいた山野草の掛け軸が、いつもの場所に飾られている。この家に来る度に、佐伯は不思議な安堵感を覚えるのだった。

玄関の古い下駄箱の上には、一郎と渡海が昔釣りに行った時の写真が置かれている。若かりし日の渡海的笑顔が、ガラス越しに佐伯を見つめていた。

「お邪魔して申し訳ありません」

「何を言つてらっしゃるんです。征司郎の恩師なんですから、ご遠慮なく」

春江は手早く居間の明かりを点け、座布団を出し始めた。その動きには年齢を感じさせない軽やかさがある。長年の習慣が、体に染みついているようだった。来客時の作法、もてなしの手順。すべてが自然な流れで進んでいく。

障子を開ける音、座布団を置く音、茶器を用意する音。一つ一つの所作に、長年この家を守ってきた女性の品格が感じられた。

「お待ちください。すぐに何か温かいものを」

「いえ、そんな」

「だめですよ。せっかくいらしたんですから」

春江は既に台所へと消えていった。夜風に乗って、出汁を温め直す音が聞こえてくる。包丁の音、まな板を叩く音、鍋の音、お椀の触れ合う音。それは、まるで小さな交響曲のように心地よく響いていた。

「母さん、いいよ。こんな時間だし」

「征司郎、黙っていなさい」

春江の声に、渡海は思わず口を噤んだ。普段は毅然とした態度の渡海が、母の前ではまるで子供のように素直になる。佐伯は、その様子を見て微笑まずにはいられなかった。

台所からは、手際の良い料理の音が次々と響いてくる。春江は、まるでこの日のために準備をしていたかのような手際の良さで、次々と料理を作り始めていた。時折、「あら、これも作っておいて良かった」という独り言が漏れ聞こえてくる。

居間の障子越しに、庭の木々が風に揺れる影が映っている。古い柱時計が、静かに時を刻んでいる。佐伯は、この家の時間の流れ方が好きだった。少し前までの病院の喧騒が、まるで遠い世界のこのように感じられる。

「本当に、ご無沙汰してしまって」

「いいえ。お忙しいのは分かってます」

春江は、一度居間に顔を出しながら言った。その表情には、懐かしさと喜びが混ざっている。暖かな照明に照らされた横顔は、一郎の遺影と微かに重なって見えた。

「でも先生、征司郎がまた東京に戻ってからは、寂しくて」

ふと春江の声が潤んだ。佐伯は黙って頷いた。渡海は少し顔を背けている。息子の仕草に、春江は一郎の面影を見たのかもしれない。

「佐伯先生、少しこちらへ」

春江は、佐伯を台所の隣の小さな和室へと案内した。障子を開けると、線香の香りが漂ってくる。古い筆筒の横には、一郎の遺影が飾られている。佐伯は思わず手を合わせた。遺影の一郎は、いつものように穏やかな笑みを浮かべている。

「先生」

襖を閉めた春江の声は、少し沈んでいた。畳の上に置かれた座布団は、日に干したばかりのよう

な清々しい香りがする。窓の外では、虫の音が静かに響いていた。

「征司郎のこと、お願いします」

「春江さん……」

「主人が亡くなってから、あの子、変わってしまった」

「東京に行くって言い出した時も、止めることができなくて。でも、先生の近くなら……そう思っていたんです」

春江の瞳が、また潤んでいく。

「ですのに、ある日突然、東城大を辞めると言い出して。何があったのか、私には何も話してくれなくて」

佐伯は黙って春江の言葉を聞いていた。渡海が東城大を去った理由。それは……

「先生なら、あの子のことを分かってくださる。主人も、いつもそう言っていました」

春江の声には、深い信頼が込められていた。佐伯は、重い責任を感じずにはいられなかった。

「私にできることは」

「ただ……そばにいてやってください」

春江は深々と頭を下げた。佐伯も、同じように頭を下げる。二人の間に、静かな了解が流れた。

「では、征司郎を待たせては」

春江は立ち上がると、さっと表情を明るくした。そして、また台所へと戻っていく。その後ろ姿に、佐伯は思わず目を細めた。強い母親の姿があった。

居間に戻ると、渡海が静かに日本酒を温めていた。徳利からは湯気が立ち昇り、部屋に甘い香りが広がっている。それは、かつて一郎が好んで飲んでいた銘柄だった。

「どうぞ、先生」

渡海が差し出した盃を受け取りながら、佐伯は春江との会話を思い返していた。盃の中で、温められた酒が月光を湛えている。

「母さん、なんか変なこと言わなかった？」

渡海の声には、普段の鋭さは影を潜めていた。代わりに、どこか子供っぽい不安が混ざっている。「いや」

佐伯は微笑んで首を振った。渡海は疑わしげな表情を浮かべたが、それ以上は追及しなかった。テーブルの上には、父の形見の盃が並んでいる。三つの盃。一つは空のまま。

「はい、お待たせしました」

春江が、たくさん料理を運んできた。煮物、焼き魚、お浸し。どれも丁寧に作られた家庭料理だ。出汁の香り、醤油の香り、そして温かな野菜の香りが、部屋いっぱいに広がっていく。

「春江さん、こんなに」

「いいんです。せっかくの機会ですから」

春江はそう言うのと、さりげなく席を外した。着物の袖が、障子の陰に消えていく。気を利かせてくれていたのだ。居間には、渡海と佐伯だけが残された。

「では」

佐伯が盃を上げると、渡海も黙って盃を合わせた。温められた日本酒の香りが、部屋に漂う。かすかに聞こえる虫の音が、秋の深まりを告げていた。

「先生」

「ん？」

「なぜ、今日」

渡海の声には、いつもの尖った調子がない。代わりに、どこか切実な響きが混ざっていた。佐伯

はゆっくりと盃を置いた。テーブルに触れる音が、静かに響く。

「君の手術が見たくなつたんだ」

「はあ？」

「今日の手術、見させてもらったよ。手術室の窓から」

渡海は、言葉を失った。酒を持つ手が、わずかに震えている。佐伯は続ける。

「素晴らしい手術だった。まるで……」

言葉を途中で止める。しかし、渡海には伝わったようだった。

「先生ほどでは」

「いや、十分だ」

佐伯は、残った酒を一気に飲み干した。二人の間に、心地よい沈黙が流れる。月明かりが障子を透かして、畳の上に四角い影を作っている。

障子の向こうで、春江の気配を感じる。きつと、こっそり様子を伺っているのだろう。お茶を淹れる音が、かすかに聞こえてくる。渡海も気づいているはずだが、あえて声をかけることはしない。

「もう一杯どうですか」

「ああ、頼むよ」

夜は更けていったが、二人の話は尽きることがなかった。そして春江は、時折お茶を入れ替えに来るだけで、最後まで気を利かせて二人の時間を邪魔することはなかった。

「しかしなあ渡海お前」

「お前に抱きつかれたってなんも反応せんのだよなあ」

「それは良かった。そもそも抱きつかないので安心してください。気味悪いわ」

「ひどい言い草だな」

「そうだ、人工呼吸とかやったら皆どんな反応するんだろうか、ちょっと気になるな」

「試しに息でも止めてみようかな」

「アホか」

「……案外気にしてないんですね」

「まあ、お前がいてもいなくても、色々言われ慣れているんでな」

「それに、渡海に目をかけていたのは事実だ」

「ただ、お前の気持ちが大変だ。もし不快に思っているのなら私とてそれ相応の対応をするから、言ってくれ」

「俺は別に、他人がどう言おうとどうでもいいですが。先生が嫌じゃないなら」
「ならいいが。我慢はするなよ。思うところがあればいつでも言いなさい」

「渡海」

「何です」

「心配してくれてありがとう」

「……別に」

「〇〇歳以上離れてるんだぞ、そんなんお前、犯罪的だよ、普通有り得ないよなあ」

「爺さん相手に欲情なんて、自分はそののか、って話だ」

「てか、そんなしょうもないことを言ってる暇があったら自分の腕磨けよ、って、」
「ごもつともだ」

「でも、お前には殺されてもいいって今でも思っている」

「え、重……」

「愛人よりずっと重いじゃないですか」

「え、皆に聞かせたら喜ぶかな」

「悪乗りすんな」

「私の持っているもの、技術、資産、交友関係、全部あげたい」

「黒崎くんは誰よりも長い間、私を信じて献身的に支えてくれた。私は彼の恩に報いたいと常々考えている」

「高階くんだつてそうだ。東城大のこれからを任せることになるのは彼になるだろう、とさえ考えている……しかし」

「私個人が何かを残したいと思う相手は、渡海。お前ただ一人だよ」

「親父のことなら、もう恨んでませんから。むしろ俺が勝手に勘違いしてたのが悪かったんだ。あんたがずっと引きずる必要はない」

「確かに、一郎先生のことでお前に負い目があるのは事実だし、それは私が医者として生きる限り消えることは無い。ブラックペアンが私の手元からなくなることは決してない」

「……」

「だがな渡海。それだけではないんだ。私は、お前の外科医としての天分にほれ込んでしまった」
「いつの間にか佐伯式を習得していたお前を、ロボット手術や先進技術を難なくつかいこなしていくお前を、その成長をずっと見ていたい。いずれお前が私を超えるところを」

「先生も、俺に負けないよう精進してください。俺の尊敬する佐伯清剛という男は、ヒラの手術職人なんかよりずっと先をいつてないとダメです」

「俺も、先生のオベ、ずっと見ていたいから」

何のわだかまりも無かったころの笑顔

「いつかあんたが現役を退く日が来たら」

医者としての重圧から逃れて、ただの人になった時、そのときは、

「まあ、面倒見てやるくらいは、してやらないでも無いし」

「死にそうになったら、切って直せるもんは何だって治してやるし」
静かにそばで支えてあげたい。

「何というか……お前も大概あれだな」

「あれだ。まずはいい人を見つけよう。私が仲人をしてやるから」

「は」

「ああでも、猫田くんは君のことを慕っているようだったから、そっちの方がいいのか？」

「猫ちゃんはそのいうんじゃないんで。向こうも興味ないと思います」

「残念」

「いよいよお節介の母ちゃんみたいになってきたな」

「春江さんも、その年で独り身のお前が心配なんだ」

「母ちゃんでも嫌なのに、あんたなんか説得力すらないんだから、ほっといてください」

庭の木々が風に揺れ、月明かりに照らされた葉が銀色に輝いている。遠くで、夜行列車の音が響いた。それは、まるで時が止まったかのような、穏やかな時間だった。

一郎の遺影は、相変わらず優しい笑顔を浮かべたまま、この夜の光景を見守っているようだった。

第三章「噂の行方」

朝の病院の廊下に、消毒液の香りが漂っていた。十月の陽が窓から差し込み、白いタイルの床に長い影を作る。その光の帯を、渡海は少し重たい足取りで歩いていった。

昨夜の酒が、まだ少し体に残っている。本来ならば許されないことだと分かっている。だが、あの時の佐伯との酒席は、どうしても断れなかった。否、断りたくなかった。

「おはようございます、渡海先生」

看護師たちが、いつもより興味深げな視線を送ってくる。昨日の夜、佐伯と一緒に帰るところを

見られていたのだ。病院という閉じられた空間では、噂は驚くほど早く広がる。

「渡海先生、大丈夫ですか？少し顔色が」

「ああ」

返事をする声が、いつもより低く掠れていた。ナースステーションの前を通り過ぎようとする、看護師たちの囁き声が耳に入ってくる。

「昨日、佐伯先生とお帰りになったんですって」

「え、本当？」

「タクシーで一緒に」

「やっぱり、二人って……」

看護師長の田中さんが、年下のスタッフたちに注意するように目配せをする。しかし、若い看護師たちの好奇心は抑えられない。

「でも、佐伯先生ってずっと独身でいらっしゃるじゃない？」

「そういえば、渡海先生のお父様って」

「あの、すみません」

声をかけてきたのは、新人の山田看護師だった。真面目な性格で、いつも率直に質問をしてくる。

「佐伯先生とお食事は、いかがでしたか？」

その問いかけには、純粹な好奇心が滲んでいた。他の看護師たちも、息を殺して渡海の返事を待っている。普段なら即座に切り捨てるような質問だ。しかし今朝の渡海は、どこか気分が良かった。昨夜の温かな空気が、まだ体の中に残っているような気がした。

「とても楽しい時間だった」

渡海は、いつもの皮肉めいた表情を浮かべながら答えた。看護師たちの目が丸くなる。

「今度はお前たちも来るか？母の料理、美味しいぞ」

意表を突く提案に、ナースステーション全体が凍り付いたような静けさに包まれた。渡海は内心で笑った。

カルテを手に取りながら、渡海は考える。噂の種をまくのも、悪くない。むしろ、これで佐伯の立場を守るかもしれない。秘密めいた関係を想像させるより、オープンな付き合いを見せた方が、かえって余計な詮索を防げる。

「先生、次の患者さんの準備が」

「ああ、行く」

診察室に向かう途中、窓の外に目をやる。昨日と同じ銀杏の木が、今日も黄金色の葉を揺らしている。その光景が、どこか懐かしく感じられた。

＊

「渡海先生、昨日の緊急手術の患者さんの経過です」

研修医の森本が、カルテを差し出してきた。手術後の数値は安定している。術式の選択は正しかったようだ。

「ああ、この調子なら」

言葉の途中で、渡海は気づいた。森本の目が、やけに真剣だ。

「先生」

「なんだ」

「その、佐伯先生に教わった術式だったんですか？」

渡海は一瞬言葉を詰まらせた。確かに、昨日の手術で使った手技の多くは、佐伯から学んだものだった。それは意識せずとも、自然と体が覚えている動きだった。

「手術に師弟関係も何もない。正しい術式があるだけだ」

そっけなく答えながら、渡海は昨夜の佐伯の言葉を思い出していた。「素晴らしい手術だった」という評価。その言葉が、内心では嬉しかった。

「でも先生、手術室の見学窓から佐伯先生が見ていらしたって」

「聞いていたのか」

「はい。看護師さんから」

情報の伝達の早さに、渡海は少し眉をひそめる。しかし、それも仕方のないことだった。病院という密閉された空間では、噂は空気のように広がっていく。

「先生」

「まだ何か？」

「佐伯先生って、本当に……」

その時、ナースコールが鳴った。

「あ、すみません。失礼します」

森本は慌てて去っていく。渡海は深いため息をついた。「本当に」の後に続く言葉は、想像に難くない。父のような存在なのか。それとも、もっと特別な関係なのか。

窓の外では、救急車のサイレンが近づいてくる音が聞こえた。渡海は立ち上がる。今は、目の前の仕事に集中すべきときだ。

＊

「渡海先生、お昼はどうされます？」

声をかけてきたのは、ベテラン看護師の村井さんだった。いつもなら「忙しい」の一言で済ませるところだが、今日は少し違った。

「ああ」

渡海は白衣のポケットから、弁当箱を取り出した。春江が今朝、慌てて作ってくれたものだ。

「まあ、お弁当ですか？」

「母が」

その言葉に、周囲の視線が集まる。渡海が手作り弁当を持つてくることなど、まずなかった。

「実は、もう一つ」

村井さんが指さす方向には、もう一つの弁当箱が置かれていた。包みの上には「佐伯先生へ」という付箋が貼られている。

「朝、受付に届けられたんです。渡海先生のお母様が」

看護師たちの間で、小さなざわめきが起こる。渡海は軽く目を閉じた。春江の考えていることは、おおよそ検討がついた。

「私が預かっておく」

「はい。あの、渡海先生」

「なんだ」

「佐伯先生、本当にいい方ですよね」

村井さんの言葉には、からかいの色は一切なかった。純粹な感心の色が浮かんでいる。

「ただの偏屈な老人だ」

そう言いながらも、渡海の口元はほんの少し緩んでいた。昨夜の佐伯の姿。実家の縁側で、月明かりに照らされながら酒を飲む姿が、まぶたの裏に浮かぶ。

昼休憩の時間、渡海は屋上に向かった。いつもは人気がない場所だが、今日は誰かが先客のようだった。

「渡海先生」

声の主は、整形外科の川島医師だった。東城大の医局の後輩で、渡海の異動後、この病院に赴任してきた医師だ。

「川島か」

「佐伯先生の弁当、美味しそうですね」

川島の視線が、渡海の手元の二つの弁当箱に注がれる。

「見ていたのか」

「いえ、噂で」

川島は少し言いよんだ後、続けた。

「先生、東城大を辞められた理由、私にはよく分かりませんでした。でも……」

風が強く吹き、川島の言葉が途切れる。銀杏の葉が舞い上がり、黄金色の渦を作っていた。

「佐伯先生は、先生のことをずっと」

「余計なお世話だ」

渡海は話を遮った。しかし、その口調には普段のような鋭さがなかった。

「失礼します」

川島が立ち去った後、渡海は佐伯の弁当箱を開けた。中には、春江の愛情たっぷりの手料理が詰められていた。玉子焼き、煮物、焼き魚。昨夜の残りも、丁寧に詰め直されていた。

携帯が震える。佐伯からのメールだった。

「春江さんの手料理、久しぶりだ」

渡海は、返信を書きながら考えた。東城大を去った理由。確執や、手術での出来事。表向きはそうだった。でも本当は――。

「渡海先生、救急です！」

階段を駆け上がったってきた看護師の声に、渡海は立ち上がる。弁当箱を片付けながら、もう一度佐伯のメールを見た。

＊

夕方、外来が終わる頃。噂は新しい展開を見せていた。

「渡海先生って、実は優しい方なのかも」

「そうよね。今日の笑顔、初めて見たわ」

「佐伯先生のこと、本当に信頼してらっしゃるのね」

ナースステーションでの会話は、もはや昨日までの揶揄めいた調子を失っていた。代わりに、温かな理解の色が混ざっている。

「先生」

声をかけてきたのは、朝一番に質問してきた山田看護師だった。

「ご両親様の写真、素敵でしたね」

「え？」

「受付に、小さく飾ってありましたから」

そうか。春江が弁当を届けた時に、置いていったのだろう。おせっかいな母だ。しかし、その気持が理解できないわけではなかった。

「佐伯先生と、よく似てらっしゃいますね。お父様」

山田の言葉に、渡海は思わず足を止めた。確かに、父と佐伯は似ているところがあった。医師としての厳しさ、そして、その奥に秘めた優しさ。

「先生？」

「なんでもない」

渡海は歩き出す。廊下の窓から、沈みかけの太陽が差し込んでいた。夕暮れの光が、白衣を黄金

色に染める。

カルテを整理しながら、渡海は考えていた。噂の種をまいたのは正解だったかもしれない。これなら、佐伯の立場も守られる。そして、自分自身も――。

携帯が再び震える。今度は春江からだった。

「佐伯先生、お弁当は召し上がってくださった？」

返信をしながら、渡海は微かに笑みを浮かべた。昨日のような夜が、またいつか訪れる。そう確信していた。

窓の外では、銀杏の葉が夕陽に照らされて輝いていた。病院の中を駆け巡った噂は、今や「あの二人、やっぱり親子みたいですよ」という温かな理解へと変わりつつあった。

それは、あながち間違いでもないのかもしれない――。そう思いながら、渡海は今日一日の診療記録を書き始めた。医局の噂は、きつとこれから新しい展開を見せるだろう。でも、それはそれで構わなかった。

重要なのは、目の前の患者のこと。そして――。

渡海は、佐伯からのメールをもう一度開いた。

「今度は、一緒に手術をしよう」

その言葉に、心が静かに温かくなるのを感じながら、渡海は返信を打った。

「はい」

たった一言の返事。しかし、その中には、父への思い、佐伯への信頼、そして新たな一步を踏み出す覚悟が、確かに込められていた。

そんな休日もあつてよい 一回校正

初夏の柔らかな日差しが、桜宮の郊外の、小さな駅のホームを優しく包み込んでいた。平日なら通勤客で賑わうこの駅も、日曜日の朝はひっそりとしている。そんな人気のまばらな小さな駅の改札では、一人の男が腕時計をちらりと確認していた。

「珍しくお前の方が早かったな」

突然背後から声がして、渡海は肩をピクリと震わせた。振り向けば穏やかな表情の佐伯がそこに立っていた。

「……佐伯先生」渡海は小さく頷きながら挨拶した。相変わらずの仏頂面だったが、目元にはかすかな安堵の色が浮かんでいた。

「およそ半年ぶりか。元氣そうで何よりだ」佐伯はそう言いながら、渡海の横に並んで立った。

「まあ」渡海は素っ気なく答えた。二人の間には、久しぶりの再会を喜ぶような空気が漂っていた。しかし、それを素直に表現することは、どちらにとっても難しいようだった。親しげなやり合い声で、佐伯は渡海に問いかけた。

「行先は、私に任せてもらってもいいかね」

「ええ。あんたが急に呼び出したんですからね。俺はなんも、用意とかしてないし」
——明日、久しぶりに時間が取れそうなんだが、駅前で会えないか。

そんなメールが渡海の元に届いたのは、昨日の夕方過ぎ、渡海が今の勤務先での最後のオペを終えて、ちょうど休憩に入ったその時だった。佐伯は目を細め、地図の表示された自分のスマートフォンを見せた。

「桜宮市に最近できた、この大型ショッピングモールに行こうと思うんだが、どうだ？」

画面を見て、渡海は眉をひそめた。

「人が多いんじゃないですか？ それに、東城大からはたった四駅しか離れてない」

「人混みに紛れておけば問題ない。病院を一步出たら、我々は別に有名人でもないのだし」

「それは確かにそうだろうけど……」

いまいち納得のいっていない様子の渡海だったが、いそいそと券売機の方へ向かう佐伯をみて、黙って着いていくことにした。

しばらくして、駅のホームにガタンと音を立てて電車が到着した。二人は人の少ない後ろの車両に乗り込んだ。座席に腰を下ろした二人はしばらくの間、無言で外を眺めていた。車窓の外には、のどかな郊外の風景が流れていく。都会というには建物に高さが足りず、かといって田舎というには灰色の多すぎる景色は、病院のビオトープの人工的な自然か、ネオンがあちこち煌めく夜の大会に慣れ親しんだ二人にとってはむしろ新鮮に映った。

渡海は周囲を警戒つつも、小声で佐伯に話しかけた。

「……先生は相変わらずお忙しいんですか」

佐伯は少し疲れたような笑みを浮かべた。

「ああ、まあね。病院長の仕事は終わりがない。だからこそお前をこうやって呼び寄せて、気分転換をしようというわけだがね。付き合わせて悪いな」

「……いや」渡海は目を伏せ、唇を噛み締めたままそれ以上は何も言わなかった。

「そうだ」突然、佐伯が思い出したように自分の鞆を開け、中から何かを取り出した。

渡海が顔をあげると、佐伯の出した帽子とサングラスが視界に入った。眉をひそめる渡海に、佐伯が嬉しそうに語り始めた。

「作戦資材だ。先程あんなことを言っておいて何だが、お忍びで出かける著名人の真似をしてみ

ように思つてな」ほら、時々患者をこっそり裏口から送り出すことがあるだろう？ わた寸志も一度送られる側になつてみたいと思つていたんだ――。そんな佐伯の言葉に、渡海は呆れたような表情を浮かべた。

（自分より二十ほども年上なのに、子供っぽいところもあるもんだ）

だけれども、この人が時折見せるお茶目さが、渡海は嫌いではない。

「馬鹿みたいだな」渡海はぶっきらぼうに言いつつも、佐伯の差し出した作戦資材とやらを受け取つて身に着けてやつた。

「似合うじゃないか」佐伯は満足げに頷いた。渡海も鼻で笑いつつ、内心少し楽しくなつていた。

電車は、二人を乗せてゆつくりと目的地へと向かつていった。車窓の外では、初夏の陽光がキラキラと輝いていた。

ショッピングモールの入り口に立つ二人の姿は、どこか滑稽だった。帽子を目深に被り、サングラスをかけた渡海と、同じく変装した佐伯は、まるで素人スパイのようだった。渡海は目を細めて周囲を見回した。

「先生。ずっとこの格好で行くんですか？」

「私が飽きるまではこの格好だ」

佐伯は楽しそうに言つた。渡海は溜め息をつきながらも、佐伯の後に続いた。二人は人混みに紛れるようにして、ゆつくりとモールの中へと歩みを進めた。休日のショッピングモールだけあって、家族連れや若いカップルで賑わつており、喧騒の中に二人の姿も自然と溶け込んでいった。

「まずは腹ごしらえか。フードコートへ行こう」

フードコートなんて、天下の佐伯清剛からそんな単語が出てくるとは思わなかつたので、渡海は軽く驚いた。

「舌の肥えたあんたには似合わない言葉だな」

「そんなことはない。若いころは、私もああいふ場所によくお世話になった。今でも、夜食用のカップ麺が部屋に備蓄してある」……まじかよ」

知らなかった。確かにコーヒーや紅茶を入れる用のポットがあったのは覚えていたから、カップ麺が作れるのは不思議ではないのだが。

驚く渡海をよそに佐伯は活気に満ちたフードコートへ紛れていく。渡海もそれに続いた。

「カレーにしようかな」

「へえ、どうしてカレーなんです？」

「春江さんから聞いたことがある。卵かけごはんの次の次くらいに好きだったそうじゃないか」

「は？」

ちなみにその間は親子丼である。卵がかかっているからだ——いやそうじゃなくて、どうしてここで突然母親の名前が出てくるのか。怪訝な顔の渡海に対して、佐伯はにっこりと笑った。

「たまには悪くないだろう？」

佐伯が優しく促すので、渡海は一瞬躊躇したものの、結局は小さく頷いた。列に並んでいる間、渡海はどこかソワソワした様子を隠し切れなかった。

「流石にサングラスと帽子がふたり並んできると目立つんじゃないでしょうか」

「そうかな？」そんな押し問答をしていると、注文の番が回ってきた。

「カレーライス二つ」渡海が店員に告げた。その口調が、かつての病院での命令口調とほとんど変わらないものだから、佐伯は苦笑しながら、「もう少し柔らかい言い方でも良かったんじゃないか」と小声で渡海を諭した。

無事カレーを受け取った二人は座る場所を探しはじめた。その時、渡海の目に見覚えのある姿が飛び込んできた。

「先生まづい、あれは世良だ」

渡海が小声で告げて顎で指示をするので、佐伯もその方向を見た。確かにあれは見覚えのある姿だ。私服姿の世良と花房が楽しそうに会話をしながら、少し離れたテーブル席に座っていた。

「確か今日は二人とも非番だったな」

「言わんこっちゃない」

「まあまあ。こっちだ」佐伯は渡海の袖を引っ張って、こそこそと反対側のエリアに移動した。

第三者から見れば結構な不審者仕草である。世良と花房のテーブル席から、二人がある程度距離を取ったその時だった。

「あっ！」突然の男性の声に、渡海は一瞬たじろいだ。

「久しぶり！ いやあ、こんなところで会えるとは」

とっさに渡海が振り返ると、男性二人が驚いた素振りで向かい合っていた。

（なんだ、別人かよ……ちっ、驚かせやがって……）

「人違いのようだな」隣にいた佐伯が小声で言った。柄にもなく驚いてしまった所を佐伯に見られて、渡海はバツが悪そうな顔をした。佐伯の方はニヤニヤと楽しそうな笑みを浮かべていた。

「スリル満点だったな」佐伯の言葉に、渡海は呆れたような表情を浮かべた。

「まるでスパイごっこみたいですね」

この変な格好しかりだ。渡海は不機嫌そうに言った。しかし、たまにはこういうのも悪くないな、と嬉しそうな様子の佐伯を見ると、不思議とそこまで悪い気はしないのだった。

一方、世良と花房のテーブルでは、世良が首をかしげていた。

「さっきフードコートで、同じサングラスと帽子を被った人組を見たんだけどさ」

「ふふ、まるでお忍び中の芸能人みたいな方々ですね」花房が笑った。

「それがさ、何となく雰囲気、渡海先生と佐伯教授に似てたような気がして……」

世良の言葉に、花房はますます笑いながら答えた。

「あは、あのお二人がそんな変装をなさって、こつそりお買い物なんて、微笑ましいですね」「本物かもしれない」

「それは、さすがにないんじゃない？」花房はほとんど信じていない様子だった。

「んー、見間違いかなあ。……でも、本当によく似てたんだよなあ」

「気のせいですよ。渡海先生のこと、が気になるのは分かりますけど、ここで会えるはずないじゃないですか」花房は優しく論じた。

世良は納得したように頷いたが、まだ少し疑わしげな表情を浮かべていた。

そんな会話が二人で繰り広げられているとはつゆしらず、渡海と佐伯は静かにカレーを口に運んでいた。「どうだ？ 久しぶりのカレーの味は」

渡海は黙って数口食べた後、小さく呟いた。「……悪くない」

佐伯は満足げに微笑んだ。渡海の表情は相変わらず無愛想だったが、その目には微かな温かさが宿っていた。佐伯が冗談めかして言った。

「私の記憶力もまだまだだな、お前の好みを覚えていた」

「覚えなくていいです」渡海は顔をしかめた。

カレーを食べながら、佐伯は病院の近況をぼつぼつと話した。渡海は相変わらず素っ気ない返事が多かったが、佐伯の話には熱心に耳を傾けていた。

しばらくそうやって話したのち、佐伯が立ち上がった。「次はどこへ行くかな」渡海も席を立ち、トレーを下げた。

「別に、先生のお好きなおところで」

フードコートを後にした渡海と佐伯は、ゆっくりとエスカレーターを降り、ショッピングモールの中央広場へと足を運んだ。周囲には様々な専門店が立ち並び、休日の賑わいを見せていた。「そういえば、お前の服、ずいぶん古くなっているんじゃないか。というか六年前から変わっていないように見えるんだが」

「別に構わないでしょう」渡海は眉をひそめた。

佐伯のいうことは当たっていたが、渡海は世間の目とやらを気にするような人間ではなかった。そんな渡海の内心を知ってか知らずか、佐伯はすでに服飾フロアへの案内板を見つけていた。

「たまには新しい服を買うのもいいだろう。ほら、こっちだ」

渡海は渋々ながらも佐伯についていった。

フロアの紳士服コーナーに到着すると、佐伯は熱心に商品を見て回り始めた。一方、渡海は退屈そうに立ち尽くして、店の所々に並ぶマネキンを眺めていた。

「これなんかどうだ？ いつもお前は黒ばかりだから、たまには違う色も悪くない」

「……こんな派手なの、着ませんよ」

渡海は佐伯が手に取った鮮やかな柄のシャツを見て、顔をしかめた。佐伯は楽しそうに笑った。

「たまには派手なものも着てみたらどうだ。折角、見てくれはそこそこ良いんだから」

「人目を引かない服がいいんです」渡海は不機嫌そうに言い返した。

しばらくの物色の末、佐伯はいくつかの服を手にとって、渡海に渡した。

「とりあえず、着てみなさい。サイズが合うかどうかは確認しておかないと」

渡海は渋々試着室に入った。佐伯の選んだ服は確かにセンスが良かった。鏡に映る自分の姿を見て、たまに着る分には悪くないかな、とあの渡海ですら思ってしまったのだから。しかし、それを素直に認めたくなかった渡海は、試着室から出てきても相変わらぬの仏頂面を崩さなかった。

新しい服に身を包んだ渡海を見て、佐伯は満足げに頷いた。「なかなかいい感じじゃないか」その時、近くにいた店員が声をかけてきた。

「お似合いですね。お父様の目利きがすばらしいです」

渡海は慌てて否定しようとしたが、佐伯は穏やかな笑みを浮かべて答えた。

「ありがとうございます。この子は服選びが苦手でしたね」

渡海は「チッ」と小さく舌打ちしたが、心のどこかでは少し照れくさくも感じていた。結局、渡海の好みに合わせたシンプルな服をいくつか購入することになった。会計を済ませた後、佐伯はレシートをちらりと確認し、満足げな表情を浮かべた。

買い物を終え、二人は休憩のためにベンチに腰を下ろした。佐伯は購入した服の袋を確認しながら、渡海に向かって言った。

「お前にびったりの服が見つかって良かった」

「別に……」

渡海は素っ気なく答えたが、言葉とは裏腹に、その表情には微かな満足感が浮かんでいた。二人で一緒に買い物をするなんて、本当に何年振りのことだろうか。自分がこの人を恨むようになる前——そして、渡海の父がまだ生きていた頃だ——父の日のプレゼントと一緒に選んでほしい、と言って佐伯をどこかの百貨店へ連れ出したような記憶がある。あれは自分がいくつの時だったのだろうか。

そんなことを渡海が考えていると、佐伯が立ち上がった。

渡海が周囲を見回すと、ふと電化製品売り場の看板に目が留まった。佐伯は渡海の視線を追い、にっこりと笑った。

「行ってみよう」

二人は電化製品売り場に足を踏み入れた。

「あれは……」佐伯が興味深そうに言った。二人が見ていたのは、家庭用の健康管理デバイスだった。病院で使用される医療機器を小型化し、一般向けにアレンジしたもののように見えた。

「これ、心拍数と血圧を二十四時間モニタリングできるんだって」

渡海が珍しく興奮した様子で説明した。

「こちらは、睡眠の質まで分析できるらしい。レム睡眠とノンレム睡眠の割合まで出せるそうだ」佐伯も負けじと言った。二人は夢中になって、次々と展示されているデバイスを見ていった。血糖値を継続的に測定できる腕時計型のデバイス、姿勢をチェックしてアドバイスしてくれるスマートベルトなど――。

「これを病院に導入したら面白いかもしれないな」

「無駄遣いはやめてくださいよ」佐伯が冗談めかして言った言葉に、渡海は即座に突っ込んだが、少し間を置いて、真剣な表情で言った。

「でも、こういう技術が進歩すれば、在宅医療の可能性は広がるかもしれませんね」

「確かに、患者の生活の質を上げることにもつながるだろうな」佐伯は頷いた。

そんな会話を交わしながら、二人は展示品を次々と見ていった。夢中で話し込んでいたが、ふと、とある視線に気がついた。

「あの、すみません。もしかして、医療関係者の方ですか？」

一人の店員が恐る恐る声をかけてきた。渡海と佐伯は顔を見合わせ、慌てて首を振った。

「いや、ただの……健康オタクですよ」

渡海が適当に言い訳した。佐伯も慌てて付け加えた。

「そうそう。健康に興味があるだけで……」

店員は半信半疑の表情を浮かべたが、それ以上は追及しなかった。

二人は人目を避けるように、そそくさと電化製品売り場を後にした。エスカレーターに乗りながら、佐伯が小声で言った。

「危なかった。もう少しで正体がばれるところだった」

（何だよ正体って、あんたは悪の親玉かなんかか？）渡海は内心そんなことを思いつつも、どこか楽しそうな目をして頷いた。二人の姿は、再び人混みの中に溶け込んでいった。

二人は、ショッピングモールの上層階へと向かった。そこには大きな映画館があり、休日らしく多くの人で賑わっていた。

「映画でも見ていくか。人目を避けるにはちょうどいいだろう」

「まあ……いいでしょう」佐伯の提案に、渡海も同意した。

座席に座ってしばらくしたのち、後方から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「世良先生、こっちの席ですよ」

花房の声に、二人は顔を見合わせ、反射的に身を低くした。その姿は滑稽そのものだったが、館内が暗くなっていたこともあり、世良と花房は二人に気づくことなく、別の席に座った。

（まさか、二人と同じタイミングで同じ映画を見るとはな）（あんた、あの二人と気が合うんじゃないですか）佐伯と渡海はひそひそ声で言い合った。

ようやく落ち着いて座れるようになったところで、映画が始まった。戦地に派遣された軍医チームを中心に展開していく、戦争と医療をテーマにした物語だった。

主人公の軍医は、厳しい環境の中で次々と難しい症例に直面してゆく。限られた医療設備と時間の中で、主人公は迅速な判断と高度な技術を要求された。映画が中盤に差し掛かったところで、軍医は深刻なジレンマに直面する。

——重傷を負った味方の兵士と、捕虜となった敵軍の将校。どちらを先に治療するべきか。限られた医療資源の中で、軍医は苦渋の決断を迫られる。

この場面で、渡海は身を乗り出すように画面を見つめた。佐伯も、いつもの穏やかな表情から一転、真剣な眼差しで映画に見入っていた。

最終的に、軍医は医師としての誓いを貫き、敵味方関係なく、より重篤な患者を優先して治療する。その決断は、味方からの非難を浴びることになるが、それでも軍医は毅然とした態度を崩さない。

映画のクライマックスでは、軍医の判断が正しかったことが証明された。彼が救った敵将校の情報により、大規模な攻撃を未然に防ぐことができたのだ。最後のシーンで、軍医は疲れ切った表情で微笑み、「医師の責務は、命を救うこと。それ以外の何ものでもない」と語った。

エンドロールが終わり、渡海が立ち上がろうとした時、佐伯が渡海の肩に手を置いた。

「少し待とう。世良たちが出て行くまでね」
ああ、そうだった……と、渡海は無言で頷いた。他の観客たちが次々と退場していく中、二人は静かに映画の余韻に浸った。

ようやく人がいなくなつたところで、佐伯が口を開いた。

「最後のあの場面を見ていて、お前のことを思い出したよ」

「どういう意味ですか」渡海は佐伯を見た。

「やれ権威だ論文だと構わずに、常に患者第一で行動するところが、お前によく似ていたなと」佐伯は優しく微笑んだ。

「言葉が足りなくて周囲に誤解されるところも、またよく似ている」

（あんたも似たようなもんじゃん）内心そんなことを思いながら、渡海は目を逸らして言った。

「……医者ですから」

それだけ言って黙つたと思いきや、渡海は複雑な感情を浮かべ、ボソツと言った。

「先生。俺はああいう極限状態での医療に、興味がないわけではありません」

突然の渡海の言葉に、佐伯は眉を少し上げた。「そうなのか」

「ええ。大学病院のそれとは全く違うけれど、あれも医者の一つの姿でしょう。限られた資源の中で最大限の治療を行うというのも、中々やりがいがあるもんじゃないでしょうか」

渡海の真剣な表情に、佐伯はどこか感慨深いものを覚えた。

映画館を後にした渡海と佐伯は、ショッピングモールの出口へと向かった。夕暮れ時の柔らかな光が、大きなガラス窓から差し込んでいる。

「さて、そろそろ帰るか」佐伯が腕時計を確認しながら言った。

渡海は無言で頷いたが、その表情には微かな寂しさが浮かんできているように見えた。二人が出口に向かって歩いていると、突然、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「ほら、花房さんも見たでしょ。あの人、渡海先生に似てませんでした？」

世良の声に、渡海と佐伯は反射的に立ち止まった。二人が近くの柱の影に身を隠し、息を潜めていると、花房が話を続けた。

「確かに雰囲気は渡海先生に似ていましたね。猫背でしたし。帽子とサングラスって、ちょっと変わった格好をされていましたけれど……」

「でしょ。でも、こんな近くで会えるものなのかなあって考えると、僕も分からなくなっちゃった。もしも僕が渡海先生だったら、こんな所に迂闊に近寄れないよ。しかも変装までして……」

「そうですね……」

その時渡海が佐伯の方をちらっと見たが、佐伯は見ても見ぬふりをした。

「あれが佐伯教授だったら、二人で一緒に変装していることになりますもんね。そんな漫画みたいな……」「そうだよなあ……」

(漫画みたいで悪かったな) 渡海は内心毒づいた。

「さっきも言いましたけども、教授は東京出張で、今晚帰ってこられるはずですし」

「そうなんだよな……」

同じ言葉を繰り返す世良の声には困惑の色が混じっていた。一方、世良の言葉を聞いた渡海は佐伯の方を向き、小声で尋ねた。「東京出張？」

「……ああ。二日前から、学会の招待講演を頼まれてね」佐伯は申し訳なさそうに微笑んだ。

「ただ、予定が思ったより早く終わって、戻ってきたんだ。もしかしたらと思ってお前に連絡して、そうしたら丁度この辺にいますというから……」

佐伯の言葉に、渡海は驚いた表情を見せた。今の話だけ聞いていたら、まるで佐伯がわざわざ自分に会うために、東京から急いで戻ってきたように感じられるからだ。

世良と花房の声が遠ざかっていくのを確認してから、二人はゆっくり帰路についた。電車に乗って、来た時と同じ駅で降りたその時、佐伯が声をかけた。

「そういえば、出発はいつなんだ」

「……今月末の予定です」

「……そうか」佐伯の表情は、最後まで被ったままの帽子とサングラスで見えなかったが、どことなく寂しげな風に見えた。

——渡海は今月いっぱい、日本を離れ、海を渡って遠くはなれたアフリカの内戦地へ向かうつもりだった。それを伝えた時、佐伯は渡海を特別引き留めることは無かった。むしろ全力でやっつきなさい、とエールすら貰った。しかし、それでも思うところはあろう、多忙な時間の合間を縫って、わざわざ会うための時間を佐伯が取ってくれたのは、もうすぐ自分が海を渡ることを悟っていたからではないだろうか。

渡海はふと、そんなことを思った。

やがて二人の前に、分かれ道が見えてきた。渡海が立ち止まった。

「おれ、こっちなんで、先生は、確かあっちでしたよね」

「よく覚えていたな。もう十年以上も前じゃないか、お前が家に来たのは」

「……まあ、記憶力には多少自信が」

昔、とある町の市民病院で勤務していた渡海を、佐伯が東城大に呼びよせたときに、就任祝いだなんだと言って、佐伯の自宅に、渡海が呼ばれたことがあった。あの頃の渡海からしてみれば、父の仇の弱みを探る絶好のチャンスくらいにしか思っていなかったが、誤解が解けた今にして思えば、あのとき仕事以外のこと、父のことや母のことなど、他愛ない話をもっとしておけばよかったと、渡海は回想した。

「そうか。……では、ここでお別れだ」

渡海は黙って頷いた。しかし、その足は少し躊躇っていた。

「……あの、今日は」

渡海が珍しく言葉を詰まらせたのを見て、佐伯は目を見開いた。そして一瞬何かを考えたのち、優しげな口調で語りかけた。

「ああ。私も、久しぶりに楽しい時間を過ごせた。ありがとう」

自分の言いたかったことをそのまま代弁されたような気がして、渡海は照れくさそうに顔をそむけた。その口元がほんの少し緩んでいるのを見つけて、佐伯は密かに微笑んだ。

「……じゃあ、また」

そう言つて渡海は再び歩き出した。佐伯は、その後ろ姿がはるか彼方に消えるまで見送った。

その夜、自宅に戻った渡海は、買った服を取り出した。タグを見ようとして、渡海は驚いた表情を浮かべた。

「これは……」

そこには、服のことなんて一切興味のない渡海でも知っている、有名な高級ブランドの名前が記されていた。きつとお値段もそれなりにするのだろうが、そちらはご丁寧に外されていた。おそらく、プレゼント用として購入してくれたのだろう。

渡海は呆れたような、でも少し嬉しそうな表情を浮かべた。

「こんなもん、持って行けねえ。まったく……あのおせっかいジジイ」

その時、渡海のス마트フォンが震えた。そのお節介な大先生からのメールだった。

『服は気に入ってくれただろうか。よく似合っていた。次があったら、もう少し派手なのを選んでもいいかもしれない。とにかく、必ず生きて帰ってきなさい』

渡海は溜息をつきながらも、返信を打ち始めた。

『派手は結構です。勿体なくて持って行けないから、クローゼットの肥やしになりそうです。でも、ありがとうございます』

嬉しかったです。という文言を最後につけようとしたが、これは、流石にらしくないなと取り消した。送信ボタンを押した後、少し考えて、渡海はもう一度メールを打った。

『次帰ってきたらこの服で、今度はなんか美味しいもんが食べたい』

送信を終えた渡海は、携帯を置いて、新しい服を大切にそうにクローゼットへしまい込んだ。そして、そのまま穏やかな気持ちで食卓の用意を始めた。

先生と教授とぼく

先生と呼ぶ意味について。

【先生】

第一章…「教授」から「先生」へ

中学二年生の渡海征司郎は、白衣姿の父・一郎の背中を追いかけるように、病院の廊下を小走りで進んでいた。少年の瞳には、好奇心と憧れが混ざり合っている。医療器具の並ぶカートや、忙しなく動き回る看護師たち。そのすべてが、征司郎にとっては新鮮な光景だった。

「こら、ちゃんと前を見て歩きなさい。危ないだろう」
父の声に、征司郎が唇を尖らせた。

「分かってるよ！でも、物珍しいんだもの」

白衣のポケットから聴診器がのぞいている父の姿もまた、少年の目には眩しく映った。

白い壁に囲まれた廊下を進みながら、渡海は病院の匂いや音、そして行き交う人々の表情を、好奇心に満ちた目で観察していた。そんな中、父の足が急に止まった。

「おや、佐伯君」

父の声に、征司郎は顔を上げた。目の前には一人の若い医師が立っていた。整然とした顔立ちに、

知的な眼差し。白衣の襟元からのぞく黒いネクタイは、彼の知性を際立たせているようだった。

「一郎先生、おはようございます」

その青年——佐伯清剛は、深々と一郎に頭を下げた。彼の声は、柔らかくも芯の通ったものだった。

「ああ、おはよう」

一郎は笑顔で応じ、そしてボカンと佐伯を見たままの征司郎の肩に手を置いた。

「佐伯君、この子を覚えているかな？ 以前話した、私の息子だ」

佐伯は少し驚いたような表情を見せ、征司郎をじっと見つめた。

「この子が征司郎君ですか。随分大きくなられましたね」

征司郎は、自分のことを知っているらしいこの若い医師に、少なからず興味を覚えた。

「覚えていてくれたか」一郎は満足げに頷いた。

「征司郎、こちらは佐伯清剛先生。私の後輩で、将来を嘱望されている若手医師だ」

父の紹介をうけ、征司郎は緊張しながらも、佐伯の方を向いてゆっくりとお辞儀をした。

「は、はじめまして。渡海征司郎と言います」

佐伯は柔らかな笑みを浮かべ、渡海の目線まで身を屈めた。

「あらためまして、佐伯です。君のことは、お父様からよく聞いていたよ。父上に負けず劣らずの秀才だとか」

「そんな、買いかぶりです」

その言葉に、渡海は少し照れくさそうに目を逸らした。父が他人のことを褒めるのは珍しかった。

まして、自分のことを褒めているとは。

一郎は、そんな二人のやりとりを温かく見守っていた。

「佐伯君、今日は手術がないんだったな？」

「はい、今日は外来と回診だけです」

「そうか。なら、少し時間があるだろう」

一郎は佐伯に向かって言った。

「この子、将来は医者になりたいと言っているんだ。今日は忘れ物を届けに来てくれたのだが、中を見せるとうるさいんで、さつき少し医局内を案内してやった。よかったら、少し話をしてやってくれないか」

佐伯は驚いたような、しかし嬉しそうな表情を見せた。「もちろんです。喜んで」

征司郎は突然のことに戸惑いを感じたが、同時に期待感も芽生えた。父以外の医師と話せる機会には、滅多にないのだ。

「じゃあ、私は先に行っているから。征司郎、あまり佐伯先生にご負担をおかけしないように。満足したらさつきと帰るんだぞ」

「はあい」

そう言つて、一郎は二人を残して立ち去った。残された征司郎に、佐伯は屈んだ姿勢で手を差し伸べた。

「じゃあ、行こうか」

「はい。えっと……」

征司郎は戸惑いつつ、目の前の人の優しげな瞳を真っ直ぐに見つめて、言った。

「佐伯……：：：～」

二人は手を繋いで、病院の中庭へと歩を進めた。春の陽気が心地よい。ベンチに腰掛けた二人の間に、微妙な緊張感が漂う。

「それで、征司郎君」 佐伯が静かに口を開いた。

「医者になりたい、か。素晴らしい志だね」

渡海は黙って頷いた。佐伯は続ける。

「君のお父様は、本当に素晴らしい外科医だ。その道を目指すのは、きっと大変なことだろう」
渡海は少し俯いた。確かに、父の背中では遠く高かった。

「でもね」佐伯の声が、優しく渡海の耳に届く。「医者になるために一番大切なのは、勉強でも技術でもない」

「え？」渡海は顔を上げ、佐伯をまっすぐ見た。

佐伯は、真剣な眼差しで渡海を見つめ返した。

「人の痛みがわかる心だ」

その言葉に、渡海は強く心を打たれた。佐伯の瞳に映る決意と情熱。そこには、医療への深い愛情が宿っていた。

後になって思えば、この日の出会いは、渡海の人生に大きな影響を及ぼした。そして、それは佐伯にとっても同様だった。この若き少年との出会いが、かけがえのないものになることを、まだ誰も知る由もなかったのである。

春の柔らかな風が、若葉の香りを運んでくる。新たな出会いと、未来への希望を告げるように。

それから六年後。

北海道にあるの極北大学医学部に通う渡海のもとに、一通のメールが届いた。差出人は父・一郎だった。

「佐伯君が東城大の心臓外科学教室の主任教授に就任されたそうだ」

その知らせは、渡海の佐伯への憧憬の念をますます強くさせた。

それから数週間後、春休みを利用して東京に戻った渡海は、父に会いに東城大学病院を訪れていた。

「おや、征司郎君じゃないか。久しぶりだね」

憧れの佐伯の穏やかな声に、渡海の口から思わず笑みがこぼれた。

「佐伯先生！ご無沙汰しております。教授就任おめでとうございます」

渡海の言葉に、佐伯は少し驚いたような表情を見せた。

「ありがとう。まさか君が知っているとは思わなかったよ」

「父から聞きました」

渡海は少し照れくさそうに答えた。

「そうか。……ところで、『佐伯先生』か。懐かしいな」

佐伯の目が少し潤んだように見えた。

「あ、そうか。これからは佐伯教授と呼ばないといけないんですね」

渡海の声のトーンが控えめになった。佐伯は目を丸くし、すこし寂しそうな目をした。

「いや、その必要はないよ。むしろ……」

佐伯は一瞬言葉を切った。

「昔から君には佐伯先生、と呼ばれていたから。その呼び方は何だか君が遠くにいつてしまったみたいで複雑だな」

「でも、こういうのはちゃんとしておかない」と

「私が呼んでほしいんだ」

佐伯の言葉に、渡海は一瞬たじろいだ。しかし、すぐに決意を固めたような表情になった。

「でしたら……うん、じゃあ、これからも佐伯先生って呼ぶことにします」

その言葉に込められた思いは、単なる呼称以上のものだった。それは、佐伯への敬意と、医師と

しての道を歩む決意の表明でもあった。
佐伯の顔に、安堵の表情が浮かんだ。

「ありがとう、征司郎君」

その言葉に、渡海は少し照れくさそうに頷いた。
しばらくの歓談の後、渡海は病院を後にした。外に出ると、東京の春の柔らかな風が頬をなでていった。

（いつか、俺もあの人のような医者になりたい）

その思いは、かつて中学生だった頃より、はるかに強く、具体的なものになっていた。

春の柔らかな風が、若葉の香りを運んでくる。新たな季節の始まりを告げるように。そして、医師を目指す一人の青年の、新たな決意の始まりを祝福するかのよう。

そんな二人の間に大きな亀裂が走ったのは、父の一郎が病に倒れ、亡くなったその年のことだった。

ペアンを知り、佐伯を恨むようになった渡海。渡海は佐伯の推薦で東城大にやってくる。
渡海は、佐伯のことを「教授」と他人行儀で呼ぶようになる。

冷たい北風が吹き抜ける極北大学の構内。医学部棟の一室で、渡海は無言で医学書を睨みつけていた。外は既に暗く、デスクライトだけが彼の顔を照らしている。

時計の針が深夜〇時を指す頃、渡海のス마트フォンが震えた。画面には「佐伯先生」の文字。

渡海は眉をひそめながら、メールを開いた。

『元気にしているか。近々、極北大で講演をすることになった。会えたら嬉しい。佐伯より』
渡海は溜め息をつき、返信もせずにスマートフォンを机に投げ出した。

(佐伯先生か…)

かつては憧れの存在だった佐伯。しかし今の渡海の胸中には、複雑な感情が渦巻いていた。

数日後、講堂は佐伯教授の講演を聴講する学生で溢れかえっていた。最前列に座る渡海の表情は、硬く、どこか冷たさを感じさせた。

佐伯の講演は、心臓外科の最新技術に関するものだった。その話術と深い知識に、学生たちは魅了されていく。しかし、渡海の目には、別の光景が映っていた。

(ブラックペアン…)

講演の間中、渡海の頭の中はその言葉で支配されていた。父を陥れ、世間から後ろ指を刺されながらその生涯を終えることになってしまった原因もペアンだった。

父の葬式に、佐伯は来なかった。遠くの国に居て来られなかったのだと母は言った。

あのレントゲン写真が、まるで露光で焼き付いたかのように、渡海の脳に焼き付いて離れなかった。

最初、渡海は信じられなかった。あの佐伯先生が、そんな非道なことを？ しかし、証拠は明らかだった。

渡海の胸の内、尊敬の念が怒りと失望に変わっていった。

講演が終わり、学生たちが興奮気味に退場していく中、渡海はゆっくりと佐伯に近づいた。

「久しぶりだな」佐伯は優しく微笑んだ。

「はい、佐伯教授」渡海の声は、意図的に冷たく響いた。

佐伯の表情が僅かに曇る。「教授、か……」

「はい、東城大の教授として、遠路はるばるこんな寒い田舎まで来られたんでしよう」
二人の間に流れる空気が、一瞬で凍りついたかのようだった。

「……一郎先生のこととは、残念だった」

渡海は一瞬、言葉を詰まらせた。しかし、すぐに冷たい眼差しで佐伯を見つめ返した。

「あのレントゲン写真は、どういう意味ですか」

佐伯の顔から血の気が引いた。「お前……それを」

「父が持っていました」渡海の声には怒りが滲んでいた。

「人の痛みが分かる心が大切だと言ったのは、先生じゃなかったんですか？」

佐伯は言葉を失った。かつての少年の目には、今や失望と怒りしか映っていない。

「征司郎君、聞いてくれ。あれには……」

「もういいです」渡海は佐伯の言葉を遮った。「俺は、先生のような医者にはなりたくありません」
そう言い残し、渡海は踵を返して講堂を後にした。佐伯は、その背中を呆然と見送るしかなかった。

それ以来、渡海は佐伯からの連絡を意図的に避けるようになった。たまに電話に出ても、その会話は素っ気なく、短いものだった。

「渡海、最近どうだ？ 勉強は順調か？」

「ええ、なんとか」

「そうか。何か困ったことがあれば……」

「大丈夫です。じゃあ」

電話を切る度に、渡海は胸が締め付けられる思いだった。かつての温かな会話が、こんなにも冷

たいものになるとは。

図書館の静寂の中、渡海はため息をついた。窓の外の雪景色が、彼の心の冷たさを映し出しているようだった。

そんな時、一通のメールが届いた。

「渡海君

元気にしているか。

君が東城大へ来たがっているという話を人づてに聞いた。君とはもう長らく話をしていないが、私の推薦枠で東城大の医局員として来ないか。

君の才能を、是非とも活かしたい。

佐伯清剛」

渡海は長い間、その画面を見つめていた。

複雑な思いが渦巻く中、渡海は一つの決意を固めた。

返信メールには、そっけない二文字だけが綴られていた。

「承知しました」

数ヶ月後、東城大学病院。

白衣に身を包んだ渡海が、佐伯の前に立っていた。かつての少年の面影は微塵もない。冷たい眼差しと、挑戦的な態度。

「これからお世話になります。佐伯教授」

その声には、かつての温かみは微塵もなかった。

佐伯は複雑な表情で渡海を見つめた。かつての親愛なる教え子。今や、自分を試すかのように現

れた若き医師。

その言葉に、佐伯の表情が一瞬曇った。

実際に佐伯は渡海の上司であり、他の講師や准教授は佐伯のことを「佐伯教授」と呼んでいるので、渡海が「佐伯教授」と佐伯を呼ぶのは、佐伯にとっては寂しいけれど、仕方のないことだろう……とあきらめる佐伯。

「よく来てくれた、渡海」

佐伯の声には、かすかな安堵が混じっていた。しかし、渡海の目は冷たかった。

そして佐伯自身も渡海のことを「お前」だの、「渡海」だの、親しみの欠片もない態度を取るのだった。

「まあいい。これから君には、多くのことを学んでもらう。そして、共に患者を救っていかう」
渡海は無言で頷いた。その目には、決意と警戒心が宿っていた。

（佐伯教授。俺は、あんたのやったこと全て暴いてやる。そして……）

渡海の心の中で、かつての尊敬の念は、冷たい闘志へと変わっていた。

窓の外では、東京の春の日差しが煌めいていた。しかし、二人の間に流れる空気は、まだ冬の名残のように冷たかった。

二人の間に合った大きな大きな氷が解けたあとのこと、

ある日、市民病院で勤務していた渡海のPCに、佐伯からメールが届いた。病院長になった、と

いう報告だった。お祝いに部下たちが会を開いてくれた。と集合写真が添付されていた。渡海が親しくしていた猫田や、指導をした世良、賭けやら貸し借りやら色々やり取りのあった高階先生も写っていた。真ん中には花束を抱えた佐伯が、頬をはんなり赤く染めながら、優しい笑みを浮かべている。素直にいい写真だと渡海は思った。でもなんでこんな写真を送ってくるのか、正直なところその意図はわからなかった。連絡をくれたことは嬉しかったので、ひとまずお礼の返信をする。

その文面で、“佐伯先生”と渡海は書いてみた。

普段は胡散臭い、芝居がかった顔ばかりしている佐伯だったが、そのメールの文面を見た時は、嬉しさを隠し切れない様子で顔をほころばせた。“佐伯先生”。そのたった四文字が佐伯はちよつぱり嬉しかった。いや嘘だ。正直すんごく嬉しかったのだ。

嬉しかったついでに、佐伯は暇なタイミングで渡海に電話をかけた。

「もしもし？」

「ああ、渡海。久しぶりだな」

「ええ。何かご用ですか」

「いや実は、特に用事があつて電話したわけではないんだが。今時間はあるか」

「大丈夫です」

「ありがとう」

ぎこちない沈黙が二人を包んだ。渡海が重い口を開いた。

「……そういえばメール見ましたよ。病院長就任、おめでとうございます」

「ありがとう。その、先ほど返信を読んだ。それで懐かしくなつて、電話をかけてしまった」
「そうですか。懐かしい？　つてのはよく分かりませんけど……」

「佐伯先生は、いかがお過ごしですか」

「あ、ああ……元気にやっているよ」

佐伯は“この前、治験コーディネーターの木下くんがお土産に持ってきてくれたタルトが美味しかったので、自分で取り寄せてしまった”という話をした。

「はあ、そうですね。……饅頭だのケーキだの、甘いものの食べ過ぎには気を付けて下さいよ。切って治せない病気は俺の専門じゃない」

「ああ……」

「先生？　どうかしましたか」

佐伯は昔のことを思い出して目頭が熱くなっていた。

「いや、文面でも十分だったが、口頭だとさらに感慨深いものがあるなと。その、呼び方が」

「呼び方？」

「その……佐伯先生、という呼び方だ。教授になる前の、昔のことを思い出す」

「ああ」

「なんて言うんですかね、あの時の先生、教授呼び嫌がってたからさ」

渡海が少し照れ臭そうに話し始めた。

「東城大にいた時に俺が先生を教授呼びしてたのは、周りに合わせるってのが一番の理由だけど、嫌がらせの面も多分にあったわけで」

なんでわざわざ自白めたことをしているのだろう、と渡海はかなり恥ずかしくなってきたが、勢いでそのまま話した。

「でも、もう先生の部下ではないので周りに合わせる必要もないし、先生のこと恨む理由もないし……だからまあ、その、そういうことです」

次会ったときは昔のように佐伯先生、と呼ぼうと、渡海はひとりでこっそり決めていたのだった。そんな自分を、渡海はどこかおかしくも感じていた。

（呼び方にこだわるなんて、俺らしくもない。大体佐伯先生は別に、何とも思っていないだろうに）でも佐伯の様子を見るに、そんなことは無かったらしい。先生は変わらず、ずっと俺のことを大切に思ってくれているんだな。と渡海は内心かなり嬉しかった。決して顔にも声にも出すつもりはないけれど。

その後も佐伯は時々渡海に電話をよこした。極北からたまに静岡に出向いたときは、佐伯と出かけることもあった。

それは、ある半年に一回のお出かけの時の出来事だった。

あたりは少しずつ日が暮れはじめていた、くすんだ空の下、二人は黙って歩いた。

「あのさ、先週話したやつ、覚えてますか」

「ああ、途上国への支援派遣のことかね」

「先生も、昔行っていたんですよね。親父が東城大で医者をやっていた頃」

「……ああ」

渡海の父親であり、佐伯の盟友でもある、渡海一郎が、まだ東城大の外科医だった時、佐伯は途上国の支援団体に参加し、医務官として従事していたことがあった。それは、二人の間に十年の亀裂を生むことになった、“とんだ行き違い”が発生した原因でもあったので、佐伯は暗い顔をした。

「俺も、先生に倣って行ってみようと思って」

佐伯の歩みが遅くなった。

「……行先は？」

「ノルガ共和国」

思ってもみなかった国の名前に、佐伯は目を丸くした。

「その国は、現在進行形で内戦中ではなかったか。確か、外務省の渡航リストでも危険と書かれていたと思うが」

「ええまあ、そうですね。よくご存じで」

淡々と話す渡海とは裏腹に、佐伯の表情は深刻だった。

「死ぬ気か、渡海」

「まさか。医務官ですから、当然人を救いに行くんです。最前線に行くわけでもないし」

「そうは言っても」

「……自分の腕を過信したために、俺は患者の命を危険にさらし、思い違いで尊敬する人まで殺しかけた。そんな自分を律するためでもあります」

そう言っ、佐伯をまっすぐ見つめる渡海の表情は真剣そのものだった。佐伯はそれ以上何も言えなかった。

「まあとにかく。手続きとかそういうの色々分かってないんで、また聞いてもいいですか」

「……分かった」

「……ありがとうございます」

夕焼けがあたりの建物を真っ赤に染めていた。帰路に向かう二人の影も、どんどん長く伸びていく。

「渡海」

「何ですか」

「行くなとは言わん。むしろ、全力でやってきなさい。だがな……自分の命は大切にしろ。私が

言えたことではないが、お前が死んだら悲しむ人間が大勢いることを忘れるな」

「……」

（俺に殺されかけても、死んでもいいとまで言った、あんたがそれを言うのか）

渡海は眉間にしわを寄せたまま、どこか切なげな目つきで佐伯の方を見た。不服そうな渡海の様子だったが、佐伯の声は穏やかだった。

「構わんよ。言いたければ、何とでも言いなさい」

「俺が何か言えた立場じゃない。それは分かってる」

そのまま、二人は静かに歩き続けた。

佐伯から手続きのメールが来て、ぼちぼち準備を進める渡海先生

空港の出発ロビーにて、渡海は重たそうなスーツケースを引きずりながら、搭乗口へと向かっていた。出不精のために普段あまり着ることの無いスーツが、どこか窮屈で、白衣とは違う重さが肩にのしかかるような感じがした。

「お客様にお知らせします。〇〇行き、JL205便にご搭乗の方は……」

ノルガ共和国は何回か飛行機を乗り継いでやっとたどり着く。少なくとも今日は1日航空機の中で過ごすことになるだろう。

アナウンスが流れる中、渡海は立ち止まり、背後を振り返った。誰かが見送りに来るわけでもない。ただ、日本での生活に別れを告げるように。

（なあ、佐伯先生。俺、行ってきます）

「最後の」案内です。JL205便にご搭乗の……」

渡海は深く息を吐き、搭乗口へと歩み出した。

同じ頃、東城大学病院。

佐伯清剛は病院長室の大きな窓際に立っていた。彼の瞳に、夕焼けに染まる空が映る。部屋の扉がノックされ、世良が顔を覗かせる。

「失礼します、佐伯先生。明日の手術の件で……」

「ああ、世良君か。どうぞ」

佐伯は振り返り、世良を迎え入れた。

「それで、明日の患者さんの状態はどうだ？」

「はい、午前中の検査では心機能の低下が見られます。大動脈弁置換術の難易度が上がると予想されます。……また、冠動脈にも狭窄が見られるため、バイパス手術も同時に行う必要があります」

世良の言葉に、佐伯の思考は〆年前へと遡っていた。

（そういえば、渡海のやつも似たような症例で……）

「術中の大動脈遮断時間を最小限に抑えるため、人工心肺の準備も……」
「待て」

佐伯の言葉に、世良は説明を中断した。

「世良君、大動脈弁置換とバイパスを同時に行うのか？」

「はい、そのつもりです」

「ならば、まず右冠動脈にバイパスを行い、それから弁置換に移るんだ。そうすれば心筋保護液の分布が改善され、術後の回復も早まる」

世良は驚いた表情を浮かべた。

「なるほど、そういった方法もあるんですね」

「ああ。昔、渡海が同じような症例で試みたんだ。結果は上々だった」
佐伯は懐かしむように目を細めた。

「渡海先生……」

世良の声には複雑な感情が滲んでいた。

「すまん、話を逸らしてしまった。続けてくれ」

佐伯は気を取り直し、再び世良の説明に耳を傾けた。しかし、その目は再び窓の外へ。夕暮れの空に、一機の飛行機が光の筋を引いて消えていった。

「佐伯先生？」

「ああ、すまん。そうだな、その処置で問題ない。明日の手術、頼むぞ」
佐伯は再び世良に向き直った。窓の外の空は、すっかり暗くなっていた。

心の中でそうつぶやいた瞬間、携帯電話が震えた。メールだ。差出人は「佐伯先生」。渡海は少し躊躇したが、メールを開いた。

『無事に搭乗できただろうか。』

くれぐれも無理はするな。そして……帰ってこい。

佐伯』

渡海は喉元で言葉を詰まらせた。返信はせず、携帯をポケットにしまった。「最後のご案内です。』」

「11205 便にて搭乗の……」
渡海は深く息を吐き、搭乗口へと歩み出した。

同じ頃、東城大学病院。

佐伯清剛は病院長室の大きな窓際に立っていた。彼の瞳に、夕焼けに染まる空が映る。部屋の扉がノックされ、世良が顔を覗かせる。

「失礼します、佐伯先生。明日の手術の件で……」

「ああ、世良君か。どうぞ」

佐伯は振り返り、世良を迎え入れた。

「それで、明日の患者さんの状態はどうだ？」

「はい、午前中の検査では心機能の低下が見られます。大動脈弁置換術の難易度が上がると予想されます。……また、冠動脈にも狭窄が見られるため、バイパス手術も同時に行う必要があります」

世良の言葉に、佐伯の思考は〇年前へと遡っていた。

（そういえば、渡海のやつも似たような症例で……）

「術中の大動脈遮断時間を最小限に抑えるため、人工心肺の準備も……」
「待て」

佐伯の言葉に、世良は説明を中断した。

「世良君、大動脈弁置換とバイパスを同時に行うのか？」

「はい、そのつもりです」

「ならば、まず右冠動脈にバイパスを行い、それから弁置換に移るんだ。そうすれば心筋保護液の分布が改善され、術後の回復も早まる」

世良は驚いた表情を浮かべた。

「なるほど、そういった方法もあるんですね」

「ああ。昔、渡海が同じような症例で試みたんだ。結果は上々だった」

佐伯は懐かしむように目を細めた。

「渡海先生……」

世良の声には複雑な感情が滲んでいた。

「すまん、話を逸らしてしまった。続けてくれ」

佐伯は気を取り直し、再び世良の説明に耳を傾けた。しかし、その目は再び窓の外へ。夕暮れの空に、一機の飛行機が光の筋を引いて消えていった。

「佐伯先生？」

「ああ、すまん。そうだな、その処置で問題ない。明日の手術、頼むぞ」
佐伯は再び世良に向き直った。窓の外は、すっかり暗くなっていた。

心の中でそうつぶやいた瞬間、携帯電話が震えた。メールだ。差出人は「佐伯先生」。渡海は少し躊躇したが、メールを開いた。

『無事に搭乗できただろうか。』

くれぐれも無理はするな。そして……帰ってこい。

佐伯』

渡海は喉元で言葉を詰まらせた。返信はせず、携帯をポケットにしまった。

Aーと渡海先生が仲良くなれる可能性 1 回校正済

東城大学病院の仮眠室では、疲れた体を休ませながら、世良と花房が会話を交わしていた。

「ねえ、世良先生」

昼食に買ってきたのであろう、サンドイッチを頬張りながら、花房が呼びかけた。

「天城先生って、エルカノのこと『ちゃん』付けで呼んでいたじゃないですか」

「ああ、そうだったね」

ソファに身体をあずけてだらつとしていた世良は、少しだけ姿勢を正して、花房の方を見た。

「オペの手順まで教えてたね」

「で、私ふと思ったんですよ」

花房の目が輝いた。

「……渡海先生だったら、エルカノにどう対応するんだろうって」

世良の背筋が急にピンと張った。六年前のある事件をきっかけに、急に自分たちのもとから姿を消した元指導医、別名オペ室の悪魔。そして、世良がずっとこの部屋で待っている人物。

「……世良先生は、どう思います？」

花房は、意味ありげな笑みを浮かべ、首を傾げて世良に尋ねた、世良は腕を組んで考え込んだ。

「うーん……渡海先生なら……」

世良は目を細めて言った。

「エルカノの電源ごと切っちゃうかも」

「わあ、結構過激ですね」

サンドイッチを口元にあてたまま、花房が驚いた。

「いやあ、だって渡海先生だよ？」そのオモチャどける、邪魔だ” って言いながら、ぱっさり切りそうじゃない？」

花房は首を横に振った。

「うーん、そうですかね……」

「えっ？ 花房さんは、どんな感じだと思いの？」

世良が不思議そうに花房を見た。

「渡海先生って案外、新しいものを上手く使いこなすタイプじゃないですか？」

花房が続けた。

「僧帽弁置換を半自動でやってくれる装置のスナイプとか、ダーウィンやカエサルみたいなロボットとか。最初は邪険にしている、なんだかんだ、結局使いこなしていらいしましたし……」

花房の言葉に、世良も、確かに……、と気づいたような表情を浮かべた。

「そう言えばそうだった」

「だから、エルカノも案外うまく活用されるんじゃないかなって、思うんです」

花房が言った。

「確かに……そう考えると、案外天城先生と変わらないのかも」

花房の見解を聞いて、世良も考えを改めたようだった。しかし、すぐに世良の顔に悪戯っぽい笑みが浮かんだ。

「あ、でもさ」

「どうしました？」花房が首をかしげる。

「ちゃん付けじゃなくて、呼び捨てで『エルカノオ！』って怒鳴ってそうだよね」

世良の発言に、花房は小さく吹き出した。

「まあ、確かに……ふふ、いまちよつと、想像しちゃいました……」

二人はクスクスと笑い合った。その時、突然咳払いの音が聞こえた。世良と花房が驚いて振り返くと、そこにはいつの間にか仮眠室に入ってきていた、同じく東城大のベテラン主任看護師、猫田の姿があった。

「す、すみません……」二人は慌てて謝った。

猫田は何も言わず、ベッドに入って毛布にくるまった。世良と花房が息を潜めて様子を伺っている、毛布の中から猫田の声が漏れた。

「渡海先生、使えるものは何でも使う性分だから。AⅠが合わせてきたら自分も合わせるし、反発してきたら無視ね。きつと」

「ああ何か、すごく想像つきますね……」

世良と花房は顔を見合わせ、苦笑いを浮かべた。

偶然か必然か、ちょうど仮眠室の外でも似たような会話が繰り広げられていた。

「昨日の天城先生のオペは本当神がかったでしたね。いや、どっちかかっていうと悪魔だけど」
六年前から変わらず万年ヒラの医局員、関川はそういうと、ふと思ひ出したように続けた。

「渡海先生だったら、エルカノにどんな反応するんでしょうね」

隣に座っていた、同じく東城大の心臓外科医、垣谷は腕を組んで考え込んだ。関川とは対照的に、こちらはいつの間にか医局長に出世している。昔は関川がため口だったのに。世知辛い世の中である。

「うーん……あ、そうだ。こんな時はちやちやつとAⅠに聞いてもらおうかな」
「えっ！」

関川が驚いた。

「渡海先生のデータまで入ってるんすか？」

垣谷はハッとした表情を浮かべた。「あ、確かに入れてないわ」

「そりゃそうですよね」

関川は安堵の表情を浮かべた。

「なんか、勝手に入れたら急に電話とかかかってきそうですね。あの人地獄耳ってか、謎の情報網があるというか」

「確かに」垣谷も同意した。

「それにしても、渡海先生今どこで何してるんすかね」関川が首をかしげた。

「さあな。あの人のことだし、他所でもオペ室で悪魔やってるんじゃないか？　〃一千万でもみ消してやるよ……」ってな」

正直言っであんまり似てない上に、迫力もないモノマネをしたのち、垣谷は肩をすくめた。

「まあいいや。そんなことより、俺とエルカノの相性は……」つと」

垣谷は自分のパソコンに向かい、エルカノに問いかけた。

『垣谷先生がエルカノと仲良くなれる可能性、八十パーセント』

機械音声とともにパソコン画面に表示された文字列を見て、垣谷が嬉しそうに声を上げた。

「おぉー、まんざらでもないなあ！」

一方、関川は不満げな表情だった。

「え、垣谷先生、なに自分だけ先生呼びさせてんすか」

関川の苦言を無視して、垣谷は笑いながらキーボードで文章を打ち込んだ。

「関川は？」

『関川がエルカノを使いこなせる可能性、10%』

「いや、ひっく！」

関川は眉間にしわを寄せて、画面に表示された文字をじっと見つめた。

「……先生、やっぱこいつ壊してもいいですか？」

「まあまあ、そうムキになるなっ」

関川の表情とは裏腹に、垣谷は口元に笑みを浮かべたまま椅子へもたれかかった。

院長室では、二つのティーカップを挟み、向かい合わせてソファに腰掛ける二人の姿があった。

「……という話が最近医局で盛り上がっているんだが、実際どうなんだ」

偶然別件で東城大を訪れ、ついでに渋々挨拶にきた渡海に、佐伯はティーカップの紅茶をすすりながら尋ねた。渡海は深いため息をついた。

「……アホばっかりか、この病院は」

当事者である渡海は、呆れてものも言えない様子だった。

「個人的には、もう既に使いこなしてますけど？　みたいな反応を期待したんだがな。お前はなんだかんだ流行りものを使いこなすのが好きだからな」

ほら、スナイプとか、カエサルとか……と、佐伯は花房と似たような話を始めた。渡海はまたため息をついた。

「それは、どっかの権の字やら、美味しいものの食べ過ぎで自分の心臓が根をあげちゃった、どこぞのジイさんが吹っ掛けてくるから、〃仕方なく〃乗っかってやっただけです」

そういつて、渡海は冷ややかな視線を佐伯へ向けた。

「あんなん、手のほうが百倍楽だわ……てか、そんなことより」

渡海は教授の机の横に居座る模型を指さした。

「何なんですかこの奇妙な形した建物は。最近流行りのモダンな図書館かなにかの類ですか」

「渡海。お前は私と同じセンスを持っているようで安心した」

佐伯が嬉しそうに言うので、渡海の眉間のしわがさらに深くなった。

「やっぱ撤回します。とてもよい図書館だと思います。なんか全面、ガラス張り？　になってるし。太陽の光が入ってきそう。本には良くなさそうですけど」

「……そうか」

佐伯は少し寂しそうな表情をした。そんなに表情に出るタイプだっけ、とぼんやり渡海が思っている、「まあ……」と佐伯が目を開いて、渡海へ向き直って、一言言い放った。

「ちなみに……図書館じゃなくて、病院だ」

仮眠室の炊飯器にまつわるエトセトラ 1 回校正済

「炊けましたよ」

炊きたてのご飯のにおいが充満する仮眠室の奥で、花房は米をよそっていた。それを猫田の腕にもって手渡すと、猫田はすでに出してあった卵を割って、ご飯の上にのせて食べはじめた。

世良はそんな二人をソファにもたれかかって見ていた。ぐう……と唸るお腹をさすりながら。「世良先生も食べますか？」花房の問いに、世良は首を横に振った。

「いや……僕は遠慮します」

花房はラップにご飯をのせて、冷蔵庫に保管してある鮭フレークを包んで握った。

「今日は鮭おにぎりです」

「花房さん。それ私にもひとつ頂戴」猫田の注文に、花房は笑顔で答えた。

「わかりました。猫田さん、今日はよく食べますねえ」

「お昼を逃したからね」

「えへへ、食べる時に食べとかなきゃですよ。しかも、タダだし……」

本当にいいんでしょうか、と言いたげな花房に、猫田が言った。

「電気代にしろ、お米にしろ、実質教授のおごりみたいなものだからね。気にしなくていいわよ」

猫田の言いように、花房は苦笑いをした。

電気代は病院持ち。お米は時々、佐伯名義で医局に届けられる。元々はこの部屋に実質住んでいた別の人物が、さばききれずに溜め込んでいたものを皆で分け合って食べていたのだが、佐伯

が送ってくるようになったのはいつからだっただか。

そんなことを思い出していると、世良のお腹がぐう、と音を立てた。

(あー、お腹すいた……俺も午前のオベが長引いて、お昼食べ損ねたんだよなあ……)
和やかな雰囲気のある二人をよそに、世良はひたすら遠い目をしていた。

突然、外から明るいトーンで声が聞こえた。

「ジュノいる？」

やってきたのは、オーストラリアの病院にいたのに何故かフランス語混じりで話す奇妙な医師、天城雪彦その人であった。

「はい？ 天城先生。なにか御用ですか」世良はソファから起き上がって、天城と向き合った。

「はいこれ。おつかいだ。藤原婦長に渡しておいて」

そう言っただけで天城は、手に持っていた書類を世良へ渡した。

「はあ」

手ぶらになったとたん、白衣のポケットに手を入れた天城は、いい加減自分で持つて行けないのか、と言いたげな世良をよそに、遅めの昼食を頬張る花房と猫田を見た。

「それにしても、いい匂いさせてるねえ。外まで炊き立ての香りが充満してるよ」

「え、そんなにですか？」

関川先生あたりに怒られるかも、と花房はおびえる。

「まあいいんじゃないの」

天城は気にするそぶりもなく、むしろむしろ遅めの昼食をかきこむ二人を楽しげに見ていた。「やれ食べ損ねただ、当直だからとか何だかんだ理由をつけて、そのお米をみんな食べてるよね。」

大本が仮眠室にあったなんて、僕は今初めて知ったけども」

白衣のポケットに手を入れたまま、天城は仮眠室をうろうろ徘徊しはじめた。

「この人たちは何故か、みんなお米が好きだよね」

天城の言葉に、猫田が反応した。

「日本人の体は、米でできてるんですって」猫田は真顔で天城の方を見た。猫田の言葉を聞いているのかいないのか、返事をせずに、天城は炊飯器のふたをトンツと軽く叩いた。

「まさか、医局の仮眠室に炊飯器が置いてあるなんてね。これが日本の病院のスタンダードなのかい？」

「いや。東城大の、しかもこの心臓外科だけだと思います」世良が答える。

「あ、そうなの？」

天城は不思議そうな顔をしたのち、またぶらぶらと部屋を散策した。そして部屋のわきに置いてある米袋に、天城は視線をやった。

「お米は各々で持ち寄ってるの？」

「色々あって、佐伯先生が届けて下さるんです」

「ムッシュが？ あれであの人も案外太っ腹なんだなあ」

「まあ、はい……」

佐伯が自分で米を買って、仮眠室に届けているのではないと思っただが、事情を説明するのもややこしくなる気がして、花房は何も言わなかった。

いま二人のお腹に入っていたのは、ここ静岡から西に遠く離れた出雲のお米である。

渡海が東城大からいなくなったあとも、渡海の母、春江が佐伯宛に時々お米を送ってくれており、佐伯もありがたくそれを受け取っていた。しかし、ミシラングルメ巡りと並行して、大量の米を消費するのは流石に厳しいらしく、いつしか米は心臓外科の医局へ届くようになった。

医局の仮眠室に眠る、渡海が置いていった炊飯器と、出雲のお米が合わさった結果、それらは

昼休憩を逃した花房や猫田を筆頭に、当直の医師や看護師たちのお腹に格納されていくようになった、というのが実際の経緯だった。

「あ、でも。ジュノだけはこのご飯を食べてるのを見たことがないんだよね。もしかして、ジュノは僕と同じくパン派なのかな」ちよっとだけ目を輝かせた天城が世良を見た。

「いや、僕は米派ですよ」

世良にぴしやりと否定され、天城は残念そうな顔をした。そこで、ちょうど鮭おにぎりを食べ終えた花房が、天城に言った。

「世良先生は、この炊飯器を持ち込んだ人と、炊いたご飯を食べる約束をしたそうです。……だから、その人が帰ってくるまで食べない。って、もうかれこれ六年も粘ってらっしゃいます」

「無駄な努力ね」猫田が言った。

天城は目をきょとんとさせて、横目で世良を見た。

「君の指導医だったっていう、トカイ先生？」

「そうです」

「トカイ先生も米派なのか」

「元祖・お米っ子、です」

天城は肩を落とし、再びがっかりした表情を浮かべた。

「それは残念。僕に似てるっていうから、食べ物好みも一緒かなって期待したんだけど」そんな天城を見て、世良は思わず笑みを浮かべる。

「天城先生、渡海先生に似てるのは外見だけです。中身は……そうだな」

世良は腕を組んで少し考えた。

「とりあえず、ギャンブルで患者をオペするかどうかを決めたりはしないですね」

「まあ、普通はしないだろうな」うんうん、と頷く天城を、猫田と花房が怪訝な目で見た。自分が特殊な例だという自覚はあるらしい。

「あと、天城先生は患者さんからお金を巻き上げますが、渡海先生は他の医者から巻き上げていました」

渡海はオベでミスをした医者の方ローをしては、その医者に辞表を書かせ、退職金を巻き上げる、ということを繰り返していた。これが原因で東城大を去っていった医者の数は、両手でも足りない。

「トカイ先生もなかなか、いい趣味してるね」

「でもお金に興味はなかったと思います。自分のためには、使ってらっしゃらないようでしたし」渡海が出て行ってから分かったことだったが、医者たちから巻き上げたそのお金は、渡海が何より憎んだ「医療過誤」の被害者団体へ寄付されていた。

「ふーん。お金が好きな僕とは違う、って言いたそうだねえ」

「その通りです」これまたきっぱりと言い放つ世良に、天城は少し寂しそうな表情を見せた。

その瞬間、仮眠室のドアが勢いよく開いた。

「おい！ 誰だ、炊飯器を使ったのは！」

怒鳴り声とともに入ってきたのは、関川だった。その剣幕に、花房と猫田は思わず背筋を伸ばす。

「あ、あの……私です」

花房が小さな声で答えた。関川は花房を睨みつけると、鼻を鳴らした。

「何度言ったら分かるんだ。仮眠室で炊飯なんてもってのほかだ！ 匂いが廊下まで漂ってるぞ」

「申し訳ありません……」

花房が頭を下げると、関川は炊飯器に近づいた。

「こんなもの、今すぐ撤去だ！」

「ちょっと待ってください」

世良が立ち上がり、関川の前に立ちはだかった。

「この炊飯器は渡海先生のもんです。勝手に処分するわけにはいきません」

関川は世良を見て、眉をひそめた。

「渡海先生はもういない。さっさと片付けろ」

「戻ってくるまで、ここに置いておくんです」

世良の言葉に、関川は呆れたような表情を浮かべた。

「なんだ世良お前、まだ渡海先生が戻ってくると思ってるのか」

「俺は待ってます。約束したんで」

世良は真剣な眼差しで関川を見つめた。その視線に、関川は一瞬たじろいだ。

「あ、そう……じゃあ、わかった。炊飯器はそのままでもいい。だが使用は禁止。いいな？」

「はい。ありがとうございます」

世良が頭を下げると、関川は鼻を鳴らして部屋を出て行った。部屋に残された面々は、ほっと

胸をなでおろした。

「世良先生、ありがとうございます」

花房が感謝の言葉を述べると、世良は苦笑いを浮かべた。

「いやいや。でも、これからは使用禁止ですからね」

「あいつ、当直のときはこっそり自分も食べてるくせに」

猫田が不満そうな声を上げる。

「それに、このお米は佐伯先生から頂いたものですから……」

花房が言いたいことは、皆うつつら理解していた。この仮眠室の炊飯器で炊くことを、病院長

の佐伯が公認している。

「まあ、当分は大人しくしておいたほうがいいんじゃないかな。関川先生の顔を立てるためにね」
天城がウインクすると、猫田は肩を落とした。

「でも、どうするんですか？ お米はまだたくさんありますし……」

花房が心配そうに言った。そこで、天城が口を開いた。

「そうだ！ この炊飯器、僕に貸してくれない？」

「え？」

「僕が炊いてきてあげよう」

全員が驚いた表情で天城を見つめる。

「だって、もったいないでしょう？ せっかくの美味しいお米なんだから」

「でも、天城先生：パン派なんじゃ……」

世良が言いかけると、天城は首を振った。

「いやいや、パン派だけど、お米だって食べることもあるよ。僕も生まれは日本だからね。それに、みんなが喜ぶなら、僕だってお手伝いしたいよ」

天城の言葉に、花房は目を輝かせた。

「本当ですか？ ありがとうございます！」

世良はと猫田は驚いた表情を浮かべた。渡海とは似て非なるものがあると思っていたが、案外優しい一面があるところは似ているのかもしれない。

「じゃあ明日、僕が炊いたお米を持ってくるからね。楽しみにしていてくれ」
天城の宣言に、花房と猫田は喜びの声を上げた。世良も微笑みを浮かべる。

翌日、天城が炊飯器をそのまま抱えて仮眠室に入ってきた。

「お待たせ」

「わあ、ありがとうございます！」花房が喜んで駆け寄る。猫田も嬉しそうに立ち上がった。

「早速いただきますよう」

天城がジャーを開け、お椀によそい始めた。花房と猫田は期待に胸を膨らませながら、お椀を受け取った。

「いただきます……」二人が口に運んだ瞬間、その表情が凍りついた。

「あのう……天城先生」花房が恐る恐る言った。

「どうかした？」

「これって、お米……ですよね？」

天城は首を傾げた。「そうだけど？」

猫田が一口噛んで、顔をしかめた。「なんかこう……パサパサして……」

世良も不思議に思い、今日は特例と自分に言い聞かせて、花房のご飯を一口ももらった。そして、驚愕の表情を浮かべた。

「天城先生……これ、どうやって炊いたんですか？」

「普通に炊飯器で炊いたよ？」

「水加減は？」

「水加減？ そんなの気にしたことないな。適当に入れただけだけど」

一同は天城の言葉に絶句した。

「あの……天城先生。お米を炊くのは初めてですか？」世良が恐る恐る尋ねた。

「うん、そうだよ。だって僕、普段はパン派だからね」

天城の無邪気な笑顔に、皆は言葉を失った。

「でも大丈夫だよ。明日はもっと上手に炊けるはずさ。今日は練習だと思って」
天城の言葉に、花房と猫田は苦笑いを浮かべた。

「あの…天城先生」世良が声をかけた。

「なあに？」

「明日からは…：僕が炊きます」

「え？ でも、ジュノは食べないんですよ？」

「はい。でも…：みんなのために炊くくらいはできます」

世良の言葉に、花房と猫田は安堵の表情を浮かべた。

「そっか。じゃあ、お願いしようかな」

天城は少し寂しそうな表情を浮かべたが、すぐに笑顔に戻った。

「でも、僕にもできることがあったら言ってね」

「はい、ありがとうございます」

世良は微笑んで頷いた。

時折医局へ届く出雲の米の出どころが、佐伯病院長その人であることを関川が知るの、それから二週間ほどたった後のことであった。

「オペ室の悪魔」復活の儀 校正前

「ここで長年看護師を務めてくれていた、猫田さんだが、昨日付けで東城大を退職した。なんでもスイスの病院へ、医師としてスカウトがあったそうだ」
佐伯教授から医局員へ告げられたその知らせは、週明けのカンファレンスをいつになくざわつかせた。

外科医の織り成す手早く鮮やかな手術には、オペ看の手際の良い機器だしが必要不可欠だ。そして、猫田には芸術的な手術を支える十分な能力があった。彼女の機器出しの速さに匹敵するのは、佐伯教授と組む藤原師長くらいだ。

執刀医が指示をする前にたいいていの機材は並んでいるし、指示が出たら瞬時に、そして正確に機材を渡してくれるのだ。

それは、この手術が何を目的としていて、次にどのような工程が必要か、全てを理解しているからできる芸当であった。だから、彼女が医師免許を取得していたと聞かされたとき、世良は案外驚くことは無かった。

ただ猫田が居なくなるのは、東城大にとって大きな損失となるだろうに、佐伯教授は彼女を引き留めなかったのだろうか、それとも、彼女が強引に出ていったのだろうか、と不思議に思っていた。

翌日の医局は、昨日のカンファレンスのことなど吹き飛んでしまいかごとく、ざわめきたっていた。

最初の被害者は、朝一で仮眠室から出てきた関川だった。

扉を開けた途端、目の前で不敵な笑みを浮かべて立っているその人物をみて、関川は金縛りにあったように動けなくなつた。

「え、いや……え？　な、なんで？」

「よお、関川大先生。まだ辞表書いてなかったのか」

目の前の人物は、天城よりもワントーン低い声で、薄ら笑いを浮かべている。そんな元祖“オペ室の悪魔”に向かって、関川が声を荒げた。

「な、なんで渡海征司郎がここにいるんだよ！」

渡海は鼻で笑つた。

「そりゃ、先生が心配だね。またオペミスったら揉み消してやらないとな、と思つて」

その言葉に、関川の顔が真っ赤になる。

その時、ちょうど垣谷が出勤してきた。関川とにらみ合う渡海を見て、垣谷も同じように一瞬固まつたが、深呼吸ののち、二人に割って入つた。

「渡海先生あんた、なんでここにいるんだ。教授の許可なしに勝手に手術をしたからここを追ひ出されたんじゃないのか」

垣谷の言葉に、渡海は肩をすくめ、そして突き放すように言つた。

「それはお前らの知るところじゃあ……無いな」

三人がにらみ合いの構図を繰り返しているうちに、ぞろぞろとほかの医局員たちが出勤してきては、早朝の関川と同じような状態になつていった。

の年前に姿を消したはずの渡海征司郎が、突如として現れたのだから、無理もない。の年前と変わらぬその姿に、医局員たちは驚きと混乱の表情を浮かべていた。

突然、渡海は医局内を歩き回り、あれこれと触り始めた。

「なんだ、これ。ちゃちゃっとAI。」

「あ、そいつに触らないでください！」

関川が慌てて制止するが、渡海は、垣谷の机に置かれたスマートスピーカーを手にする。それは、キーボード入力に加えて、音声認識もできるようになった最新AI、その名も『chACHAT AI Mark:2』であった。

「渡海先生、それは垣谷先生の……」

近くにいた、世良の同期の田口が慌てて説明しようとするが、渡海は構わずスピーカーのスイッチを入れた。

「ちょっと聞いてみるか。ねえAIくん、世界で一番優秀な外科医は誰？」
渡海が笑みを浮かべながらAIに話しかける。

「申し訳ありません。個人の能力を比較することは適切ではありません」
スマートスピーカーから饒舌な女性の声が響く。AIの冷静な返答に、渡海は不満そうな表情を浮かべた。

「つまんねえな。もっと面白いこと言えないの」

「渡海先生、それはお悩み相談用のAIなんです」

田口の横にいた、これまた世良の同期の速水が説明を加える。

「悩み相談？ ばっかじゃねえの。医者が悩み相談なんかするわけないだろう」
渡海は鼻で笑う。

「最近の医療現場ではメンタルヘルスケアが重要視されていて……」
再び、スマートスピーカーから女性の声が響いた。

「ふん。お前らみたいなヤワな奴らには必要かもしれないねえな」
そう言って医局員たちをさっと見回したあと、渡海はちゃちゃっとAIの話はそっちのけで、まるで自分の家のようにズカズカと仮眠室へ入っていった。

仮眠室のドアが閉まると、医局員たちはホッと安堵の息を漏らしつつ、がっくりと肩を落とした。天城がやってきたことで無茶苦茶になっている東城大だったが、ここから更にしっちゃんかめっちゃうかになるのか。佐伯教授は承知しているのか？
医局員たちの心配はそれだけではない。いま渡海が入っていったが、仮眠室はどうなるのか。彼がいなくなってしまうと、ようやく本来の役割を果たし始めていた仮眠室が、また彼の独占状態に戻ってしまうのか。また通勤時間を犠牲にして家に帰るか、研修生の寮に駆け込むしかないのか……。皆の頭の中は、これからの生活への不安でいっぱいであった。

しばらくして、医局員たちは小声で話し始めた。

「渡海先生、相変わらずだったな」 関川が歯軋りしながら言う。

「でも、なんか様子が違うような……」 垣谷が首をかしげる。「渡海先生って、こんなに……なんていうか、チャライ感じじゃなかったような」

「そう言われると確かに」 関川はうんうん、と頷いた。

「あんなに饒舌じゃなかったというか、わざわざ垣谷先生にちよっかいをかけるような性格じゃ無かったような気がしますね」

「6年間、どこで何してたんだろう」

「うーん……」

関川が唸っているその時だった。

仮眠室のドアが開き、渡海が出てきた。彼は医局員たちには目もくれず、颯爽と外へ出て行った。

廊下でたまたま鉢合わせたその人物を見て、高階は開いた口が塞がらなかった。

「と……渡海先生？」

高階の声は震えていた。

「よう、高階。相変わらず真面目そうだな」

高階先生の表情が驚きから懐かしさ、そして何か嬉しそうな感じに変わっていくのを渡海はどこか面白そうに見ていた。

「渡海先生、お久しぶりです。まさか戻ってこれるとは……」

高階は言葉を詰まらせた。

「ちょっとした用事があったもんで」

渡海は適当に答えた。

「ということは、長くはいらっしゃらないのですか」

高階の問いには、どことなく寂しさが滲んでいた。渡海は少し気まずそうに答えた。

「住居がすっかり片付いてたわ。どうしたもんかな」

高階の眉間にしわが寄った。

「あの、仮眠室のことを言ってらっしゃるのですたら、あの場所は他の医局員も使用しますので、

不当に占拠して迷惑をかけないようにしていただきたいのですが……」

「へっ、相変わらずだな」渡海は不敵な笑みを浮かべた。

「腕のいい医者は何をやっても許されるんだよ」

渡海の発言に、高階は一瞬ムツとした表情を見せたものの、すぐに和らいで、少し懐かしげに答えた。

「まったく……渡海先生らしいといえば、らしいんですがね」

「ふん……とにかく。俺はこれから用事があるんで失礼しますよ」

渡海は高階の反応に満足した様子で、その場を後にした。

渡海が次に向かったのは、黒崎准教授の居室だった。

ノックをしたのち、渡海が部屋に入ると、黒崎は驚きのあまり椅子から転げ落ちそうになった。

「お前まさか……渡海？」

黒崎の声もまた、高階と同じように震えていた。渡海はわざとらしく、冷たく応じた。

「ご無沙汰しております。黒崎センセ」

渡海が東城大にいた時、黒崎と渡海の関係はお世辞にも良いとは言えなかった。きつと、どの面下げて帰ってきたんだ、とか怒号が飛んでくるのだろうか、と渡海はどこか楽しそうに、黒崎の様子をうかがった。

しかし黒崎は突然席を立ち、渡海の目の前にきて、深々と頭を下げた。

「渡海、その節は本当にすまなかった」

渡海は困惑した。これは予想外の展開だった。

黒崎は続けた。

「お前が出ていった後、事の経緯を佐伯教授からすべて聞いたんだ」

「ペアンのこととも聞いた。お前の父、渡海一郎先生が、佐伯教授をかばって何も言わなかったんだ。私があのレントゲンを摘発しなければ、先生は東城大を追われることはなかった。……本当に済まないことをした」

困惑したままの渡海だったが、深呼吸をしたのち、冷静に答えた。

「……そのレントゲンを見て問題提起するのは、一般的には正しい判断だったと思います」
渡海のその発言に、黒崎は驚いた様子で顔を上げた。

「そう……言ってもらえるのはありがたいが……それでも、どうか謝らせて欲しい」
渡海はどこか困ったような様子で、頭を下げる黒崎をたしなめた。

「先生のお気持ちには分かりました。しかし、……ちよつと用事を思い出しました。また後日でもよろしいですか」

「そうか……、時間が出来たら、いつでも来てくれ。何ならこちらから伺おう」

「ああいや、結構です。とにかく……失礼します」

そう言っただけで部屋を出た渡海の額には、大量の冷や汗が浮かんでいた。

部屋で立ち尽くしていた黒崎は、我に返ってデスクに戻り、先ほどまでやっていた業務の続きを
始めようとして、ふと思つた。

「ん、そういえばあいつ……何しに来たんだ？」

一方その頃。

午前の回診を終えた世良が病院内の廊下を淡々と歩いていたら、廊下の向こうから慌ただしく走ってくる人影が見えた。世良がよく見ると、それは看護師の花房だった。

「世良先生、聞きましたか？ 渡海先生が帰ってきたんです！」

花房は興奮した様子で世良に伝えた。

「ええ、本当？」

世良は疑っている様子だった。

「はい。早朝医局にいらして、関川先生や、垣谷先生がお話をしたそうです。その後仮眠室から出たきり、行方知れずだそうです……」

「はあ……」

花房の興奮した様子とは裏腹に、世良は意外にも冷静な様子だった。世良の反応に戸惑いつつ、花房が尋ねた。

「ねえ、世良先生。お久しぶりのお米、一緒に食べなくていいんですか？」

世良はため息をつきながら答えた。

「確かにね。もうすぐお昼だし、ひとまず炊いてくるか……」

そう言っただけで世良は医局の方へ向かっていった。花房は首をかしげた。

「なんか、世良先生全然驚いてなかったなあ」

そう言っただけで、花房が廊下を歩いていると、懐かしい人影が見えた。

「……え、まさか」

花房は驚いて、その人物に駆け寄った。

「渡海先生！」

「ん、あんたは……世良の」

「世良先生がどうかしましたか？」

「ああ、いや」

渡海が若干戸惑ったように見えたが、気のせいだろうか、花房は思った。

「さっき世良先生が、渡海先生とお昼一緒に食べるって、ご飯を炊きにいかれました。渡海先生も……」

そう言ったとき、花房のお腹からぐうぐうと低い音が鳴った。

「……あんたも食べたか？」

「うう。ありがとうございます。……仕事が片付いたら、そうします」

花房がそういうと、渡海はすこし口元を上げて、そのまま、医局とは反対方向へ歩いていった。

渡海が向かった先は、病院長室——今は東城大のトップに立つ男、佐伯清剛の居城であった。

渡海がノックを二回すると、中からどうぞ、と声が聞こえた。渡海は息をのんで、ガチャリ、とドアを開けた。

院長室のデスクに座り、眼鏡姿で書類を読んでいた佐伯は、渡海を面食らった様子で見て……いや、凝視した。

「……お前は」

「お久しぶりで、佐伯教授」

開いた口が塞がらない様子の佐伯に、渡海は挑発的な口調で言った。

「そんなにおかしいですか、俺が先生に会いにくるのは」

「理事長辞めたと思ったら、いつの間にか東城大の病院長にまでおなりになって、相変わらず偉そうにされているそうですね」

「聞けば、今度は医学会の会長を目指されているとか。教授というのは、どこまでも出世に目が無いものなんですね」

「……教授？ 聞いてます？ それとも俺のことなんてもう忘れちゃったか」

渡海が何を言っても佐伯はぼかんと口を開けたまま、何も言わないので、渡海もとうとう諦めて挑発をやめた。

しばらくの間静寂が流れた。佐伯はその長い沈黙を破って、やっと一言、言い放った。

「……それで、お前は一体何をしているんだ、天城」

きっかけは些細な話題からだった。天城の部屋で、世良は真っ白な人がけのソファに腰掛けて、一人掛けのソファでタブレットを見る天城に話しかけた。

「猫田さん、医師になったんですね。猫田さんがいなくなつて、佐伯外科は大丈夫なんですか」

世良の言葉に、天城は微笑んだ。

「子猫ちゃん……、いや、猫田先生がいなくなつたら、先生たちのオペが間違ひなく遅くなってしまうだろうね」

「そう、ですよね。……佐伯先生は、止めなかったんでしょか」

「止めるも何も、ムッシュからの提案だったみたいだよ」

世良は目を丸くした。

「そうなんですか」

「維新大を辞めてから、猫田先生はずっと医者を目指して日々努力を重ねてきたそうさ。そんな彼女の努力を、ムッシュは支え続けた」

天城は腕を組んだまま、世良を意地悪そうな目で見る。

「……あと、君の指導医の渡海先生も、実習を手伝ってくれたんだってさ」

「え」

「ジュノが研修医として、厳しいご指導を賜っている陰で、猫田先生には優しく秘密のレッスンで指導してくれていたわけだね。渡海先生も隅に置けないねえ」

「いやいや、ちよつと待ってください。ええ……」

情報の整理が追い付いていない世良をよそに、天城は続けた。

「まあそんなことはどうでもいいんだけど。とにかくムッシュとしては、猫田先生が医師免許を無事取得できた今、看護師ではなく、医師としてキャリアを重ねていつて欲しかった。だから引き留めることはしなかったんだね」

「自分の身が苦しくなっても、……本当に、東城大の父親のような人だ」
世良には、なぜか天城が泣いているように見えた。

「……天城先生？」

「ああそうさ。猫田先生、悪魔のような医者を目指しますって言ってたよ。ジュノといい猫田先生といい、渡海先生は本当に慕われてるねえ」

「へ？」

妬いてるんですか。いや、それよりも、いつどのタイミングで、猫田さんとそんな話をしたんですか。そう言いたげな様子の世良をみて、天城は説明した。

「ジュノ。実はね、猫田先生が東城大を出ていくちょうどその時に、この病院入り口で、たまたま先生と会ってね」

「はあ」

「いやいや。ほんとに偶然だったんですか、それ。とは言えない世良は、天城の言葉に静かに頷いた。

「でも僕、彼女には嫌われているようだったからね。最後のお別れの挨拶が僕では心外かもしれないと思って、ささやかなブレゼントをしたんだ」

「ブレゼントですか」

猫田のお気に入りだった、米粉入りのパンでも買って渡したのだろうか、と考えていた世良だったが、意外な回答が返ってきた。

「うん。渡海先生の物真似をしたんだ」

「……え？」

渡海の手術は大抵の場合猫田がオペ看を務めていた。人のコンビは普通〰時間かかる手術が、時間半で終わってしまうこともざらではなかった。

猫田は、理由は分からないが渡海をたいそう慕っていて、渡海もまた、猫田のことを信頼している様子であった。他の医局員にしないような話でも、猫田は何故か知っていることがあった。また、今では誰もが使える仮眠室を、渡海が一人の根城にしていた当時、部屋のベッドで昼寝が出

来るのは猫田だけだった。

そんな二人の關係は、渡海が東城大を出ていった時、猫田だけは未だに連絡をとっているらしい、という噂となり、今も医局員たちの語り草となっていた。

「いやあ、猫田先生が渡海先生のことを慕っていたって話は僕の耳にも入っていたからね。ちょっと、先生のフリをして、エールを送ってみたんだよね」

満面の笑みの天城を見て、世良は呆氣にとられた。

「そしたら猫田先生、とても笑顔で、お世話になりましたって言うてくれてね。僕としてもサービスした甲斐があつたなあと思つたわけさ」

天城の話を聞いて、世良は微笑ましい気持ちになった。

「猫田さんの笑顔ですか、俺も見たかつたなあ」

女版渡海なんて不名誉なあだ名がつくくらい、無愛想な猫田の満面の笑みを、世良は見てみたいと思つた。だけど世良が頑張つて想像しても、あまりイメージが浮かばない。

「それはそうと天城先生、渡海先生の物真似出来るんですか」

世良は天城に問いかけた。

「ジュノやムッシュから、渡海先生がどんな人物かは聞いていたからね、それを元に、それっぽく話してみた。僕と彼は、顔が瓜二つらしいからね。声色を似せれば簡単だ」

世良は感心したような様子で天城を見る。

「例えば？ 実演してみてくださいよ」

「そうだなあ。……あ、じゃあ、のどが渴いたときの一言」

「はい？」

首をかしげる世良をよそに、天城の表情が突然暗くなった。天城はいつもよりワントーン低い声

でこう言った。

「お茶」

「……それを言うなら、“邪魔。”だと思います。」

世良はあきれたような目で天城を見た。

「まあでも確かに、渡海先生っぽさは感じますね。もう少し言い回しを合わせれば……」

「渡海先生になれるかな、僕」

「どんなに似せても、天城先生は天城先生だと思いますけど……」

そこで世良は途中で言葉を止め、何かを思い出したように、軽く眉を上げた。

「猫田さん、最後に渡海先生に会えたような気がして、本当に嬉しかったんでしょね」

世良の言葉に、天城は目を細め、そっと微笑んだ

「……そうだと良いね」

「あ、そうだ」

突然、天城が両手をついた。

「渡海先生が帰ってきたら、皆はどんな反応をするのかな」

いたずらっ子のように目をキラキラさせる天城をみて、世良は嫌な予感がした。

「ねえジュノ、渡海先生のこともっと教えてくれ」

天城はソファから立ち上がって、世良に近づいた。

「彼は一体、どんな人物だったのかな？ 風貌は？ 性格は？ どんな話し方？ 一人称は？

他の先生とは、何か面白いエピソードはない？」

「……へえ。じゃあかつらは用意するとして……スクラブや白衣は？ ああ、この私物って書いて

てる段ボール箱に入ってるのか。じゃあそれを借りるとするか」

「どうなつても知りませんよ、俺は」

「大丈夫大丈夫。ジュノには迷惑かけないから。でも黙っててね」
「……はあ」

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「それで物真似か」

話を聞いた佐伯は、深いため息をついた。

「はい。ムッシュには一発で見抜かれてしまいました」

天城は微妙な表情を浮かべ、肩をすくめた。

「君が来てから、大人しくなっていたこの外科教室も、また賑やかになってきた。そこは感謝している。しかしだな、仮にも新病院のセンター長にもなろうという人間が、医局員をからかうというのは……」

「申し訳ございません」

謝りつつも、反省はしていない様子の天城を見て、佐伯は困った笑みを浮かべた。

「まあ、皆の良い暇つぶしにはなったかもしれないがな」

「え？」天城は顔を上げた。

「渡海のことを懐かしく思っている者も多いんだ。君の突拍子のない行動に、癒されることもあるかもしれない」

「……そうですか」

天城は安堵の表情を浮かべた。

「しかし、たいていの人間はお前の巧妙な物まねで混乱しているだろう。あとできっちり説明しておくように」

「はい、責任を持って対応いたします」

天城は苦笑いしながら頷いた。

「……それにしても、残念だな。他の人たちはうまくだませたんですよ」

病院長室のソファで、紅茶を片手に天城がつぶやいた。

「顔といい、背格好といい、お前と渡海はよく似ているからな。無理もない」

デスクで書類を見ていた佐伯だったが、書類を片付けたのち、天城の座っているソファの向かいに腰掛けた。

「皆はどういうリアクションだったんだ」

「驚いたり、怖がられるのが大半でした。渡海先生という人は、本当に悪魔みたいな人だったんでしょかね」

「まあ、あれの素行は、お世辞にも良いとは言い難かったからな」
そう言いながら、佐伯の表情はどこか悲しげだった。

「でも、たまに喜んでくれる人がいたんです。例えば、高階先生とか。ジュノ……世良先生は、指導医の渡海先生のお話ばかりするし。猫田先生も。慕っている人も多かったんでしょね。外科の腕はピカイチだったとお聞きしていますし」

「……そうか」

天城には、佐伯の表情が和らいだように見えた。

「あと、一番予想外だったのは、黒崎先生ですね。単刀直入に謝られてしまいました」
「ああ」

佐伯はコホン、と咳払いをした。

「……まあ、その話はいったん忘れてくれ。然るべき時が来れば、君にも話すかもしれん」

「まあ、薄々お話は伺ってはいますが……事情があることは分かりますので、私も触れないでおきましょう」

「そうしてもらえると助かる」

——“ブラックペアン”の話はまた今度だな。と天城は思った。

「……話がそれましたが、それで」

「ムッシュは、どうして私だとわかったんです？ 話し方が良くなかったかな」

天城は首を傾げた。

「渡海の表情は複雑なんだ。薄ら暗い目をしていと思うたら、急に慕うような表情になる。……かと思いきや、また今度は一層暗くなつて、更には憎悪の炎が燦つて……」

「なるほど。再現が難しそうだ、まあ、やりがいはあるが」

佐伯の解説に、天城の妙なプロ意識には火が付いたようだった。

「天城よ、いくらお前が努力したとしてもだ。他の医局員は騙せても、私は騙せない」
佐伯は続けた。

「どんなに技巧を凝らしても、お前の顔があいつと瓜二つでも、私には分かる」
「どうして？」

「まず、本人に聞いたら済む話だ」

「なるほど。ムッシュは渡海先生と連絡を取つてらっしゃるんですね」

噂だと猫田先生だったけど、実の所は違ったのか。天城は興味深い目で佐伯を見た。

「まあ……渡海とは、色々縁があるからな。あれが嫌がっても、どうしても関わることはある」

佐伯の方から渡海に一方的に連絡しているのだろうか、と天城は更に興味を深めた。

「そして、一番の理由が他にある」

「というと？」

「長年アイツを見てきた、私の個人的な勘というやつだ」

もったいぶって出てきたその言葉と、不快なまでの佐伯のドヤ顔に、天城は呆れて何も言うことが出来なかった。

その後、教授命令に従って、天城は医局員たちのもとへ、説明という名の謝罪回りに赴いた。謝罪回りという名目ではあったが、天城の表情はどこか楽しげだった。

説明を聞いた医局員たちからは「なんだ」と口々に安堵の声が漏れた。

仮眠室の秩序は保たれた。垣谷と関川の立ち位置も守られた……かもしれない。

高階は呆れたような表情を浮かべたが、どこか嬉しそうでもあった。反対に黒崎は、顔を真っ赤にして、しばらく口も利かない様相であった。

「花房さん、実は……」

最後に、天城は仮眠室で、世良の炊いたご飯を頬張る花房の元へ、説明に行った。花房は驚いた表情を浮かべ、近くにいた世良はため息をついた。

「え？世良先生、気づいてたんですか？」

「いやまあ、どちらかというと僕は協力者の方、というか」

世良が申し訳なさそうに言うと、花房は少し寂しそうな表情を浮かべた。
「そうだったんですか」

世良が攻めるような目で天城を見るが、天城はそっぽを向いて無視した。
花房が俯き、伏し目がちにつぶやいた。

「……でも、ちょっとだけ渡海先生に会えた気がして……嬉しかったです」

（ああ。猫田さんと一緒だ）

世良は、天城の方を再び見た。目を合わせた天城は、どこか嬉しそうに、けど少し寂しげな目をして、カーテンの向こうに目をやった。

明るい陽射しは窓辺を照らし、風に揺れる木々の影がゆらゆらとカーテンに映っている。その奥には、青空の下に白い雲が、どこまでものんびりと浮かんでいた。

秘密の教授室 校正前

東城大学病院の佐伯外科。かつてここで暴れまわっていた問題児・渡海征司郎が姿を消してから6年が経過していた。そんな彼の不在を誰よりも寂しく感じていたのが、今はこの病院の院長となつた、佐伯清剛だつた。

そんな東城大の廊下に、佐伯の重い足音が響く。

「天城のやつ、いったいどこに行つた……」

そんな独り言を呟きながら、佐伯は病院の隅々を探し回っていた。しかし、探している相手の姿はどこにも見当たらない。

ふと、佐伯の頭に一つの場所が浮かんできた。渡海が住み着いていた場所。そう、仮眠室だ。

佐伯は普段めつたに入ることのない、医局の仮眠室のドアに手をかけた。奥まで進むと、渡海が良く寝ころんでいたらしいソファが目に入った。部屋の中は、何年より前に見た時よりも、ずつと整理整頓されていた。よれよれの洗濯物や、机や床に山積みになつた医学書は見る影もなくなり、先住民の痕跡はすっかり薄れていた。

整理整頓の末残されたのであろう、2つの段ボール箱だけが、部屋の隅でひっそりとその存在を主張していた。

「ん？」

段ボール箱の一つが、少し開いているのに気がついた佐伯は、思わず足を止め、ゆっくりとその箱に近づいた。開いた箱の中には、渡海が置いていったと思われる私物が詰まっていた。愛用していたのであろう茶碗と炊飯器、使いかけのボールペン、そして例のレントゲン写真がむき出しになって入っていた。

（封筒にすら入っていないのは管理上いかなものか）
ふと、佐伯の目に奇妙なものが映った。

「……何だこれは」

派手なピンク色の背表紙に、赤い文字で『秘密の教授室』と書かれた、大学ノートより一回り小さいくらいのおおきさの本に、佐伯は目を惹かれ、それを手に取ってまじまじと見つめた。

あの渡海に似つかわしくもないタイトルだと思った。表紙を見ると、桜の散る中で、何者かの手と手が、指が触れる程度に描かれている。

中は～段組みで、文字がずっと並んでいる。どうやら内容は恋愛小説のようだ。

——渡海、あんなすました顔をして、実は恋愛小説なんて趣味があったのか、なんて佐伯は微笑ましく思っていた。そこまではまだよかった。

問題は登場人物である、二人の男性の名前であった。

「私と……渡海……？」

佐伯の顔が見る見る上気していく。しかし、本を開く手を止めることはできなかった。

「どうして渡海が……こんなものを……」

ページをめくる音だけが、静寂な仮眠室に響いた。佐伯の目は、ページの文字を追いつながら、どんどん大きくなっていった。

「『佐伯先生、僕の手術を見ていてください』……『渡海、お前は本当に、私によく尽くしてくれる』……『今夜も来てくれるね、二人きりの手術室へ……』」

佐伯の顔は、もう真っ赤な天狗のお面のようであった。彼の目は本から離れることはなく、二段組みの文字の羅列を優秀な頭脳でもってひも解いていくとする。だが、

「せんせいチューして♪　って、お前、それは流石に無いだろう……」

頭ではフィクションだとわかっていても、現実とは何の関係もないのだとわかっていても、登場人物の名前のせいで、一つ一つセリフを読むたびに見知った顔が浮かんでしまう。

せめて、これが道端に落ちている怪しい本ならまだ良かったが、出所が仮眠室の段ボールときた。佐伯のたくましい想像力は、次第にこの呪物を淡々と読み漁る渡海の姿を生み出した。

「渡海……お前いったい、何でこんなものを……連」

佐伯の心の中で、驚き、戸惑い、様々な感情が渦巻いている、そんな時だった。仮眠室の静寂を破るように、突然ドアが開く音がした。

「あ、佐伯教授！ わざわざこんなところまで、どうかされましたか？」

容赦なく無駄に大きい世良の声に、佐伯は慌てて本を閉じ、背中に隠した。

「あ、ああ……。天城を探していたんだが……」

「天城先生なら、さっき手術控え室に向かわれましたよ」

「そ、そうか……。ありがとうございます」

佐伯は、背中に隠した本をそつと元の段ボール箱に戻すと、慌ただしく仮眠室を出て行った。世良は、やけに落ち着かない様子の佐伯を不思議そうに見送った。

「教授が仮眠室に来るなんて……。何かあったのかな」

仮眠室に残された段ボール箱は、何も知らないかのように、静かにそこに佇んでいた。

院長室に戻ると、佐伯は深い溜息をついた。

佐伯の脳裏には、先ほど仮眠室で見つけた小説の内容、いわゆる佐伯と渡海の愛のシークレットエピソードが飛び交っていた。

「『佐伯先生、俺の心臓も聴診してください』……『渡海、お前の鼓動は力強いな、どれ、私も診てもらおうか……』」

佐伯の顔はまた襟元から耳たぶまで、みるみるうちに赤くなっていた。

「なぜ渡海があんな本を……いやもしかして、そういう、趣味、とか……？」
渡海は実はそっちの趣味があったのだろうか。

「いやしかし、今は多様性の時代だ。受け入れなければ……」

佐伯の頭の中で、様々な可能性が駆け巡る。真面目な性格が災いし、佐伯は渡海の想像上の趣味に理解を示そうと必死になっていた。

「しかし、なぜ私なんだ……まさか、私のことを……？」

佐伯の中で過去の出来事が走馬灯のように蘇る。入局した頃の頃は、期待を込めて敢えて周囲より厳しく指導した日もあった、時に激しく対立した瞬間もあった、6年前のちょうど今頃は、命がけの戦いを繰り広げている真っ最中だった。医局を出ていくときの渡海は、憑き物が落ちたような、それでいてどこか寂しげな目をしているように感じられて……。

「私の何かが、渡海の……その……性的嗜好に影響を……？」

佐伯は顔を両手で覆い、呻いた。

「ああ、渡海……いったい私は、お前の何だったんだ……」

佐伯はみっともなく狼狽していた。きっとこの様子を他の医局員が見たら、また心臓を悪くしたのではないかと心配になっってしまうだろうくらいには。

一方医局では、世良が花房に声をかけていた。

「今朝、仮眠室で教授に会ってさ」

「佐伯教授が仮眠室に？ 珍しいですね」

「俺もそう思う。しかもちよっと様子がヘンだったんだよな。教授の顔が……すごく真剣というか、深刻というか」

「何かあったんでしょうか……」

花房は心配そうな表情を浮かべた。

「では、これより本日のカンファレンスを始める」

黒崎教授の声が会議室に響き渡った。

カンファレンスでの佐伯は完璧な集中力での確な指示を出し、鋭い質問を投げかける。その姿は、まさに「心臓の神さま」と呼ばれるにふさわしいものだった。

「佐伯教授、この症例ですが……」

関川の質問に、佐伯は一切の迷いなく答える。

「この症例は、まず患者の既往歴を考慮に入れる必要がある。特に……」

淀みない説明が続く。医局員たちは、佐伯のいつも通りの冷静な声と威厳のある態度に、安心感と尊敬の念を抱いた。世良が感じた違和感など、微塵も表に出ていなかった。

カンファレンスが終わり、佐伯が退室すると、世良はひとり呟いた。

「やっぱり、気のせいだったのかな」。

大会議室の外では、佐伯が深いため息をついていた。

（あのふざけた小説のせいで、普段の半分程度しか集中できなかったではないか。まったく）
医局員たちによどみな説明をしている間、佐伯の頭の片隅には常に例の小説があった。

関川は小説の中でも渡海に邪険に扱われていたな、とか、世良と高階が渡海にちよっかいをだす怪しげなシーンがあったな、とか、渡海はそんなに誰かに構ってほしいタイプだったのか、とか。まあとにかく「心臓の神さま」にふさわしくない思考が行き来していた。

（渡海……お前、私に何てことをしてくれたんだ……）

完璧な仮面の下で、佐伯の内なる葛藤は、静かに、しかし確実に広がっていた。

東城大学病院の仮眠室。静寂を破るのは、関川のいびきだけだった。

「ふがつ！」

突然目を覚ました関川は、周りを見回した。

「くそつ、また寝過ぎしまった……」

立ち上がろうとした瞬間、目に入ったのは半開きの段ボール箱だった。

「……ん？これ、誰かが漁ったのか？」

好奇心に駆られた関川は、箱の中を覗き込んだ。

これが渡海の私物が詰まったものだということ、関川はよく知っていた。世良と花房にほとんど押し付けたものの、年長者として、仮眠室の整理整頓を任されたのは関川だったからだ。部屋を占拠していた私物たちの中で、確実に実家に送り返せそうなのは返却した。ここに残っ

ているのは炊飯器やら茶碗やら、返すほどの物でもなさそうな私物と、あとはよく分からないレントゲン写真と、これも誰かよく分からないが、四人家族の写った写真ともあったような気がする。

「おや？ これは……」

手に取ったのは、ピンク色の背表紙の本。『秘密の教授室』という文字が、関川の目に飛び込んできた。

「なんだこりや……小説？ 渡海先生が読んだのか？ どれどれ……」

佐伯の時と同様、読み進めるたびに関川の目はどんどん見開かれていった。何だこのいかがわしい小説は。ページをめくる手が止まらない。

『佐伯先生、俺の心の中、覗いてください』……『ああ渡海、私は……』げえっ！　なんだこりや」

関川は思わず本を投げ出しそうになった。しかし、どんな呪物であっても、悪魔の私物に手を出せば何が起るかわかったものではない。関川はいったん深呼吸をしたのち、心を追いつかせて再び読み始めた。

「まさか……渡海先生にこんな趣味が……いや、佐伯教授か……？　確かに、カンファレンスのあと佐伯教授はほんと毎回のよう、渡海先生にちよっかいかけてたし、会長選で東京に出張したときも、自分が倒れたつてのに渡海先生の居場所を気にしてたし……」

関川の頭の中で、想像が暴走する。

「あの佐伯教授が……渡海先生と……まさか……」

その時、仮眠室のドアが開いて、垣谷が入ってきた。

「ん、関川。お前も休憩か。……ん、なんだその全身ピンク色の本は？」

「あ、いや、これは……」

慌てて本を隠そうとする関川だったが、遅かった。垣谷は、関川の手元からひよいと本を取りあげ、表紙を見たあと、中身をばらばらとめくった。

「これは……小説？　しかもこれ、佐伯先生と渡海先生が出てくるのか」
真面目に内容を読むうちに、垣谷の顔が見る見る赤くなっていく。

「げえっ、なんとというか、表紙に違わぬピンク色の内容だな……」
「……これ、渡海先生の段ボール箱から出てきたんです」

「え、じゃあこれ、渡海先生の本ってこと！？」
関川の言葉に垣谷が間髪入れずに反応した。垣谷は目を見開いたまま、しばらく固まった。

「……どうしますか？」
関川が小声で尋ねた。

「どうもこうもないだろ。忘れるんだ。これは見なかったことに……」
垣谷が答えた。

「ああ……」
二人は顔を見合わせ、深いため息をついた。

「……」

佐伯は無言で窓の外を見つめていた。頭の中では、小説の内容と、渡海との思い出が交錯する。
(渡海……お前は一体、何を考えていたんだ……)

佐伯の脳裏に、渡海との様々な記憶が蘇る。

渡海がここに来て間もないころ、彼が難しい症例の手術を成功させた時のこと。

「佐伯先生、俺のやり方になにか文句でもあるんですか」

少しすねたような顔で尋ねる渡海。その目には、わずかに不安と、佐伯の承認を求める色が浮かんでいた。

「いや。お前なりのやり方で構わんよ。患者がいて、医者はまだそれを救う。それだけのことだ」余裕のある素振りを見せつつも、内心ではすっかり、渡海の才能に感心していた。

ある夜遅くまで二人きりで手術の打ち合わせをしていた時のことだ。難しい症例に対して、どうアプローチするのが最適か、真剣な眼差しでもってして、渡海は佐伯に熱く語った。そんな瞳に映る自分の姿に、どこか誇らしさを感じていた。

「この手術、失敗は許されんぞ。分かっているな……渡海」
「分かってますよ」

優しく諭す自分。その時、ほんの一瞬、渡海の頬が赤くなったような……。

（いや待て待て。あの時の渡海の反応は、まさか……）

佐伯は首を振り、妄想を振り払った。

「失礼します」

ノックの音と共に、世良が入ってきた。

「……世良か。どうかしたのか？」

佐伯の声は、いつも通り冷静だった。

「はい、先週入院された、この患者さんの検査結果についてですが……」

世良は、いつもと変わらない佐伯の態度に、先ほどの疑念を払拭しかけていた。

「なるほど。では、こうしよう……」

佐伯は的確な指示を出す。その姿はやはり、「心臓の神さま」そのものだった。

教授室を出た世良は、廊下で関川と垣谷に出くわした。

「お二人とも、どうしたんですか？ 顔色が悪いですけど……」

「いや、なんでもない」「本当に何でもないんだ」

二人は口を揃えて答えた。その様子に、世良の疑念が再び頭をもたげる。

世良が立ち去った後、関川と垣谷は顔を見合わせた。

「なあ、垣谷先生。あの本、どうします？」

「そうだな……やっぱり、仮眠室に戻しておこう。誰も見ないようにしっかりと蓋もして」
「ですよ……」

二人は静かに仮眠室に戻り、小説を元の段ボール箱にしまった。

院内の廊下を歩く世良の頭の中は、佐伯先生の様子と、関川先生と垣谷先生の奇妙な態度でいっぱいだった。

（やっぱり、何かおかしいんだよな）

そんな時、偶然看護師たちの会話が耳に入ってきた。

「そういえば、渡海先生って昔、患者さんから本をもらってたことがあったわよね」

「ああ、ちょっと変わった患者さんだったよね。あれ確か、仮眠室に置いていったんじゃないかって？」

世良は立ち止まった。

(本？ 仮眠室？)

彼の中で、何かがつながり始めた。

一方仮眠室では、大きなあくびと共に、ソファに寝ころんでいた猫田が目を覚ました。

「ふあゝ」

立ち上がろうとした猫田の手が、何かに触れた。

「ん？」

猫田が触れたのは、渡海の私物が入った段ボールだった。部屋の隅にあったはずなのに、いつのまに移動したのか。しかも、雑に封をし直したような痕跡が残っている。

「誰か、中を漁ったのかしら……？ 人の私物なのに、デリカシーが無いわね」

そう独り言を言いながら、猫田は妙にふくらみのある段ボールをじっと見つめた。

「……」

猫田は無言で、いい加減な位置で段ボールに、貼られたガムテープをめくり始めた。自分はノカンというところか。

「これは……」

猫田が手に取ったのは、例の小説だった。

『『秘密の教授室』……？』

好奇心に負け続けの猫田は、小説を手に取り、淡々とページをめくり始めた。

「これ……佐伯先生と渡海先生だわ」

内容が進むにつれ、猫田の目が丸くなった。例にもれず頬が赤くなり、心臓の鼓動が早くなっていく。

『佐伯先生、俺の手術を見てください』……『渡海、お前のその手つきにはいつも惚れ惚れ

する』……きゃっ！」

思わず本を閉じる猫田だったが、すぐにまた開いてしまう。

猫田の頭の中で、現実の佐伯先生と渡海先生の姿と、本の中の二人の姿が交錯する。猫田は日々の業務で見てきた二人の姿を思い返した。

反抗的な態度を取る渡海に、常に不敵な視線を欠かさない佐伯。カンファレンスのたびに、にらみ合う二人。

（ん？ あの二人、こんなに甘い雰囲気を出したことなんて、あつたかしら……）

そして、手術室での二人。真剣な眼差しで術野を見つめる佐伯。冷静に指示を出す渡海。

猫田の知る現実とここに描かれている物語のギャップが大きすぎて、猫田は混乱した。

その時、仮眠室のドアが開いた。

「猫田くん、また昼寝かね」

入ってきたのは、他でもない佐伯だった。

「……！」

猫田は慌てて本を隠そうとするが、遅かった。

「それは……」

佐伯の目が、猫田の手元に向けられる。

「あ、あの……これは……」

「……見せないさい」

震える手で本を差し出す猫田。佐伯は無言で受け取ると、ページをめくらずに内ポケットに忍ばせた。

「……」

「教授……これって……」

「猫田くん」

佐伯の声は、いつになく低く、重かった。

「はい！」

「この本のことは……」

猫田は息を飲んで佐伯の言葉を待つ。

「誰にも言うな。これは、病院長命令だ」

「わ、わかりました……誰にも言いません」

猫田は必死に頷いた。

「ありがとう……すまない」

そう言つて、佐伯は小説を持って仮眠室を出て行った。

「……すまない？」

残された猫田は、動悸が収まらなかった。

午後の業務が終わり、当直前の一休みとして、猫田は再び仮眠室にやってきた。ベッドから例の本が入っていた、「渡海私物」の段ボールをじっと見つめていたその時、世良が仮眠室に入ってきた。

「あれ？ 猫田さん、どうしたんですか？ お顔真つ赤ですよ？」

「えっ……ああ。いや、何でもないわ……」

猫田の慌てぶりに、世良の疑念はさらに深まった。

「そういうば、渡海先生が昔、患者さんから本をもらったって聞いたんですけど……」

猫田の反応に、世良は確信を得た。

（みんなその本を読んで、様子がおかしくなってるんだ）

「猫田さん、その本ご存じなんですか？」

「ええ、まあ」

「どこにあるんですか？」

「さあね。お昼までは仮眠室にあったんだけど」

病院長命令に従って、猫田は適当にとぼけた。猫田の反応を見た世良は、ちょうど昼間、医局で書類を作っていた時に、仮眠室から佐伯が出ていくのを目撃したことを思い出した

（……教授に先を越されちゃったわけか）

世良が悔しそうな顔をしたまま、仮眠室から出て行ったあと、猫田の携帯が震えた。猫田が画面を見るとそこには、渡海からのメッセージが映っていた。

「猫ちゃん。俺の私物に何か変な本が混じっていたらしいが、それはー」
読み終わった猫田は目を細めた。

佐伯清剛は、病院長室の窓際に立ち、夕焼けに染まる空を見つめていた。手には例の小説が握られている。この小説の存在が、佐伯の心を激しく揺さぶっていた。恥ずかしさと罪悪感が入り混じり、胸の内で渦を巻いている。

愛弟子の知られたくなかったであろう秘密。そしてそれを知ってしまった自分。

佐伯は深いため息をついたのち、思い立ったように携帯電話を手にとった。

「……もしもし、渡海か」

「……佐伯先生。どうしたんですか、こんな時間に」

受話器の向こうから聞こえる渡海の声に、佐伯は一瞬躊躇した。

「お前に……確認したいことがある」

「はあ、何ですか？」

「その……『秘密の教授室』という本のことだが……」

「ん、なんか聞いたことあるような……あ」

渡海の声が途切れた。

「そっちにいたときに、患者から、そんなタイトルの本をもらったような記憶があります。で、あれがどうかしましたか？ 正直、ほとんど内容は分からないんですけど」

「……何？」

佐伯の目が大きく見開かれた。

「……読んでいないのか？」

「はい。冒頭ちよつと読んだら、なんかヤバそうだったんで。怖くなって置いてきちゃいました」
佐伯は心の中で深い安堵のため息をついた。危うく、渡海との接し方を考え直さなければならなくなるどころだった。

「そうか。そうだったのか」

そうかそうか、佐伯は朗らかに笑った。渡海はそんな佐伯を不審に思ったようだった。
「それがどうかしたんですか」

「実はな、渡海。その本が仮眠室から出てきてな」

「げ、だれか読んだんですか」

明らかに嫌そうな声色の渡海に、佐伯は少し面白くなってきた。

「少なくとも私は全て読んだ」

「正気か？ 本当に悪趣味なジイさんだな」

嫌悪感をあらわにする様子の渡海に、佐伯のいたずら心はますます刺激された。

「あと、昼間に回収してきたが、昨日までは段ボール箱の上の方で放置されていた。他の連中も読んだかもしれん」

「はあ？ なんて隠してくれなかったんですか」

「いやあ、つい。本を読んで動揺してしまつてな」

最初に本を見つけた時、佐伯が動揺したのは本当だ。

「ちなみに内容は……」

「いや先生。俺、それ以上は聞きたくないですよ」

「まあまあ、いいから聞け。この本ではお前は……」

「もういいって！ ……変な本読んでないで、お得意の論文でも読んだらどうなんです。今月の外科ジャーナルに載つてた手術、なかなか面白かつたですよ」

書くのはからつきしのくせに、相変わらず誰よりも読むのが速いな、と内心佐伯は思った。

「ほう、お前がそういうのなら、今晚でも読むとしようかな」

とその時、佐伯の脳内にまた例の小説の一節が浮かんだ。

「そうそう、そういうやお前が新しい心臓マッサージを思いついたとか何とか言つて、私の家に來

る話も書いてあつたぞ、あれは……」

「……こっちはもう寝る時間なんで、切りますよ、おやすみなさい」

「ああ、おい渡海！ ……良いところだったのに」
電話が切れる音。佐伯は呆れたように受話器を見つめた後、小さく笑った。

猫田が受信したメッセージには、こんなことが書かれていた。

『俺の私物に何か変な本が混じっていたらしいが、読んでないし、読む気もないから。とにかく皆の記憶からも消すように伝えてほしい。てか、覚えてたら地獄に落とす』

渡海らしい文面に、猫田も思わず笑みをこぼした。猫田はそのまま立ち上がり、世良を探しに向かったのだった。

それから数日後、佐伯外科の医局にて、世良がぼそりとつぶやいた。

「みんなが読んだあの本、いったいどんな内容だったんだろう。俺だけ読んでないなんて、ずるいよ……」

「わ、私も読んでないですよ！ その話は忘れましょう。私たち、渡海先生に怒られちゃいます……」

花房が止める。

「渡海先生、ほんとにあの本読んでないのかな」

関川が、机に飾られたマイブラックペアンを見ながら、ボソッと呟いた。

「もう、忘れろって言っただろ」

同じくマイブラックペアンを手入れしながら、垣谷が呆れたように言う。

しかし誰の心の中にも、小説に記された佐伯教授と渡海先生の愛のシークレットレスンコレクションズはしっかり刻まれてしまっていて、そんなに簡単に忘れることはできないのであった。

一方、病院長室では、猫田がソファに腰掛けていた。

「……佐伯先生」

「何だ」

「先生も……本を読まれたんですね？」

猫田の言葉に、佐伯の頬がわずかに赤くなる。

「ま、まあ……な」

「どうでしたか？内容は」

佐伯は咳払いをすると、真面目な顔で答えた。

「医学的に見て、非常に興味深い内容だったよ。特に手術シーンの描写は秀逸だった」

「えー……」

猫田が驚いた顔をする中、佐伯はくすりと笑った。

「冗談だ。まあ……やりすぎな描写が一部多々あったが……そこを除けば、悪くはなかったかな」
佐伯の言葉は決して嘘ではなかった。行き過ぎた距離感ではあったが、自分と渡海が仲睦まじくしている様子が描かれているのは、佐伯にとって、決して嫌なものではなかったのだ。

（まあ、やたら地の文の描写がいかかわしいのと、チューは流石にやりすぎだと思ったがな）

佐伯は窓の外を見つめながら、小さく微笑んだ。

どこか遠くで、渡海が佐伯たちの様子を見守っているような気がした。

（渡海……いつか、ここにお前が戻ってくる日は来るんだろうか）

佐伯は密かに、その日を待っている。

エクストラ…第一発見者 天城雪彦

すべて終わった後のこと、病院長室でふと、佐伯は疑問に思った。

「しかしなぜ、あの段ボール箱は開いていたんだろう。私より先に中を開けた人物がいることになるが……」

佐伯は考えた。そもそもどうして自分は仮眠室に行ったのだったか。そこまで考えたところで、佐伯の脳裏に嫌な予感が走った。

その瞬間、最近東城大にやってきた、渡海と顔が瓜二つ、実は双子の兄でした、とトンデモない設定を持ち込んできた天才外科医、天城雪彦が病院長室へ入ってきた。

開口一番、天城は冷たい口調で言い放った。

「弟を傷物にしたそうですね、佐伯先生」

天城は普段、佐伯のことをムッシュ、と親しみを込めて呼ぶ。しかし今日の天城はまるでオペ中

の時のような至って真剣な表情で、更には怒りをにじませていた。

「よく聞け天城、これは違うんだ」

いやな予感の中、という表情で額に汗をにじませながら、佐伯は天城に事の経緯を説明しようとした。しかし……。

「そんな詭弁は通用しませんよ」

佐伯の言葉に耳を貸す様子もみせず、天城は全く目が笑っていない笑顔で、佐伯に詰め寄るのだった。

（勘弁してくれ……）

渡海が帰ってくるその日を、自分の無実を証明してくれるその日を、佐伯はただただ待っている。

メンタル・ブレイキング・レター

第一章…静かな異変

夜の帳が下りたスリジエハートセンター。昼間の喧騒が嘘のように、廊下には静寂が満ちていた。その静寂を破るように、仮眠室から小さな呻き声が漏れ出ていた。

世良雅司は夜間の見回りを終え、仮眠室の前を通りかかった時、その異様な声に気付いた。普段なら誰かが眠っているだけだと気にも留めないのだが、今夜は違った。その声には、どこか苦しいような響きがあった。

「ん？」

世良は足を止め、そっと仮眠室のドアに耳を寄せた。中からは確かに、誰かが苦しんでいるような声が聞こえてくる。心配になった世良は、おそるおそるドアを開けた。

薄暗い仮眠室の中で、一つのベッドが目に入った。そこには、渡海征司郎の姿があった。普段は冷静沈着な彼の表情が、今は苦悶に歪んでいる。冷や汗で濡れた前髪が額にはりつき、身体は小刻みに震えていた。

「渡海先生？大丈夫ですか？」

世良は慎重に近づき、渡海の肩に手を置こうとした。その瞬間、渡海の口から絞り出すような声が漏れた。

「兄ちゃん、俺は……」

その言葉に、世良は手を止めた。兄ちゃん、とはおそらく天城雪彦——スリジエハートセンターの新病院長として推薦されながら、突如この世を去った天才外科医の名前であろう。天城は、渡

海とは双子の兄弟だった。

世良が躊躇している間に、渡海の目が突然開いた。一瞬の混乱の後、彼の目に意識が戻る。

「世良か」

渡海は、まるで何事もなかったかのように身を起こした。額の汗を拭いながら、彼は世良を見上げた。その目には、先ほどのまでの苦悶の色は微塵も残っていない。

「何だよ」

「いえ、先生が苦しそうだったので。」

世良の言葉に、渡海は眉をひそめた。

「気のせいだ。俺は何ともない」

そう言って立ち上がる渡海に、世良は何も言い返せなかった。渡海は鏡の前で白衣を整えると、何食わぬ顔で仮眠室を出て行った。

世良は後ろ髪を引かれる思いで、その背中を見送った。何か違和感があった。いつもの渡海なら、心配なんかしなかったであろう。それに、そんな言葉をかけられれば、もっと皮肉っぽい言葉を投げかけてきたはずだ。今の態度は、どこか取り繕っているように見えた。

翌日。

手術室の緊張感に満ちた空気の中、渡海の鋭い目が患者の開胸部位を見つめていた。メスを持つ手に力が入り、額には細かい汗が浮かんでいる。

「縫合糸」

渡海の声に応じて、看護師が素早く器具を手渡す。その瞬間、渡海の目に異変が起きた。目の前の鏡に映る自分の姿が、一瞬にして天城の顔に変わったのだ。

「！」

渡海の手が一瞬震えた。幸い、誰も気付かなかったようだ。渡海は深呼吸をし、必死に集中力を取り戻そうとする。

(馬鹿な：幻覚か？)

心の中で自分を叱咤しながら、渡海は手術に集中した。そして、何事もなかったかのように、手術は成功した。

手術室を出た渡海のもとへ、高階がちょうど通りかかった。

「お疲れ様です、渡海先生」

高階の声に、渡海は顔を上げた。

「ああ」

そっけない返事に、高階は少し首を傾げた。

「大丈夫ですか？少し顔色が悪いように見えますが」

渡海は一瞬、言葉に詰まった。しかし、すぐに平静を装って答えた。

「気のせいだ。長時間の手術で少し疲れただけさ」

高階は納得したような表情を浮かべたが、どこか釈然としない様子だった。

「そうですか。でも、無理はなさらないでください。日本に帰ってきて、まだ身体が通りの生活についてきていないのかもしれないかもしれません」

「そうかもな」

渡海は高階の言葉を遮り、さっさと立ち去ろうとした。

「それじゃあ」

高階は渡海の背中を見送りながら、何か引つかかるものを感じていた。普段の渡海なら、もっと皮肉っぽい言葉を返してきたはずだ。今の態度は、どこか：逃げているように見えた。

渡海は急ぐように医局に向かった。誰にも会いたくなかった。自分の中で何かが崩れ始めている。

それを誰にも気付かれたくない。特に、天城の幻影を見てしまったことは…。
仮眠室のドアを開け、中に入ると、渡海はほっと息をついた。誰もいない。静かだ。

しかし、その安堵もつかの間。鏡に映った自分の顔が、再び天城の顔に変わる。渡海は目を閉じ、深く息を吸った。

（何でもない。ただの疲れだ）

目を開けると、鏡には再び自分の顔が映っていた。渡海は安堵のため息をつきながら、椅子に座った。

電子カルテを開き、仕事に集中しようとする渡海だったが、その指は、知らず知らずのうちに震えていた。

第二章…深まる闇

夜の帳が降りた仮眠室。静寂が支配する部屋の中で、ただ一つ、卵を割る音だけが、生活の息吹を感じさせていた。

渡海は無言で卵かけご飯を作り、テーブルに座った。この何気ない日課が、最近では唯一の安らぎになっていた。箸を持ち上げ、口に運ぼうとした瞬間――。

「お前のせいだ」

突如として聞こえた声に、渡海の動きが止まった。

「何だ？」渡海は周囲を見回したが、誰もいない。

「お前のせいで僕は死んだんだ」

今度ははっきりと聞こえた。その声は間違いない、天城のものだった。

「馬鹿な……」渡海は箸を置き、両手で耳を塞いだ。「幻聴だ。気のせいだ」

しかし、声は止まらない。

「お前が生きているのは僕のおかげなのに、なぜ僕が死んで、お前は未だに生きている？」

「うるさい！」渡海は思わず叫んだ。

「あんたはもういない。ここにはいないんだ」

声は次第に大きくなり、渡海の頭の中を埋め尽くしていく。彼は立ち上がり、部屋の中をあてもなく歩き回った。しかし、どこに行っても声は付いてくる。

「やめろ……頼むから……」

渡海は壁に頭をつけ、そっと呟いた。

やがて、声は徐々に小さくなり、消えていった。渡海はゆっくりと体を滑らせ、床に座り込んだ。冷や汗で服がびっしりと濡れている。

渡海の視野にあるものが映る。手紙だ。それは墓参りに行ったときに、兄を看取ってくれたのであろう人が、自分あてだと渡してくれた一通の手紙だった。

兄が亡くなって、もう何年もたって、このセンターに来て、それでも渡海は手紙の封を開けることが出来なかった。

渡海は、自分を救ってくれた兄に、そのことで責められるのが、ひどく怖かった。

翌朝、渡海は普段通りの表情で仮眠室から現れた。誰も、昨夜の出来事など想像もできないだろう。

小児病棟の回診中、渡海は一人の少年の病室を通りがかった。カルテを確認していると、少年が

渡海に気づいた。

「先生おはよう！」

少年の声に渡海が顔を上げた瞬間、息が止まった。その顔が、幼い頃の天城にそっくりだったのだ。

「先生？」

少年の声に、渡海は我に返った。

「あ、ああ：おはよう」

渡海は平静を装おうとしたが、目の端に何かが映った。振り向くと、廊下に天城が立っていた。幽霊のように透き通っているその姿は、渡海をじっと見つめている。

（幻覚だ。幻覚に過ぎない）

渡海は必死に自分に言い聞かせた。深呼吸をし、再び少年に向き直る。

「具合はどうだ？」

渡海は通常通りの診察を続けようとした。しかし、その声は少し震えていた。幸い、少年は気づかなかったようだ。

診察を終え、渡海は急ぐように病室を出た。廊下には誰もいない。天城の姿も消えていた。渡海は壁に寄りかかり、大きく息を吐いた。

「渡海先生？」

突然の声に、渡海は思わず体を強張らせた。振り向くと、そこには世良が立っていた。

「どうかしましたか？ 顔色が悪いようですが」

「気のせいだ」渡海は素っ気なく答えた。「それより、お前こそどうした？」

世良は少し戸惑ったように渡海を見つめた。

「いえ、先日の夜のことが気になって…」

「あれか」渡海は世良の言葉を遮った。「言っただろう。何でもない」と

「はい、でも…」

「くだらないこと気にしてる暇があったら、さっさと仕事に戻れ」

冷たく言い放つ渡海に、世良は何か言いかけたが、結局黙って頷き、その場を去った。

渡海は世良の背中を、複雑そうな面持ちで黙って見送った。

その夜、渡海は医局に残っていた。誰もいない静かな空間で、彼は黙々とカルテを見つめていた。しかし、その目は焦点が合っていない。

「うるさい…」渡海は小さく呟いた。「もう、やめてくれ…」

廊下を歩いていた猫田は、医局の中から聞こえてくる声に足を止めた。ドアの隙間から覗くと、そこには一人呟きながら資料を読む渡海の姿があった。

(渡海先生…?)

猫田は声をかけようか迷った。しかし、渡海の異様な様子に、何か言葉を失ってしまう。

「もう、消えろ！」

突然の大きな声に、猫田は思わず後ずさりした。しかし、医局の中には渡海一人しかない。

(一体、誰と話しているんだろう…)

猫田は不安を感じながらも、声をかけることができずにその場を立ち去った。

医局の中で、渡海は額に手を当て、深くため息をついた。(もう限界か…)

窓の外を見ると、そこには天城の姿が映っていた。渡海は目を閉じ、強く瞼を押さえた。

闇は深く、そして静かに渡海を包み込んでいった。

第三章…周囲の気づき

スリジエハートセンターの手術室。美しい海を背景にしながらも、緊張感が満ち溢れる空間の中、渡海の鋭い眼差しは真っ直ぐに患者の開胸部位を捉えていた。今日の手術は難しい症例だ。成功すればセンターの今後にも大きな影響を与える可能性がある。

「サンゼロ」

渡海の声に応じて、看護師が素早く器具を手渡す。その瞬間、渡海の視界が歪んだ。目の前の患者の顔が、天城の顔に変わったのだ。

(くそっ、今か…)

渡海は歯を食いしばり、幻覚を振り払おうとする。しかし、天城の顔は消えない。それどころか、口を開いて話し始めた。

「なぜ俺を殺したんだ、征司郎」

「…」

渡海の手が震え始める。額には冷や汗が浮かび、呼吸が乱れる。

「渡海先生？」

世良の声が遠くから聞こえる。しかし、渡海にはそれどころではない。天城の声が、頭の中で反響している。

「お前が僕を見殺しにした。お前のせいで僕は…」

「渡海先生！大丈夫ですか？」

世良の声が、さらに切迫感を増す。渡海は現実引き戻された。目の前には、開胸されたままの患者。そして、不安そうな表情で自分を見つめるスタッフたち。

渡海は深く息を吐き、決断を下した。

「高階を呼べ」

「え？」

「早く！」

渡海の強い口調に、誰も逆らえなかった。数分後、高階がオペ室に駆け込んできた。

「どうしました、渡海先生？」

渡海は無言で手袋を外し、高階に向き直った。

「後は任せた」

「え？ちよっと待ってください。一体何が……」

しかし、渡海は高階の言葉を遮り、そのまま手術室を出て行った。残されたスタッフたちは、呆然とその背中を見送った。

「高階センチター長、どうしましょう？」

世良が不安そうに尋ねる。

高階は一瞬考え込んだ後、決意を固めたように言った。

「このまま閉胸するわけにはいかない。私も症例検討には出ていたからね、オペ自体は可能だ。続行しよう。私が執刀する」

手術室の外、渡海は壁に寄りかかり、大きく息を吐いた。

頭の中では、まだ天城の声が響いていた。

数時間後、高階は無事に手術を終えた。疲れた表情で医局に戻ると、そこには元上司、医学会会長の、佐伯清剛が待っていた。

「佐伯先生」

「高階君、話を聞いたよ。渡海のことだ」

高階は深いため息をついた。

「はい。今日も、手術中に、突然オペを放棄して出て行ってしまつて……」

佐伯は黙って高階の話を聞いていた。

「メールにも書きましたが、最近の渡海先生、様子がおかしいんです。声をかけてもボーッとしたり、かと思えば独り言を言っていたり……」

しばらくして、佐伯がゆっくりと口を開いた。

「それについてだが、思い当たる節がないわけではない」

佐伯は椅子に座り、高階を見上げた。

「それは一体なんですか」

「……あいつの双子の兄、天城のことだ」

「天城先生が……？」

高階は目を細めた。天城とは医療に対する考え方の違いからしばしば対立することもあった。このスリジェンターのセンター長は、本来天城であるはずだったが、彼の疲れ果てた心臓はそれを許さず、結果的に高階がセンター長の立場を手に入れる形となった。

「渡海は天城に負い目を感じているのだと思う」

高階の目が大きく見開かれた。天城に負い目を感じているのは、他ならぬ自分自身だったからだ。

「なぜ、渡海先生が？」

「すまんが、そこは詳しくは言えない。しかしその負い目が、今の渡海を苦しめているのだと、私は思う」

何かあるとは思ったが、高階は黙って佐伯の言葉を受け止めた。佐伯はゆっくりと頷いた。

「私から渡海に話をしてみよう」

「お願いします」高階は深々と頭を下げた。

その夜、渡海はセンターの屋上にいた。昼間はオレンジと赤の屋根の縁が、青空を彩る華やかな空間も、夜はその色を暗闇に染めてしまつて、微かな星々が、無機質な白いタイルを照らすのみだった。

冷たい夜風が頬を撫でる。

（このまま治らなかつたら、医者を辞めることになるんだろうか）

そう思った瞬間、背後から声がした。

「渡海」

振り返ると、そこには佐伯が立っていた。

「佐伯先生……どうして」

佐伯は渡海の隣に立ち、夜景を眺めた。

「高階君から聞いたよ。今日の手術のこと」

「……申し訳ありません」

渡海は低い声で言った。

「謝罪を求めているわけじゃない」

佐伯は優しく言った。

「お前の様子が最近おかしいと高階くんから相談があつて、ここに來たんだ。さつき世良君にも会つたよ。最近何かに怯えているように見える、と彼は言つていた」

「……」

「間違つていたらいいんだが、お前、もしかして天城のことが見えるんじゃないのか」

渡海は長い間黙っていた。そして、ようやく口を開いた。

「先週、仮眠室でふと鏡をみたら、そこに兄が映っているように見えました。自分たちは双子だから、気のせいだと思ったんです。実際、瞬きしたら兄は居なくなっていて、俺の顔が映っていました。でも、それが始まりでした」

「それから……兄が、天城が時々見えるようになりました」
佐伯は驚いた様子も見せず、静かに聞いていた。

「幻聴も聞こえる。兄の声が……俺を責め続けているんです」
渡海の声が震えていた。佐伯はゆっくりと手を伸ばし、渡海の肩に置いた。

「渡海、お前は一人じゃない」

渡海は佐伯を見上げた。その目には、涙が光っていた。

「でも、俺は……」

「私が何とかする」

佐伯は両手で渡海の肩を包んだ。

夜風が二人の間を吹き抜けていく。渡海は深く息を吐いた。

第四章…崩壊の縁

スリジエハートセンターの廊下は、いつもより静かだった。渡海征司郎は、まるで何事もなかったかのように颯爽と歩いていった。しかし、その表情には僅かな緊張が漂っていた。

佐伯先生との会話から数日が経っていた。休養を勧められたにもかかわらず、渡海は通常通り仕

事を続けていた。いや、むしろ以前にも増して熱心に働いていた。

「渡海先生、この患者さんの症状なんですが……」

世良が声をかけてきた。渡海は一瞬、目を閉じて深呼吸をした。

「どれ」

カルテを受け取り、素早く目を通す。その間も、頭の中では天城の声が響いていた。

（お前は逃げているだけだ、征司郎）

「……この患者は、心臓カテーテル検査を行う必要がある」

渡海は淡々と言った。

「はい、わかりました」

世良は少し躊躇いながら続けた。

「それと、渡海先生。最近お疲れのようですが……」

「気のせいだ」

渡海は冷たく言い放った。

「それより、早くその検査の準備をしろ」

世良は何か言いかけたが、結局黙ってうなずき、その場を去った。

渡海は壁に寄りかかり、額に手をやった。頭が割れそうに痛い。そして、その痛みとともに、幻

覚がより鮮明になっていく。

廊下の向こうに、天城が立っていた。

「なぜ逃げる？なぜ真実から目を背ける？」

「うるさい……」

渡海は小さく呟いた。

「渡海先生？」

高階の声に、渡海は我に返った。目の前には心配そうな顔をした高階が立っていた。天城の姿はもうそこにはない。

「どうかしましたか？」

「いや、何でもない」

渡海は平静を装おうとしたが、その声は少し震えていた。

「本当に大丈夫ですか？ 佐伯先生から聞いていますか？」

「高階」

渡海は高階の言葉を遮った。

「心配は無用だ。俺は……」

その時だった。突然、めまいが渡海を襲った。視界が歪み、足元がふらつく。

「渡海先生！」

高階の声が遠くに聞こえる。渡海は意識を保とうと必死だったが、暗闇が迫ってきた。

（ごめんなさい、お兄ちゃん。ごめんなさい……）

渡海の体がゆっくりと崩れ落ちる。高階が慌てて支えようとするが、間に合わない。

床に倒れ込む直前、渡海の目に映ったのは、優しく微笑む天城の姿だった。

「やっと、素直になれたね」

そして、意識が闇に沈んでいった。

目を覚ますと、そこは病室だった。窓から差し込む柔らかな光に、渡海は少し目を細めた。
「気がついたか」

ベッドの横には、佐伯が座っていた。

「佐伯先生……」

渡海は起き上がりとしたが、佐伯に制止された。

「無理するな。お前は倒れたんだ」

渡海は天井を見つめたまま、静かに言った。

「申し訳ありません。また迷惑をかけて……」

「前も言ったが、謝る必要はない」 佐伯は優しく言った。

「むしろ、話をする時間ができてよかった」

渡海は黙っていた。佐伯はため息をつき、続けた。

「天城はお前になんと言っているんだ、お前を責めているのか」

「……」

「お前は何も悪くない。言っただろう」

渡海は目を閉じた。長い沈黙の後、ようやく口を開いた。

「兄ちゃんは、雪彦は、俺のことをどう思っていたのかわからない」

嗅ぎまわられて邪魔だ、なんて強がっていたけれど、本当は恐ろしくて仕方がなかった。渡海は、

大好きな兄をこれ以上苦しめたくはなかった。

だけれども、兄は真相を知ってしまった。

渡海は佐伯に言った。

「墓参りに行ったら、手紙をもらったんです。自分が亡くなったら、俺に渡すように、との遺言だったそうです」

佐伯は静かに聞いていた。

「俺はその手紙を開けられなかった。どんなに恨まれても仕方がないと思った。か怖くて、数年

たった今でも開けられない。かといって、捨てることも出来ない」
渡海の声が震えていた。

佐伯は深く息を吐いた。そして、ゆっくりと言った。

「渡海、お前は間違っている」

渡海は驚いて佐伯を見た。

「お前が病室を出ていつてしばらくして、天城は目を覚ました」

「病室を訪れた私に、天城はこう言った」

佐伯は渡海のことをしっかりと見つめた。

「『大好きな弟が来てくれたそうですね』」

渡海が目が大きく見開かれた。

「天城は、最後までお前のことを信じ、愛していた。彼はお前を恨んでなどいなかったんだよ」
「でも」

「手紙、どこにあるんだ、持ってきてやる」

「……仮眠室に」

「待っている」

「征司郎。この手紙を読むころには僕は亡くなっているだろう……って一度これ、書いてみたかったんだよね。」

まあそれはいいとして、僕の双子の弟だから、もし僕がお前の立場だったら、この手紙は何年も怖くてあけられない、もしくは一生封を開けないまま封印されるんじゃないかと思っている、どうかな？ 当たっていたら嬉しいな、早く開けてくれた方がもっと嬉しいけどね。

「
渡海の頬を、涙が伝い落ちた。長年抱え続けてきた重荷が、少しずつ軽くなっていくのを感じる。

「どうだ、渡海。天城はお前を恨んでないなかっただろう？」

渡海は真剣な表情で佐伯を見た。「はい。ただ…」

「何かあるのか？」

「俺に、まだ医者を続ける資格があるのでしょうか」渡海は静かに尋ねた。

佐伯は優しく微笑んだ。「渡海、お前は優秀な医者だ。そして何より、人間として成長した」

「先生…」

「お前の経験は、きつと患者たちの心の支えになる。そして、若い医者たちの良い手本にもなるだろう」

渡海は深く息を吐いた。そして、決意を固めたように言った。「分かりました。もう一度、最初からやり直します」

佐伯は満足そうに頷いた。

その時、ドアがノックされ、高階、世良、猫田が入ってきた。

「失礼します」高階が言った。「渡海先生の様子が気になって…」

渡海は涙を拭いながら、微かに笑みを浮かべた。

「皆、すまない。心配をかけて」

世良が前に出て、力強く言った。「渡海先生、私たちがいます。一緒に乗り越えましょう」
猫田も頷いた。「そうですよ。先生がいないと、この病院はダメになっちゃいます」

高階は黙って

微笑んでいたが、その目には決意の色が宿っていた。

渡海は皆の顔を見回した。そして、ふと気づいた。部屋隅に、天城が立っている。しかし今回は、その表情は穏やかで、優しい笑みを浮かべていた。

（お前には、たくさんの仲間がいるんだね、征司郎）

天城の声が、渡海の心に響いた。そして、その姿はゆっくりと消えていった。

渡海は深く息を吐いた。まだ完全に回復したわけではない。しかし、一步前に進む勇気が湧いてきた。

部屋に満ちた温かな空気が、新たな始まりを告げているようだった。

翌日、渡海はスリジェハートセンターに戻ってきた。

医局に入ると、そこには世良、猫田、高階が待っていた。

「おかえりなさい、渡海先生」世良が笑顔で言った。

猫田も嬉しそうに頷いている。高階は黙って微笑んでいたが、その目には喜びの色が宿っていた。

渡海は一瞬言葉に詰まったが、すぐに落ち着いた様子で答えた。「ああ、戻ってきたぞ」

その時、ナースステーションから看護師が駆け込んできた。

「先生方、緊急患者です！」

渡海は一瞬躊躇したが、すぐに表情を引き締めた。

「詳細は？」

看護師が状況を説明する間、渡海の頭の中で天城の声が聞こえた。

（がんばれ、征司郎。お前ならできる）

渡海は小さく頷いた。

「分かった。すぐに処置室に向かう」

渡海が歩き出すと、世良たちも後に続いた。

「渡海先生、私たちもサポートします」世良が言った。

渡海は振り返り、皆の顔を見た。そこには、信頼と期待の眼差しが向けられていた。

「ああ、頼む」渡海は静かに、しかし力強く言った。

彼らが廊下を走り去る姿を、佐伯が遠くから見守っていた。その表情には、安堵と誇りが浮かんでいた。

処置室に向かう途中、渡海は窓に映る自分の姿を一瞬見た。そこには、医者としての自信を取り戻した渡海の姿があった。そして、その隣には天城の幻影が立っていた。しかし今回は、その表情は穏やかで、優しい笑みを浮かべていた。

渡海は小さく微笑んだ。もう、幻影を恐れる必要はない。天城は今、彼を見守り、支える存在になったのだ。

「行くぞ」渡海は静かに呟いた。

新たな一歩を踏み出す渡海。その背中には、仲間たちの、そして天城の想いが込められていた。

天才外科医の双子な日々

第一章…予期せぬ再会

海を見下ろす崖の上に聳え立つスリジエハートセンター。全面ガラス張りの近代的な外観は、まるで未来から取り出してきたかのようだった。そんな未来的なセンターにも、もちろん医局員用の仮眠室はあった。しかもなんと2つ。

ただしそのうちの一つは、ほとんどある人物の居室同然であった。

「その計画書で、本当にオペをするつもりなんだったら、辞表と一億二千万、きっちり用意しておくことだな」

仮眠室の1つを丸々自分の部屋のように占拠しているこの男、渡海征司郎は、いつものように皮肉たっぷりの口調で、かつての東城大時代に、自分が指導していた元研修医をなじった。しかし世良は困惑するどころかどこか嬉しそうだった。

「この、付箋つけて下さった部分の検討が甘いということですね」

「……」

「やり直します。ありがとうございます。渡海先生」

六年前のしおらしさが打って変わって、ふてぶてしくなったものである。

(……でも、嬉しそうにするのは意味が分からん)

渡海は気味話が悪そうな表情をしてそっぽを向いた。

渡海は冷蔵庫から卵パックを取り出し、よそつてあったご飯の上に生卵を載せた。醤油をかけ、箸で白身と黄身をかき混ぜる。渡海はたいてい、この卵かけご飯しか食べない。

「渡海先生、僕も食べていいですか」

世良の言葉に、返事はない。

「残念。では、僕は往診があるので失礼します。あと今日は手術がありますので、準備が出来たらまた呼びに来ますね」

「……おまえ、神経だけはどんどん図太くなっていくな」

「僕もいろんな人の背中を見て、育ってきたってことですよ」

「……ああそう」

箸を片手に、渡海は世良を見送った。

仮眠室のドアが閉まったその時だった。

「やあ、征四郎！ 久しぶり！」

突然、頭上から聞こえた声に、渡海は思わず箸を落とした。渡海が驚いて上を見上げると、そこには半透明の、自分によく似た顔が浮かんでいた。

「あんた……死んだんじゃないやなかったのか？」

「うん、死んだよ」

動揺する渡海をよそに、渡海の双子の兄、天城雪彦（の幽霊）は、生前と同じ、相変わらずの陽気な笑顔で答えた。

上杉会長を助けた、あの佐伯先生とエルカノの夢のコラボに加えて、今まで術死ゼロを誇ってきたあの渡海征四郎がオペしたのに、どうしてか不審な死を遂げてしまった天城が、いまは実の弟の目の前で不思議な空中浮遊をしながら、病院の窓の外を指差した。

「でもねえ、桜が咲くまで成仏できないなと思って。せっかく植えた桜だもん。咲いている姿を見たいじゃない？」

天城は渡海の正面に立って、優しく微笑んだ。

「だからそれまでは、君の頭の上で過ごすことにした」

渡海は目を閉じ、深呼吸をした。これは幻覚だ。卵かけご飯を食べすぎたのか？ それとも、世良がこの前持ってきたカタカナがたくさん並ぶどこかの有名なお店のカヌレとやらを食べたのがいけなかったのだろうか。

「違うよ、征四郎。本当に僕だよ」

そう言うと、天城はスツと壁を通り抜けてしまった。

「うわっ」

渡海は思わず声を上げた。

「ほら、幽霊だからこんなこともできるんだ」

渡海は目を見開いた。

「あんた、本当に……」

「うん、本物の幽霊だよ。でも、君以外には見えないみたいだけど」
渡海は深いため息をつく。

「……なぜ俺の所に来た？ 世良や、佐伯先生の方が喜んだらうに」
天城は少し寂しそうな表情を浮かべた。

「だって、僕たち双子じゃない。∞歳で別れて、やっと再会できたと思ったら……ね」

渡海は言葉に詰まった。確かに、天城との再会はつかの間だった。と言うか、渡海は麻酔で眠っている天城の姿しかみていないし、天城に至っては結局一度も今の渡海の姿を見ずに亡くなってしまった。だから、こうやって顔を合わせるのは∞年ぶりであった。流石の渡海も、まさかこ

んな形で再会するとは夢にも思わなかった。

「それにさ」

天城は明るい声で続けた。

「君の手術、見たいんだ。映像はこっそり見てただけど、やっぱり実物をみてみたいよね」

「はあ？ あんた、俺の手術を覗き見る気か？」

「そう言うなよ。僕だって外科医だったんだから」

渡海はため息をついた。

「勝手にしろ。どうせ俺以外には見えないんだろうから」

「やった！」

天城は喜びのあまり、天井まで飛び上がって、頭が半分天井にめり込んだ。渡海は微妙な顔をしておそれを見ていた。

「あとは、せっかく戻ってきたんだから、みんなに会いたいなあ」

天井から戻ってきた天城は、少し寂しそうな表情を浮かべた。

「お前、幽霊なんだぞ。どうやって会うんだよ」

天城は嬉しそうに笑う。

「そこは征四郎に任せるよ」

「はあ？」

「とにかく、これからしばらく征四郎の頭でお世話になるから、どうぞよろしく！」

「勘弁してくれ……」

渡海は再び頭を抱えた。

その時、世良が再び仮眠室に入ってきた。

「渡海先生、次の手術の準備ができました」

「……今行く」

渡海は立ち上がり、白衣のポケットに手を入れた。天城は渡海の頭上をふわふわと漂いながら、

「僕も行く!」と宣言すると、渡海が小声で呟いた。

「静かにしろ。あんまり騒ぐと、俺が精神科行きになるぞ」

世良は不思議そうな顔で渡海を見た。

「渡海先生? 何か言いました?」

「いや、何でもない。……ほら、言わんこっちゃない」

渡海は大きなため息をついた。これから先の生活が、想像以上にカオスになることは間違いないかった。そんな渡海の氣を知ってか知らずか、天城は楽しそうに笑っていた。

「征四郎、これから楽しみだね!」

「ああ、楽しみで仕方がない。まったく」

皮肉めいた物言いではあったが、渡海の口元にも、小さな笑みが浮かんでいた。

第2章・幽霊との同居生活

朝。仮眠室のベッドで渡海が目を覚ますと、天井から見覚えのある顔が覗き込んでいた。

「おはよう征四郎! 今日も一日がんばろうね!」

透き通った姿で、天城雪彦が天井からぶら下がっている。そう、彼は数年前に亡くなったはずの渡海の子の兄だ。しかし今や、渡海にしか見えない幽霊となっていた。

渡海は枕を投げつけた。もちろん、枕は天城の姿をすり抜けて、壁にぶつかった。

「うるせえ。幽霊のくせに朝から元氣すぎるんだよ」

渡海は低い唸り声を上げながら、ゆっくりとベッドから這い出した。

渡海が身支度を整えていると（といつてもくたびれたシャツしか、着替えるものはないのだが）天城が首をかしげた。

「征四郎って、ここに住んでるの？」

「ああ。何か文句でも？」

「いや。でも……家はないの？」

「戦地からそのまま帰ってきたからな。それに、ほとんど帰らないのに、わざわざ家借りるのも面倒だろ」

天城は驚いた表情を浮かべたが、すぐに優しい微笑みに変わった。

「そっか。じゃあ、僕たちルームメイトだね！」

渡海は目を逸らした。

「勝手に決めるな」

そこまで言って、渡海はふと疑問に思った。

ここ数ヶ月、突然やってきて、この空間を我が物顔で占拠しているが、医師用の仮眠室というのは本来、長時間勤務の医師たちが交代で使用するためのものである。そして天城の設計図には、仮眠室を二つ用意しろなんて指示はなかっただろう。なぜこのセクターには仮眠室が二つあるのだろうか。セクター長になった、高階の指示だろうか。あの男は渡海が戻ってくることを想定していたのだろうか。

(想定内、か……)

——“すべては、私の想定内だ”

今は医学会会長となった、ある男の含みのある笑みが、渡海の脳裏をよぎった。

「征四郎は、本当にムツシュのことが好きだねえ」

「は？ てか誰だよムツシュって」

「佐伯先生」

「……は？ なんで」

なんで先生をそんなあだ名で呼ぶのか、俺の心を勝手に読むな、と渡海が言いかけたその時、渡海の中に天城の記憶が流れ込んできた。ちょうど本編九話あたりの、天城豹変シーン集である。

「……お前、佐伯先生になにやってんだよ」

「今となつては悪いことをした。血のつながりもない、戸籍上の子供でもない、本当に赤の他人の僕のために、あんなに親身になつてくれたのに」

兄弟そろつて父親がらみで勘違いして勝手に恨みを募らせていたとは、そんなところまで似なくともいいのに。渡海は思った。

ごめんなさい佐伯先生。そういえば、あの時俺も謝らずに黙って出ていきました。俺たちあなたに迷惑かけてばかりですね。

「そう思ってるんなら、僕の分も謝つてよ」

「断る」

仮眠室とは名ばかりの、渡海の「新居」は、驚くほど雑然としていた。壁には手術スケジュール表が貼られ、小さな机の上には医学書が積み上げられている。ベッドの脇には、たった一つの装飾

品らしきものがあつた。それは、幼い頃の渡海と、その双子の兄・天城雪彦が一緒に写っている、渡海家でも数少ない貴重な写真だつた。

天城は渡海の周りをふわふわと漂いながら、楽しそうに話しかけてくる。

「ねえ征四郎、今日はどんな手術があるの？ 僕、君の手術を見るのが日課になっちゃったよ」

渡海は溜め息をつきながら答えた。

「お前が見たところで何になるんだ。霊安室に戻れよ」

天城は渡海の冷たい言葉にも動じない。

「えー、そんなこと言わないでよ。僕たちルームメイトじゃない」

渡海は目を細めて天城を見た。生前の天城がどんなふるまいだったか、風の噂や周囲の人間からの伝聞でしかないが、確かに、陽気な性格をしているし、自分よりも、下手したら佐伯先生よりも天才肌だ。しかし、渡海はそんな感傷を口に出すつもりはなかった。

「だから、勝手にルームメイト宣言するな。お前は単なる幻覚だ」

朝食は、いつもの卵かけご飯。冷蔵庫から取り出した生卵を、電子レンジで温めたご飯の上に落とす。

「征四郎、毎日同じものばかり食べて飽きないの？」

「うるせえ。お前に食べる資格はないだろ」

渡海は箸で卵を混ぜながら、ちらりと天城を見た。幽霊となった兄が、懐かしそうに卵かけご飯を見つめている。その表情に、渡海は一瞬だけ罪悪感を覚えた。

「……また今度、お前の分も用意してやる」

天城の顔が輝いた。

「本当？ 嬉しい！ ……つて、僕食べられないんだけどね」

「そうだろうな」

渡海は小さく笑った。

朝食を終え、渡海は白衣に袖を通す。完璧な医者 of 装いに身を包み、仮眠室を出る。廊下に出ると、渡海はもう、医者 of 顔になっていた。渡海がエレベーターに乗り込むと。天城も一緒に浮遊してくる。

「ねえ征四郎、このエレベーター、けっこう遅いね」

「お前が重いからだ」渡海は小声で返す。

「何言ってるの？ 幽霊に重さなんてないよ」

「冗談だ」

その時、看護師が声をかけてきた。

「渡海先生？ いま、どなたか話しておられました？」

「いや、独り言だ」渡海は平然と答える。

看護師は首を傾げたが、それ以上は何も言わなかった。

朝のカンファレンス。症例検討会が行われている。

センターの医者が断言する。「この症例は手術不可能です」

渡海は天城の助言を聞きながら反論する。「いや、こうすれば可能だ」

世良が感嘆の声を上げる。「さすが渡海先生！」

天城が不満そうに呟く。「僕のアイデアなのに……」

渡海は小声で返す。「お前の功績は墓石に刻んでおいてやる」

翌日、渡海と世良がオペの準備をしている。

天城が世良の耳元で「ジュノは、相変わらず真面目だねえ」と囁く。

「今、天城先生の声が…」

「気のせいだ」

世良が言うが、渡海は誤魔化す。

天城が世良の手を借りて手術を進めようとするが、何も起こらない。

「お前、触れないんだから」渡海が心の声で天城に伝えた。

「あ、そうだった。じゃあ征四郎、僕の指示通りにオペしてよ」

「断る」

手術室。渡海は手元に集中している。彼の耳には天城の声が聞こえてくる。

「メス」

看護師が黙ってメスを渡す。

天城の声。

「もう少し右から入れたほうがいい」

「うるさいな」

「渡海先生？」「いや、なんでもない」

渡海は小声で返すと、看護師が不思議そうに尋ねる。

渡海は天城の助言通りに角度を調整する。確かに、これなら切る範囲が少なくて済みそうだ。しかし、素直に認めるのは癪だった。

手術はもちろん成功した。渡海の腕前に、彼のオペを見たことのない面々は感嘆の声を上げたが、彼の耳には、天城の「やった！僕たち、最強のコンビだね！」という声しか入ってこなかつ

た。

「渡海先生、さっきのオペ、なんだか天城先生のやり方に似てましたね」
世良の言葉に、渡海はドキッとすると、平静を繕った。

「…気のせいだ」

夜。仮眠室で渡海が仕事をしていると、天城が話しかけてきた。

「征四郎、たまには外で食事でもどう？」

「面倒くさい。それに、お前は食べられないだろう」

「でも、僕だってたまには外の空気を吸いたいよ」

「……お前に呼吸の必要はないだろう」

「もう！ 心の呼吸だよ、心の！」

渡海はため息をつき、「分かったよ」と言っただけで立ち上がった。

センター前の公園のベンチで、渡海は弁当を食べていた。天城はその横でくるくると回りながら、楽しそうに話していた。

「渡海先生？ 珍しいですね、ここで食事なんて」

残業を終え、退勤するところだったらしい世良に見つかった。

「……気分転換だ」

「そうですか。でも、なんだか楽しそうですね。一人でいらっしゃるのに」

「（小声で）一人じゃない」

「え？」

「いや、なんでもない」

深夜。渡海は仮眠室のベッドで眠っていた。天城はそんな渡海の頭上を静かに漂いながら、弟の

寝顔を優しく見つめていた。

「征四郎、本当にありがとう」

天城はつぶやいた。

「君のおかげで、僕はまだここにいられる」

そして、天城は静かに歌い始めた。子守唄のような、懐かしい曲。∞歳で別れる前、二人で歌っていた曲だった。渡海の寝顔には、小さな微笑みが浮かんでいた。

翌朝。

高階

「渡海先生、昨夜は珍しく早く休まれたようですね」

「ああ」

「でも、誰かと話している声が聞こえましたよ。誰かいたんですか？」

「……」

渡海は天城を見上げた。天城は首をかしげ、「僕じゃないよ？」と言った。

渡海は小さく笑った。

「まあ、いいか」

そう言っ、渡海は新たな一日を始めるため、手術室へと向かった。頭上には相変わらず、陽気な天城の姿があった。

二人の奇妙な同居生活。それは、スリジエハートセンターという特殊な空間の中で、静かに、しかし確実に続いていった。渡海にとって、この状況が厄介なのか、それとも心地よいのか。その答えは、彼自身にもまだ分からなかった。

渡海先生と天城先生と、ゆかいな仲間たち

猫田が病院の隅で昼寝中。天城が猫田の周りをうろうろする。

「征四郎、猫田さんを起こしてよ。僕、猫田さんの寝顔を見るの久しぶりで懐かしいな」
「お前な……」

と渡海は言いつつも、猫田を起こす。

「渡海先生？ 珍しいですね、私を起こすなんて」

「子猫ちゃんは、相変わらず昼寝が好きだね」

天城の言葉を真似て言ってみた渡海。

「……なんだか、天城先生みたい」

「真似てみた」

「そう、そう！ 僕の口調そっくりだよ、征四郎！」

「うるさいぞ」

猫田が不思議そうな顔で渡海を見つめる。

ミーティングが終わり、渡海が廊下を歩いていると、垣谷が声をかけてきた。

「渡海先生、なぜ空中で手を振っているんですか？」

渡海は慌てて手を下ろした。天城の悪戯を止めようとして、知らず知らずのうちに手を動かしていたのだ。

「蚊だ」渡海は平然と答えた。

天城は大声で笑う。「ひどい！ 僕が蚊だって！」

一日が終わり、渡海は疲れ果てて仮眠室に戻った。天城も一緒についてきている。

「征四郎、今日は楽しかったね」天城が嬉しそうに言う。

渡海はベッドに倒れ込みながら答えた。「お前は楽しかっただろうな。俺は疲れた」

天城は少し申し訳なさそうな顔をする。「ごめん。でも、みんなの顔を見て。久しぶりに笑顔だったよ」

渡海は黙ってしまった。確かに、普段はストレスの多い病院の中で、今日は皆が笑顔を見せていた。それは、天城の悪戯のおかげかもしれない。

「まあ……たまにはいいか」渡海は小さく呟いた。

天城の顔が輝く。「やった！じゃあ明日も……」

「だめだ」渡海は即座に遮った。「明日からは真面目にやれ」

天城は少し残念そうだったが、すぐに笑顔を取り戻した。「分かったよ。でも、たまには……ね？」

渡海はため息をつきながらも、小さく頷いた。

部屋が静かになり、渡海は目を閉じた。しかし、完全に眠りに落ちる前に、天城の声が聞こえた。

「征四郎、ありがとう。君のおかげで、僕はまだ楽しく過ごせているんだ」

渡海は目を開けずに答えた。「……うるせえ。早く寝ろ」

しかし、その声には優しさが混じっていた。
スリジェハートセンターの夜は更けていく。窓の外では、月の光が海面を優しく照らしていた。
渡海と天城の奇妙な日々は、これからもまだまだ続いていくのだった。

第4章…幽霊の成長

スリジェハートセンターの手術室。緊張感が漂う中、渡海征四郎は難しい心臓手術に挑んでいた。

患者は重度の心臓弁膜症。通常なら開胸手術が必要だが、患者の状態を考慮し、渡海はカテーテルを使用した最小侵襲手術を選択していた。

「さて、ここからが正念場だ」渡海が呟く。

その時、天城雪彦の声が聞こえた。「ねえ征四郎、ちょっと待って」

渡海は眉をひそめた。「今は忙しい。邪魔するな」

しかし、天城の声には普段にない真剣さがあつた。「信じられないかもしれないけど、僕に患者の心臓が見えるんだ。そして……」

渡海は一瞬、手を止めた。「何が見える？」

天城は詳細に説明を始めた。驚いたことに、それは渡海が見ているモニターの映像よりも鮮明で詳細だった。まるで、患者の体内を直接覗き込んでいるかのようだ。

「右心房の裏側に小さな裂け目がある。このままだと……」

渡海は天城の指摘を頭に入れながら、慎重に作業を進めた。そして、天城の言った通りの場所に、確かに異常を発見した。

「……まさか」渡海は小声で呟いた。

手術は予定よりも長引いたが、最終的に大成功。渡海のチームは歓喜に沸いた。

「さすが渡海先生！」世良が感嘆の声を上げる。「どうやってあんな小さな異常を見つけたんですか？」

渡海は平然と答えた。「……天の助けがあつたんだ」

世良は首を傾げたが、それ以上は何も聞かなかった。

手術室を出た渡海は、誰もいない廊下で天城に問いかけた。

「お前、一体何があつたんだ？」

天城は少し困惑した表情を浮かべながら答えた。「わからないんだ。ただ、突然患者の体の中が見

えるようになって……」

渡海は腕を組んで考え込んだ。「幽霊になって、能力が進化したってことか」

「かもしれないね」天城は明るく答えた。「これで僕たち、最強のコンビになれるよ！」

渡海は小さくため息をついた。「はいはい。……でも、助かった」

その日以降、渡海と天城の「共同作業」は続いた。

ある日、渡海は一人で海を見下ろすガラス窓の前に立っていた。天城がそっと寄り添う。

「征四郎、最近楽しそうだね」

「……まあな」

「僕も楽しいよ。こうして一緒に仕事ができるなんて」

渡海は黙ってうなずいた。確かに、天城との「共同作業」は、思いもよらない充実感をもたらしていた。

「お前がいなかったら、見逃していたケースもあったかもしれない」渡海は静かに言った。

天城は嬉しそうに笑う。「やっぱり僕たち、最強のコンビだね！」

渡海「調子に乗るな」

そう言いながらも、渡海の口元には小さな笑みが浮かんでいた。

しかし、この状況を不審に思う者もいた。世良は渡海の様子の変化を敏感に感じ取っていた。

「渡海先生、最近よく独り言を……いや、誰かと話しているように見えるんです」

渡海は平然と答える。「気のせいだ」

世良「でも……」

その時、救急患者の到着を告げるアナウンスが鳴り響いた。

渡海「行くぞ、世良」

世良「はい！」

二人が駆け出す後ろで、天城が叫んだ。「僕も行くよ！」

渡海は小さくつぶやいた。「ああ、頼むぞ」

スリジェハートセンターの日々は、相変わらず忙しく、そして少し不思議な空気に包まれていた。

渡海と天城の「共同作業」は続き、彼らの絆はより深まっていく。

しかし、この状況がいつまで続くのか。そして、周囲の人々はこの変化にどう反応するのか。それは誰にも分からなかった。

第5章…幽霊の本音

スリジェハートセンターの夜は静かだった。渡海征司郎は、いつものように仮眠室のベッドに腰掛けていた。天城雪彦の幽霊は、窓際に浮かんでいた。

「征四郎、外を見てよ」天城が言った。「月がきれいだ」

渡海は無言で立ち上がり、天城の隣に立った。満月の光が海面を銀色に染めている。

「お前、こんなものにも感動するのか」渡海は皮肉っぽく言った。

天城は微笑んだ。「生きている時は、こんな風景を見る余裕もなかったからね」

渡海は黙った。確かに、彼らは常に仕事に追われ、ゆっくりと月を眺める暇などなかった。

「なあ、征四郎」天城が静かに言った。「実は、僕には心残りがあるんだ」

渡海は眉をひそめた。「何だ？」

天城は海を見つめたまま話し始めた。「僕たち、3歳で別れてから、ほとんど一緒に過ごす時間がなかったよね」

渡海は黙ってうなずいた。

「フランスで育った僕と、日本で育った君。全く違う環境で育ったのに、同じ医者を目指して……」天城は続けた。「でも、やっと再会できたと思つたら、僕はこんな形になつてしまつた」

渡海は言葉に詰まつた。確かに、彼らの再会は束の間のものだった。そして今、こんな形で……「本当は、もつと君と一緒に過ごしたかつたんだ」天城の声が震えた。「医者として、ライバルとして、そして……兄弟として」

渡海は咳払いをした。「お前な……」

「ごめん、急に真面目な話をして」天城は笑おうとしたが、その笑顔は少し寂しげだった。

渡海はため息をついた。「別に謝ることはない」

二人は沈黙の中、しばらく月を見つめていた。

「なあ、天城」渡海が突然口を開いた。「お前が幽霊になつたおかげで、俺たちは今こうして一緒にいられるんだ」

天城は驚いた顔で渡海を見た。

「確かに、変な形だけだな」渡海は続けた。「でも、お前のおかげで救えた命もある。それに……」渡海は言葉を詰まらせた。

「それに？」天城が促す。

「……俺も、お前と過ごせて悪くない」渡海は小さな声で言つた。天城の目に涙が浮かんた。「征四郎……」

「泣くな、バカ」渡海は言つたが、その声は優しかった。

その時、ドアをノックする音が聞こえた。

「渡海先生？」世良の声だった。

渡海は慌てて声を張り上げた。「なんだ？」

世良が恐る恐るドアを開けた。「あの……独り言が聞こえたので心配で……」

渡海は平然を装った。「気のせいだ。それより、何か用か？」

世良は躊躇いながら言った。「実は、渡海先生の最近の様子が気になっていて……」

渡海は眉をひそめた。「どういう意味だ？」

「独り言が増えたり、急に笑ったり……それに、手術の時の洞察力が尋常じゃないんです」世良は言った。

渡海は冷静を装いながら答えた。「お前には関係ない」

世良は諦めずに続けた。「でも、先生。もし何か悩みがあるなら……」

その時、天城が渡海の耳元で囁いた。「征四郎、彼は心配してくれているんだよ。少しは本当のことを話してもいいかも」

渡海はため息をついた。「……分かった。実は……」

世良は身を乗り出して聞いた。

「最近、天城のことをよく考えるんだ」渡海は静かに言った。

世良の目が大きく開いた。「天城先生のことですか？」

渡海はうなずいた。「ああ。あいつがいたら、どんな診断をするだろうとか……そんなことを考えながら仕事をしている」

世良は驚いた表情を浮かべた。「そうだったんですか……」

「馬鹿らしいと思うだろう」渡海は言った。

世良は首を横に振った。「いいえ、そんなことはありません。むしろ……素敵だと思います」

渡海は少し驚いた顔をした。

世良は続けた。「天城先生との絆が、渡海先生をさらに素晴らしい医師にしているんですね」

渡海は黙ってうなずいた。

「ありがとうございます、話してくれて」世良は深々と頭を下げた。「では、お休みなさい」

世良が去った後、天城が嬉しそうに言った。「征四郎、良かったね。正直に話して」

渡海は小さく笑った。「まあな」

その夜、渡海は久しぶりに心地よい眠りについた。天城は渡海の寝顔を見守りながら、静かに歌を口ずさんだ。

それは、 ∞ 歳の時に二人で歌っていた子守唄だった。

スリジエハートセンターの夜は更けていく。窓の外では、月の光が海面を優しく照らし続けている。

第の章・幽霊の佐伯教授

スリジエハートセンターに、ある朝突然の来訪者があった。

「佐伯教授だ！」

高階の興奮した声が、スタッフステーションに響き渡る。

渡海征司郎は、その名前を聞いて思わず体を強張らせた。天城雪彦の幽霊は、渡海の横で嬉しそうに跳ね回っている。

「ムッシュだ！ 会いたい！」

天城が興奮気味に言う。渡海は小声で返した。

「何なんだその気取ったあだ名は。静かにしろ。お前は見えないんだぞ」

そのとき、佐伯清剛が颯爽と姿を現した。年齢を感じさせない凛とした佇まいは、相変わらずだった。

「おはよう。今日は、医学会会長として、皆の仕事ぶりを見学させてもらうために来た。みな、

久しぶりだな」

佐伯教授が穏やかな声で挨拶をする。スタッフ全員が深々と頭を下げる中、渡海だけがぶっきらぼうに「よお」と短く返した。佐伯は優しく微笑んだ。

「相変わらずだな。元気にしているか、渡海」

その時、天城が佐伯教授の前に飛び出そうとした。

「ムッシュ、僕もここにいますよ、おかげさまで元気ですよ！」

渡海は慌てて咳払いをして、天城の声をかき消そうとした。しかし、佐伯教授の鋭い目が、一瞬だけ天城のいる方向に向けられたような気がした。

「ほら、見えてないじゃないか」

「うーん、一瞬、目があった気がしたんだがなあ」

佐伯教授が言った。

「渡海お前、最近いつにもまして腕が上がったそうじゃないか」

「別に、いつも通りですよ」

渡海は眉をひそめた。天城が渡海の耳元で囁いた。

「嘘つき。僕のおかげでいつも以上だよ」

「うるせえ」

渡海は小声で返す。佐伯教授は不思議そうな顔をした。

「何か言ったか、渡海？」

「いえ、何も」

その日、佐伯教授は渡海の診察に同行した。

「先生、胸が痛くて……」

「どこが痛い？」

「征四郎、左の第四肋間を見て。微かな雑音があるよ」

渡海は、さりげなく天城の指摘した場所を聴診器で確認する。

「なるほど、ここに問題がありそうですね」渡海が言う。

佐伯教授は感心したように頷いた。「見事な診断だ。しかし……」

佐伯教授は、渡海の横の空間をじっと見つめた。まるで、そこに何かがあるのを感じ取っているかのように。

「渡海。最近、天城君の気配を感じないかね？」

「えっ？」

渡海は驚いて佐伯教授を見た。天城は興奮して叫んだ。

「ムッシュ、僕ここにいますよ！ ほら、あなたの髭をわしゃわしゃしてます！」

「静かにしろ」と渡海は小声で言いながら、佐伯に対しては平静を装って答えた。

「いや。別に」

「そうか……」

佐伯教授は意味深な笑みを浮かべた。

「ねえ征四郎、折角だからさ、佐伯先生の好物のプリンを差し入れてあげよう」

「なんで俺がそんなこと……」

夕方、佐伯教授は渡海を呼び出した。二人は海を見下ろすガラス窓の前に立っていた。渡海はしぶしぶ購入させられたプリンをついでに差し入れた。

「これは……」

渡海は天城の口調を真似て、佐伯に言った。

「佐伯先生、お疲れさまです。甘いものを食べて元氣出してくださいね」

「天城みたいな言い方をするんだな」

「物まねです」

天城は窓をすり抜けては戻ってを繰り返して、喜びの舞を踊っていた。

「やったー、通じた！」

（これでいいのか、俺……）

「渡海。私の気のせいかもしれないが、天城がそこにいるのか？」

渡海は咳払いをして誤魔化そうとしたが、佐伯教授の鋭い視線は逃れられなかった。

「お前が最近、一人でいる時も、誰かと一緒にいるような素振りをすると聞いたのでな。気のせいだろうと思ったが、たしかに今、私も何者かの気配を感じている」佐伯教授が静かに言った。渡海は黙っていた。

「それがもし、天城だとしたら……」

佐伯教授は続けた。

「私は嬉しいよ」

渡海は驚いて佐伯教授を見た。

「俺に、あいつの幽霊が取りついていて言うたなら、あんた信じますか」

「信じられない話だが……不思議と納得できる」

渡海と天城は驚いた顔を見合わせた。佐伯は優しく微笑んだ。

「医学では説明できないこともある。医者が幽霊の話をするのはどうかとも思うが、患者が助かる可能性が少しでも上がるのなら、信じよう」

渡海は言葉に詰まった。そして、ふと天城を見た。天城の目には涙が光っていた。

「佐伯先生……」天城が呟いた。

佐伯教授はその方向を見て、柔らかな笑みを浮かべた。「天城、お前は本当によくやったよ」
渡海と天城は驚愕した。まさか、佐伯教授に天城が見えているのか？

しかし佐伯教授は、それ以上何も言わずに立ち去ろうとした。

「佐伯先生」渡海が呼び止めた。「……ありがとうございます」

佐伯教授は振り返り、温かな笑顔を見せた。「君たち二人なら、きっと素晴らしい未来を切り開けるよ」

そう言って、佐伯教授は去っていった。

渡海と天城は、しばらく呆然と立ち尽くしていた。

「なあ、征四郎」天城が言った。「佐伯先生、僕が見えてたのかな？」

渡海は首を横に振った。「さあな。あの人は、いつだって俺たちの先を行っているからな」

二人は顔を見合わせて、思わず笑みがこぼれた。

その夜、スリジエハートセンターは静けさを取り戻していた。渡海は仮眠室のベッドに横たわり、天城は窓際に浮かんでいた。

「征四郎、佐伯先生の言う通り、僕たちなら何でもできる気がするよ」

渡海は小さくため息をついた。「調子に乗るな。でも……そうかもしれないな」

月明かりが部屋に差し込み、二人の影を優しく包み込んでいた。渡海と天城の新たな挑戦は、まだ始まったばかりだった。

第「章」幽霊の最後の願ひ

スリジエハートセンターの周りに植えられた桜の木々が、ようやくつばみを膨らませ始めていた。春の訪れを告げるその光景を、渡海征司郎は仮眠室の窓から静かに眺めていた。

「もうすぐ桜が咲くね、征四郎」

天城雪彦の声が聞こえた。しかし、その声は以前よりも遠く、かすかに感じられた。

渡海は振り返り、天城を見た。驚いたことに、天城の姿が少し透明になっているように見えた。

「お前……大丈夫か？」渡海の声に、珍しく心配の色が混じった。

天城は優しく微笑んだ。「うん、大丈夫だよ。ただ……」

「ただ？」

「僕、もうすぐ行かなきゃいけないみたいなんだ」

渡海は言葉を失った。これまで当たり前のように側にいた天城が、いなくなる。その現実に、渡海は思わず目を閉じた。

「征四郎、聞いて」天城の声が続く。「最後に一つお願いがあるんだ」

渡海は黙ってうなずいた。

「みんなで最後の手術をしたい。僕の指示で、征四郎が執刀して」

重症患者が運ばれてきて、緊急手術が必要に。渡海、世良、猫田でオペチームを組む。

天城が指示を出し、渡海がそれを声に出して伝える。

途中、渡海と天城の意見が食い違い、口論になる。

「渡海先生、自分と口論してるんですか？」

「…集中しろ」

最終的に、渡海と天城のコンビネーションで難しい手術を成功させる。オペ成功後、天城が徐々に透明になっていく。

「ありがとう、征四郎。みんなに伝えてよ。幸せだったって」

「…分かった」

天城が消える直前、世良が天城の姿をほんの一瞬だけ見る。

「今、天城先生が…」

「気のせいだ」と言いつつ、窓の外を見る。その瞬間、不思議なことが起こった。センターの周りに植えられた桜の木々が、一斉に花を咲かせ始めたのだ。

スタッフたちは驚きの声を上げ、窓の外を見つめた。

「こんな…」世良が呟いた。

「奇跡だ」花房が続いた。

渡海は静かに微笑んだ。そして、天城の方を見た。

天城は涙を浮かべながら、優しく微笑んでいた。

「ありがとう、征四郎」

その姿は、どんどん透明になっていった。

「お前…」渡海は言葉につまった。

「征四郎、ありがとう。君のおかげで、最高の『おまけの人生』が送れたよ」

天城の声が響く。

「これからは一人で頑張れ。でも、僕はいつでも君を見守っているからね」

渡海は必死に感情を抑えながら答えた。

「ああ、分かってる」

天城の姿が消えかけたその時、彼は最後の悪戯を思いついたようだった。

「そうだ征四郎、最後に一つだけ」

「なんだ？」

「」

そう言って、天城の姿は完全に消えた。

渡海は思わず吹き出した。最後まで天城らしい、と思った。

「渡海先生？」

世良が心配そうに声をかけた。

渡海は深呼吸をして、普段の表情に戻った。

「なんでもない。さあ、仕事に戻ろう」

スタツフたちは不思議そうな顔をしながらも、それぞれの持ち場に戻っていった。

その夜、渡海は一人で海を見下ろすガラス窓の前に立っていた。満開の桜が、月明かりに照らされて幻想的に揺れている。

「バカ兄貴……」渡海は小さくつぶやいた。「最後の最後まで俺をからかいやがって」

「でも……ありがとう」

風が吹き、桜の花びらが舞い上がった。それは、天城が最後に見せた笑顔のように、優しく、そして儚かった。渡海は深呼吸をして、仮眠室に戻った。

数日後、渡海がセンターの屋上で一人佇む。世良が近づいてくる。

「渡海先生、最近天城先生の口調をよく真似てましたよね」

「…気のせいだ」

「なんだか天城先生がそばにいるような気がして、嬉しかったです」

「…」
桜の花びらが二人の周りを舞う。

「お前、最後まで面倒な奴だったな」

心の中で渡海が言った。

微かな笑い声が風に乗って聞こえた気がした。

生き別れの兄弟のおはなし

*
*
*
*
*

黄金のニワトリ産卵ショー 校正前。そもそも入れるかどうか

——もう少し、あとほんの少しなのに。

渡海征司郎は長蛇の列の中で、つま先立ちになって前方を窺った。

目当ての新鮮な卵まで、あと〇組。〇組。〇組——。

「申し訳ございません。卵の販売は以上となります」

係員の声が、初夏の空に虚しく響く。渡海は深いため息をつきながら、諦めの悪い手を紙袋に伸ばしかけた財布に添えたまま、その場に立ち尽くした。朝から学会で疲れた体に、これ以上の失望は堪えられない。

今日の発表は、少なくとも表面上は成功したはずだった。世良が一晚中かけて作ってくれたスライドは、きっちりと整理された資料で、データの見せ方も完璧だった。ただ、明らかに必要以上の労力が注ぎ込まれていて、世良の「忠誠心」とでも言うべきものが、妙に痛々しく感じられた。いや、まあそんなことはどうでもよいのだ、問題は卵。この学会に渋々参加した理由が、目の前で無くなってしまったことに、渡海はどうしようもない徒労感を覚えていた。

その猫背をさらにひどくさせて、項垂れたまま渡海が帰ろうとしたその時だった。

渡海の視界に、高級そうなテント席でプリンを食べる佐伯の姿が映った。

二人はハッと目を見開いたのち、佐伯は意味ありげな笑みを浮かべながら、渡海を見つめた。渡海は無言のまま、明らかに殺意が込もった目で佐伯を睨み返した。

しかし佐伯は、まるで気にする様子もなく携帯を取り出すと、渡海にメッセージを送った。
“とりあえず、こっちに来なさい。”

震える携帯の画面を確認したのち、渡海は高級テントへ向かった。佐伯をにらむ視線は鋭いまま
で。

「何でここにいますか」

「それはこっちのセリフだ。……仕事の付き合いでこのイベントの優待券を貰ったんだ。2枚も
らったから、別日に分けて行こうと考えていたんだがな」

（いや、^〇枚チケット渡してる意味を考えてやれよ……）渡海は心の中でツツコミを入れた。

「ほら、ここに座りなさい、私はスタッフさんに声をかけてくるから」

「はあ」

渡海が深いため息と共に座ると、佐伯はくるりと背を向けて立ち去った。すぐに、器に入った生
卵とご飯の入った茶碗を持って戻ってくる。渡海は無言でそれを受け取った。

黄身を白身と共に流し込み、醤油をたらし、箸で軽くかき混ぜる。一口。

「うまい」

その一言に、佐伯は満面の笑みを浮かべた。

「そうだろう、そうだろう。私はプリンが食べたかったんだが、卵かけご飯もあって良かったな」

「このお昼時にプリンだけって、デザートが主食なんですか？」

「そんなわけあるか、さっきまでサンザシの役員と会食だったんだぞ」

「え、じゃあこれも業務中？」

「いや、これは私用だ。イベントの時間に間に合うように直帰した」

佐伯は優雅にプリンをスプーンですくいながら、渡海に視線を向けた。

「お前こそ平日の昼間から何故ここにいるんだ、静岡からはるばる東京散策か？」

「あほか。出張です」

「ええ、あの出不精のお前が？ 珍しい」と佐伯が追及する。それはその通りなので、渡海は少し言葉を濁らせた。

「……センター長さまから、このイベントをご紹介いただきましてね」

「ほう。高階君が？」

「はい。学会に出てこいと。それでスライドを世良に作らせて、適当に話して切り上げてきました」

きつと前日急に押し付けられたんだろ。しかもセンター長公認だから断れない。別に自分が出張に行けるわけでもないのにな。そんなことのために、彼は眠れぬ夜を過ごしたのだろうか。世良の悲哀を想って佐伯は内心同情した。それにしても渡海も渡海だ。よく了承したものだ。どういう風の吹き回しなのか——そんな風に言いたげな佐伯の目線に、気づいた渡海は、静かに話を続けた。

「今度東京で開催される、冠疾患学会に出ていただけませんか」

センター長室に入るやいなや、部屋の主に目もくれず、スリジエセンターの設計図をじっと見つめる渡海に告げられたのは、そんな言葉だった。

「スリジエセンターはまだ出来たてホヤホヤで、名前を知ってもらう必要があるんです」

「他のやつに行かせれば」

「先生のお名前は、名門帝華大でいつものアレをあなたがやったことをきっかけに、じわじわと悪名が広まっておりますので」

いつものアレとは、手術でミスをした医者に一千万吹っ掛けて辞職させる、渡海の十八番である。

「悪名かよ、それ逆効果じゃねえのか」

「悪名は無名に優るといってしょう」

こともなげに言う高階に、渡海は眉をひそめた。そして、続く高階の言葉に、ますます不信感を募らせる。

「とにかく、スリジエセンターをもっともって発展させるには、このセンターの存在を各界の方々に知って頂かなければなりません。用を済ませていただければあとはご自由にして下さって構いませんので」

「ああ別に、病院に戻ってこられても結構なのですが、あいにくその日はオペは一件しか予定がありません。このセンター、まだまだお客さんが少ないのです……」

「あ、そう」

渡海は思う。雪彦お兄ちゃん、すまん、こんなポンコツセンター長で。

「ところで渡海先生、このようなイベントがあるのをご存知ですか」そう言って高階は手元にあったチラシを渡海へ向けてちらつかせた。渡海は興味なさげだったが、内容を見て目付きが変わる。

“ニワトリの産卵ショー！ 黄金の産みたて卵を試食できます。ご飯無料（先着順）

※優待券をお持ちの方は優先的に入場でき、高級ニワトリの卵をふんだんに用いた特製プリンを召し上がっていただけます。”

後半は正直渡海にはどうでもよかったが、“卵試食、ご飯無料”の文字列は魅力的だ。渡海がゴクッと息を飲んだのを高階は見逃さなかった。

「イベント会場は、会議所からも近いし、発表は午前中でしょうから十分間に合うとおもいます

よ。いかがですか。先生」

「……俺、何も話すことなんかありませんけど」

「わかりました。世良先生に打診してみましよう」

スナイプの症例がある程度溜まってきたので、そろそろ論文にまとめなければと思っていたところでした……と高階はしたたかな笑み浮かべた。

「……とまあ、そんなところです」

ああ、可哀想な世良君。天城が生きていれば……生きていれば、もっと沢山のスライドを作らせる羽目になったかもしれない。あいつは公開手術マニアだから、自分の宣伝動画まで編集された可能性もある。……その点に関しては、もしかしたら彼は救われているのかもしれない。まあ、そんなことはいい。佐伯もまた、世良には適度に無関心であった。それにしても。

「どうやら私も、高階くんの手の内に転がされていたようだな」

「はあ？」

「この優待券、サンザシの役員から貰ったんだが……確か、高階くんとも知り合ってたはずだ」佐伯は意味深な笑みを浮かべる。

「待ってください。じゃあ、今日の予定は全部……」

「さあな。私は何も知らんよ」

佐伯は曖昧に肩をすくめた。ついこの間高階にしてやられて、東京暮らしになってしまったこの身分で、更にまた転がされてしまうとはなあ、と佐伯はちよつと感慨深くなっていた。

「ただ、久しぶりに美味しいプリンが食べられて、元氣そうな愛弟子の顔も見られて、私は満足だがね」

渡海は言葉に詰まった。確かに、ここ最近佐伯とゆっくり話す機会はなかった。たまにはこう

いう時間も悪くない。そんな気持ちを否定できない渡海であった。

「それにしても」と佐伯が続ける。「世良くんも随分と成長したものだ」

「世良が？」渡海が首を傾げた。

「『高階先生が来て下さらないと、俺じゃどうにもできないんです！』と、世良くんは無理やり高階君を手術室に連れていったことが、昔あった。私の指示に背いてな」

それは昔、今は東城大の医局長、当時はヒラの医局員だった、関川が初めてのスナイプ手術でミスをした時のことである。結局渡海が代わりに人工弁を摘出することになったので、あの時のことは覚えていた。

「世良君はあの頃、無知と若さであちこち走り回っていた印象だったが」

「……そうですね」

「今じゃそのスナイプで立派な発表資料まで用意できるようになって」

「あいつは、相変わらず人の言うことを素直に聞きすぎるバカです。ただ……」
渡海は少し考えた。

「ただ？」

「今は、それを楽しめるようになったかもしれません」

佐伯は意外そうな表情を浮かべた。

「お前も人のことをよく見るようになったな」

「……余計なお世話です」渡海が素っ気なく返す。

佐伯は軽く笑いながら、立ち上がった。

「で、お前この後どうするんだ。センターへ戻るのか？」

「そのつもりでしたけど？」

「良かったら、これからどこに行かないか」

「それは会長命令ですか？」と渡海は皮肉っぽく言った。

「いや、今日はただの古い知人からの誘いだ」佐伯の目は優しく、どこか父親のような温かみを湛えていて、渡海はそれ以上嫌味を言えなくなつた。

「……まあ、暇だし」

「じゃあ決まりだな」

素直に認めたくはない。だが、この招待券も、学会発表も、全て高階の策略だったのかもしれない。そして、その策略に乗せられたことを、渡海は不思議と後悔していなかった。

午後の陽射しが、テント席の白い天井を淡く照らしていた。
東京の街中、今だけはただの一般人の心人が人混みの中へ溶け込んでいった。

あ
と
が
き